アマガミ αの作る結末

アンリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アマガミ　αの作る結末

【Ｎコード】
Ｎ０４４５Ｎ

【作者名】
アンリ

【あらすじ】
橘さんとヒロイン達の繰り広げるラブコメディーの世界に、オリキャラを混ぜ込んだ作品です。

以前通学中の時間を利用して書き上げたもので、これが初執筆の初投稿です！

よって基本的に駄文で、見る人を不快にさせるだけの文章になっておりますが、時間をドブに捨てたいほど暇を持て余している方のみ、ふらりと立ち寄ってみて下さい。

またこれはオリキャラがそこそこ出る＆性格崩壊している場面が多々あるため、それらに関してＮＧの方も速やかに戻って下さい。

これらの条件ぐらい受け入れたるわ！
という猛者の方だけ、どうぞ、お楽しみ？下さい！

1話（前書き）

しょっぱなからオリキャラ目線で入っていきます！

1話

４月上旬、少し遅れてきた春の陽気が佇む部屋の中で俺は朝飯を作っていた。

時刻はまだ七時前。学生が起き始める時間だろう。

「よし。今日はこんなもんでいいだろ。」

そういって炒めていた野菜を弁当箱に詰め込んでいく。

少し弁当の蓋を開けっ放しにしたまま朝の準備を進めていった。

小さいワンルームなのでそれ程物を置くスペースは無いのだが、それにしても物が置かれてない。

いつもの位置に掛けられた制服を掴み、俺はパッパと制服へと着替えていく。

「やべっ！そろそろ行かねーと！」

家に唯一ある時計をチラッと見て、そろそろいつも出る時間になっていることに気が付いた。

弁当箱に蓋をし、鞄に詰め込んで、もう一度顔を急いで洗ってからそのままの勢いで家を飛び出した。

やべっ…洗面所に鞄忘れたわ…

「おはよーございまーす！」

俺はチャイムを鳴らすと同時に橘家に入っていき、おばさんに会釈しつつ二階へ向かう。

ギシギシとなる階段を登ると、すぐ正面にドアが見えてくる。

そこを通り過ぎ、俺は二階の奥の部屋を目指して更に進んでいった。

二階のとある部屋に勢いよく入ると、いつもと変わらぬ景色が広がっていた。

片付いてない机の上、グシャグシャになり横に放り出された掛け布団、そして相変わらずのマヌケ顔で寝ていやがる目的の人物、橘純一。

背丈は１７０ｃｍ位でルックスはややイケメンだが、突発的な行動や発言からか親しく話す女子こそいるが、甘い噂は聞かない。

モテているということはないはずだ…そのはずだ！

「今日はどうすっかな？」

少し考え込み、とりあえず机の上にあったカッターを手にした……が、流石にダメか…と思い留まり再び置く。

この前は水ぶっかけたし、今日は熱湯に…いやいや５ｋｇダンベルを足のすね辺りに落とすか…

ヘッドホン使って大音量でラジオ体操の曲でも流すか～…でもＣＤ持ってないしな～、など考えていると腹の虫が騒ぎ出した。

「もういいや。」

空腹感により考えるのが急激に面倒くさくなったため、手っ取り早く済むよう純一の腹に蹴りを軽く入れてから居間へ降りていくことにした。

なんか蛙が潰されたような声が聞こえたが気にすることはない。

「いつもすいません。」

テーブルの上に置かれたＴＨＥ日本の朝食（ご飯、味噌汁、焼き鮭、漬け物）を頬張りつつ一緒に卓についているおばさんに礼を告げた。

おばさんの隣には真新しい制服を着ている美也ちゃんが座っている。

美也ちゃんは純一の妹で、背が小さく短く切られた髪の毛が所々跳ねているのが特徴？である。

「純一がいつも怜君に起こしてもらっているからお互い様よ！食費だって貰ってるし！」

「美也もにぃにを起こさなくてすむから楽チンだしねー」

おばさんも美也ちゃんも見た目通り猫みたいにニシシシと笑いながら言ってくれた。

「本当に少ししか出してないんですけどね…」

月々一千円で毎朝の食事提供ってどんな良質物件ですか！

「怜君のお母さんとは小学校時代からの長い付き合いなんだし、気にしないで！」

「たしか輝日東中の二大アイドルとか呼ばれてたんですよね～」

「そうなのよ～！その当時ね～…！！」

俺は巽怜（たつみりょう）、輝日東高校二年の男子だ。

名前を見て分かると思うが純一や美也ちゃんとは兄弟でも何でもない。

そんな俺が朝から橘家に来ている理由は一つ、橘家の朝飯を一緒に頂くからだ。

ある事情から俺は高校入ってすぐ一人暮らしをする事になった。

準備する面倒くささから別に朝飯を食べなくてもいいか、と思ってた所に、昔から家族で仲の良かった橘家のおばさんが、朝食くらいウチで食べればいいじゃない！、と言ってくれた。

もちろんそう言われて嬉しかったが、そんなの申し訳ない、という俺と、気にしなくて良い、というおばさんとの話し合いは一週間ほど続き、結果として『月一千円で毎日の朝食を買う』ということで両者手を打った。

手を打った、といっても俺にとってしかメリットはないのだが…

こうした関係になってすでに一年近くになる。

毎朝栄養のある食事を提供してくれるおばさんには本当に頭が上がらない。

だからってそんなキラキラした目で、

「それで彼女できたの？」

なんて毎朝のように聞かないでほしい。

なんで毎朝自分のモテなさを痛感させられなきゃいけないんだ…

そんなこんなで朝から世間話を選択していると、腹をさすりながら不機嫌さを全開に出した橘純一が降りてきた。

「おう。爽やかな朝だな、純一！」

「爽やかさをむしり取った元凶が何言ってるんだよ…」

「そんなことより早く顔洗ってスッキリしてこいよ！せっかくのハンサム顔が台無しだぞ！」

まぁ怜よりはハンサムだけどね…などぶつぶつ戯れ言（悲しい事実）を冗談混じりに言いつつ洗面所に向かう。

おばさんによって弱らされた俺の心に深く突き刺さる。

（やっぱり顔なのか…）

純一に悪気がないのは分かるのだが、とりあえず殴っておこう。

純一を見送りつつ、そういえば、とふと気になったことを口にしてみた。

「そういや美也ちゃんそろそろ出ないとマズいんじゃないの？」

その一言に、にぃにの寝坊助！とバカにしてた美也ちゃんの表情が

変わった。

「ホントだ〜！！タッツーも早くしないと遅れちゃうよ！」

ガバッと立ち上がり、純一の席に置いてあったこれまた新しいカバンを持つ。

「俺らは新入生とは登校時間違うからね。もう少し大丈夫なんだよ。」

「え〜っ！そんなの聞いてないよ〜！」

美也ちゃんは慌てて準備を始めつつも俺と会話をしている。

おばさんも知っててあえて言わなかったみたいで、ニヤニヤして美也ちゃんを見ている。

「まぁ言う必要ないかなぁ〜って思ってたからね。そんなことより早く出た方がいいんじゃない？」

タッツーのナマケモノ〜！と捨て台詞を吐いて似た者親子は二人して出て行った。

ちなみにおばさんもクラス分けの後に行われる入学式にさえ間に合えばいいので少しは余裕があったのだが、道が分からないと子供みたいなことを美也ちゃんが言い出し、仕方なく着いていくことになった。

もう少しゆっくりしようとしていたおばさんが、ガックリと肩を落としてたな…

てか美也ちゃんは受験どこで受けたんだよ！

二人が出た後、純一はそんな光景を見た所為か、帰ってくるなり、

「もうそんな時間なのか！早く食べなきゃ！」

と一言言いつつ朝食を急いで食べ始めた。

お前も知らなかったのかよ…

純一はとても素直な奴でとても（からかいやすくて）良い奴だ。

人の嘘を簡単に信じ込み、何拍か後で気付き詰め寄ってくる、と言った流れは日常茶飯事だ。

もちろん気付かないまま終わることも少なくない。

なので本当はまだ時間はあったのだが、急に出てきたイタズラ心から純一をからかいたくなるのも仕方ないわけで、

「ご馳走様でした。じゃ、俺は先に行くから。橘君、先行くから遅刻しないよう頑張ってね～！」

と俺は純一を見捨てるフリをして、勢いよく外に向かった。

後ろから何か雑音が聞こえるが気にせず橘家を出た後は、一度鞄を取りに戻ってからゆっくりのんびりと歩きながらいつもとは違う通学路を選択して登校した。

ちなみに純一はその後すぐに家を出て俺に追い付こうと全力で走ったらしく、登校時間３０分前には学校に着いていた。

健康的で良いことだな！

2話（前書き）

ここから本格的にヒロイン達との絡みが増えていきます。

…残念ながら美也はヒロインとして認定されていません。

2話

「はぁ～…めんどくせ～…」

今日は輝日東高校の入学式だ。

今年入学する新入生が新しい高校生活に期待を膨らませてキビキビと体育館の中央へと歩いてくる。

そんな将来楽しみな新入生を見つつ、俺はテキトーに拍手しながら深い溜め息をついていた。

高校二年になってのクラス分けの結果、俺は幼なじみ兼親友である橘純一、梅原正吉、悪友の棚町薫と去年から引き続き同じクラスになった。

純一、梅原の野郎二人は小学校からの付き合いで休み時間になると基本的に連む奴らだ。たまにだが自分達それぞれが吟味したお宝本を校内で見せ合うなど長年一緒にバカやっている。

その所為か（もしくは純粋に三人の成績の事を言ってか）高校一年の時に「C組の3バカカラス」と呼ばれていたが…。

女の皮を被ったもう一人の野郎、薫は中学二年の時に同じクラスになったのをキッカケに仲良く（純一を弄る共犯者に）なった。

男勝りな性格で、全員に分け隔てなく話しかけることや、スタイルが良くオシャレにも気を配っていたことからクラスの人気者になり、結構モテていた。

からかい過ぎて、顔面をぶん殴られ綺麗な弧を描きつつ飛んでいった俺の姿をみんなが見るまでは…

それ以来俺と純一相手だと簡単に手を出すようになり、クラス中から一目置かれていた、というより一歩距離を置かれていた。

近付きすぎると誤爆する恐れがあるのに深入りしたい奴はそうそういない…

といっても持ち前の人当たりの良さで、常に人気者ではあった。

そんな三人と担任である高橋麻耶先生が教室に入ってくるまで春休みの出来事についてのことを話していた。

休み明けの会話なんてこんなもんだろ。

「まぁとりあえず聞いてくれ…俺と先輩の涙無くして語れない悲恋の別れ話を…」

急に梅原が雰囲気を変えて語りかけてきた。

「俺は春休み中バイト三昧で他は殆どグダグダしてたな～」

梅原を見ないように立ち位置を変えて他二人に話す。

「私もそうね。休みの日に服買ったりしただけ。」

薫も梅原に背を向けるように移動する。

「二人とも大変だね～。僕はゲームしたりマンガ読んだり「こら～！お前ら俺の話を聞け～！」」

純一も無視する流れに乗って三人で囲むような立ち位置に変えようとした所で、梅原が割って入ってきた。

「…純一もバイトとか始めりゃいいじゃねーか。」

「まだ無視するか！」

梅原はドンドン五月蝿くなってくる。しょうがなく俺は梅原の相手をしてやった。

「梅原ドンマイ！それで話戻すけど俺のバイト先今バイト募集してるぞ。」

「梅原ドンマイ！でもな～怜を見てると凄く大変そうなんだよね。」

それに習って純一も梅原の相手をしてやる。

「雑に扱うな！」

よっぽど話したいのか、ただ雑な扱いが気に入らないのかは分からないが、梅原は満足してないようだ。

「分かった分かった。聞いてやるから話して良いぜ。」

「そんな簡単に聞かせるもんじゃないんだよ！」

「是非とも梅原さんのお話を聞かせてください。」

面倒くさいがあんまり冷たく当たっていると梅原拗ねちまうから相手してやろう。

「よぅし！じゃあ聞かせてやろう！俺とせんぱ「あっ！高橋先生来たわよ！」先生まで俺の邪魔をするというのか～！」

本当に梅原も面白い奴だな…

タイミング良く高橋先生が来ると、全員が着席し、先生から入学式の説明を受けていたのだが、

「まぁ後輩なんて帰宅部の俺には関係ないか…」

と呟きつつ、机に突っ伏して寝ようとした所、高橋先生に高校二年

登校初日から注意されてしまった。

「コラ！巽君！先生が話しているときは寝ちゃいけない、って習わなかった？」

高橋先生はまたか、と呆れつつも少し意地悪そうに笑いながら注意してきた。

去年度も担任だったため、俺、純一、梅原の三人の事はちゃんと覚えていてくれているだろう

…主に悪評のため…

「あ～…すみません。」

咄嗟だったため面白い回答の一つや二つが出てくることはなく素直に謝るしかなかった。

といっても、別にクラスのおちゃらけ担当でもないため、全くそのことに関しては気にならなかったが。

「これからは気を付けるように。それじゃあ今日の予定だけど…」

素直に謝ってきたことに満足したよう、抜群の笑みを浮かべて話を続けた。

これがあるから高橋先生は男子に大人気なんだよな…

まぁその後、遠くからボソボソと俺のことをバカにしている（と思われる）梅原や薫を睨んでいたら「反省の色が足りない！」と再度叱られ、挙げ句の果てに入学式で二年生の列の最前列に座らされ、監視されるのが決定した。

こういうしっかりした所が女子に人気な所なのかな…

ちなみに純一は一番後ろの席だったためか、寝てるのが気付かれていないどころか、俺の説教中でさえ起きることはなかったそうだ（梅原談）。

純一には後で手痛い制裁（八つ当たり）を加えるしかないようだな…

輝日東の入学式は全校生徒が体育館に集まって行われる。

まず在学生、父母が体育館後方に座り、体育館横中央付近にある扉から入ってきた新入生を拍手で迎え入れる。

新入生はクラス毎に列を作り、そのまま真っ直ぐ体育館中央まで歩

いていき、中央に着くと９０。体の向きを変えて体育館前方に向かっていき、それぞれのクラスの席に向かっていく。

かなり大きな体育館のため出来ることだろう。

俺も最初は驚いたな～…などと考えていると、美也ちゃんがニコニコしながらこちらに向かって大きく手を振っていた。

一番前に座っていたためか美也ちゃんにあっさりと見つかってしまった。

恥ずかしさに耐えつつ軽く手を振り返すと美也ちゃんは満足したように歩いていった。

なんだったんだ…

ちょっと周りの注目を浴びつつも、気にしないようにしようと平然な顔をして拍手していると、今度は美也ちゃんと同じクラスの列にいた女の子が驚いた顔を見せ、それから会釈してきた。

女の子は結構小柄な子で、髪は美也ちゃんぐらいのショートカット、顔はスッと整っている。

普通に可愛い子だ。

挨拶されたからには返さないとな、と俺はとりあえず会釈を返した。

全く見覚えのない女の子へ…

それを見ると満足したのか、笑顔を見せ歩いていった。

可愛い笑顔だな～っと思いつつも、何故か嫌な予感がする。

頭の中心が警鐘を鳴らしているような錯覚を覚えたからだ。

そんな事を考えていたのもほんの数分で、その後は完全にその女の子の事を意識の外に放り投げ、早く終わんないかな～…っと何度も愚痴をこぼしていた。

高橋先生の視線が怖かったのは気のせいだと信じよう。

入学式も無事に終わり、後は帰るだけの俺は今朝の失敗をネタに交えつつクラスメートと軽く親睦を深めてから純一と一緒に帰っていた。

道中、純一は仕切りに年上の女性の魅力…もとい森島先輩について熱弁を揮っていた。

「やっぱり年上の女性の方が包容力があって憧れちゃうよ！…」

「いつもはビシッとしてるんだけど時折見せる可愛らしい一面とか持ってたら最高だね！…」

「新入生の列が入って来る度に誰よりも大きく拍手したり、可愛い子を見つける度に目をキラキラさせながら隣の人に話しかけてるんだよ！…」

「やっぱり森島先輩はパーフェクトだな～！」

そんな話を延々と繰り返され内心グッタリしながら相槌を打っていると、後ろから巽せんぱ～い、と呼ぶ声が聞こえた。

いまだ身振り手振りを加えつつ熱弁している純一を無視して振り返ってみると、入学式で俺に向かって挨拶してきた女の子が小走りで近付いてきていた。

「巽先輩！お久しぶりです！」

女の子は俺に近付くなり丁寧に頭を下げてきた。

「えっ…と…」

（声聞いても全然思い出せない…なんとかテキトーに話併せときゃ思い出すだろ！）

この時点で純一は、ようやくこの子に気付いたようだ。

「おう！久しぶり！元気にしてたか？」

「はい。先輩も輝日東高校に通っていると知って元気が出て来ちゃいました。」

「お世辞でもなんか少し照れるな～」

「はい。お世辞です。」

「即答ですか…」

「ふふっ。先輩は相変わらずお元気みたいですね。」

「いやぁ～、毎日忙しい日々を送ってるから疲れちゃって疲れちゃって…」

「何か運動でもしてらっしゃるんですか？」

「スーパーのタイムセールでの取り合いとか安い食材求めて隣町まで歩いたりとかかな。」

「それは確かに大変ですね…」

「ここは突っ込むところですよ～！」

などと当たり障りのない話をしていると（主に俺に）完全に忘れられてた純一から声を掛けられた。

「その可愛い子は怜の知り合い？」

七咲の顔が少し赤くなるのを横目で見つつ、この問い掛けにもとっさに

「ああ。昔からの知り合いだよ。何年かぶりにあったんだ。」

とそれっぽいこと言っといた。

「小学校以来なので四年振り位ですね。」

「そっか～そんなになるか～！」

ハッハッハと笑っていると、

「で、名前は？」

と空気読めない発言を純一はしてきやがった。

一瞬固まってしまったが、見た目通りしっかりした女の子が自分から自己紹介を始めてくれた。

「申し遅れました。はじめまして。七咲逢と言います。巽先輩とは小学校の時の水泳クラブでの知り合いです。」

（小学校の水泳クラブ…そういや何か一学年下の女の子でこんな感

じの子が…）

記憶が少しずつ蘇ってきた。

「へぇ～。怜は水泳クラブに入っていたんだ！あっと…僕の名前は橘純一。よろしくね。七「あぁ～！七咲か～！」」

完全に思い出すと同時に俺は大声で叫んでしまった。

「うわぁ～懐かしいな～！…相変わらずちっちゃいんだな！…まだ水泳は続けてんのか？」

勢いに任せて次から次に出てきた言葉に七咲は呆気にとられ、その後すぐに良い笑顔で一言返してくれた。

「…先輩は私のことを覚えてなかった…ということでよろしいのでしょうか？」

その一言に俺は完全に硬直してしまった。

（……ミスった～！！七咲がめっちゃ良い笑顔でこっち見てる～！）

七咲は良い笑顔を崩さず、

「黙ってちゃ分からないんですけど。先輩？」

と詰め寄ってきた。

俺よりも断然小さな身体なのだが、あまりのプレッシャーに後ずさってしまう。

「いっ…いやぁ～会って間もないからすぐに思い出せなくて…」

「じゃあ入学式の時なんで挨拶を返してくれたんですか？」

「挨拶されたら挨拶仕返すのが礼儀かな～とワタクシは思っているのですよ！」

「怜…諦めが悪いよ…吐いて楽になっちゃいなよ…」

「純一君！キミは黙ってなさい！」

事実だって隠し通せば嘘に出来るんだよ！

「…はぁ～…もういいです。先輩は私のことなんて覚えておく必要もないと思っていたことが分かりましたから。」

「そんなことないんだよ～。七咲信じてくれよ～」

俺は周りの人の目も気にせず、一人で帰ろうとする七咲の腕にしがみつき、許してくれよ～、と子供のように駄々をこねた。

それから機嫌を損ねた姫のご機嫌取りをする羽目になり、何とか大判焼き一つで許してもらえた。

その時なぜか純一にも奢ることになり、純一は大満足な顔をしながら七咲と大判焼きについて話していた。

そこで更に一つの事実を思い出した。

そういや小学生のときから微妙に尻に敷かれてた気がするわ…

3話（前書き）

ハイパー短い！！

これからはこうならないように頑張っていきたい！

すいませんっした～！！

3話

四月も終わりを迎えて、休み時間の教室では来たるＧＷの計画を立てている声があちこちから聞こえる。

そんなことを聞いているとやはり自分のことも気になるわけで、

（俺はバイトかな～今月もギリギリだったし。）

などと考えていると、廊下から、純一いる～？、とのんびりとした声が聞こえてきた。

俺はこの聞き覚えのある声に思考をカットされ、廊下側を見てみると、少しぽっちゃりめで茶髪の女の子が教室の中を見渡してるのを見つけた。

「梨穂子。どうしたんだ？」

近付いて声を掛けてみると、梨穂子は安堵の表情を浮かべた。

「リョーがいて良かった～。実は次の時間数学なんだけど、数学の教科書を忘れちゃって～…」

梨穂子は気まずそうな顔をしている。

「そういうことか。でも純一はちょうど今梅原と飲み物買いに行ったとこで、たぶんチャイムギリギリまで帰ってこないと思うぞ。」

「そんな～…でっ…でもリョーなら持ってるよね？」

「せっかくのチャンスに俺に借りていいのか？純一に頼りたかったんだろ？」

俺は少し意地悪い顔をして言い放った。

顔を赤らめつつ、それはそうだけど…、とモジモジしながら言ってくる。

（ヤバいっ…めっちゃ可愛いじゃねーか…）

「どうせ純一のことだから、ロッカーに置いてあるだろ。それを借りりゃいいじゃん。」

「勝手には借りれないよ～」

「俺が勝手に貸すからオッケー。」

そう言うと純一のロッカーから数学の教科書を抜き取り、梨穂子に渡した。

「いいか！梨穂子は純一に数学の教科書を借りに来たけどいなくて、たまたまいた俺に借りようとしたが俺も持ってなかった。そこで俺が純一のはロッカーにあるだろうと名案を出し、勝手に漁って勝手に貸した。これでいくぞ！」

自分が咄嗟に出した名案に、俺は上手いこと言えたな！と一人頷く。

「でもそれじゃーリョーに悪いよ～」

「純一はこの程度のことで怒る奴じゃねーよ。しかも相手が梨穂子なら逆に喜ぶんじゃねーの？」

俺は少しニヤニヤしつつ言ってみる。

梨穂子はそれを聞いて、そうかな～…、と満更でもないような顔をしている。

俺は梨穂子が純一の事をだいぶ前から気にしていることを知っている。

気付いたのは中学一年で三人が同じクラスになったときで、梨穂子が授業中、休み時間、三人での下校中といった様々なときにに純一を見ていたような気がしたのがキッカケだ。

ある日、純一が風邪を引いて休んだ時、俺と梨穂子は二人で純一のお見舞いに行こうと一緒に下校していた時に俺から聞いてみた。

「梨穂子は純一のこと好きなの？」

梨穂子は顔を真っ赤にして最初は否定していたが、純一のことよく見てるから…と理由を説明してみると梨穂子は少し考えてから観念したようにボソッと言ってくれた。

「正直よくわからないんだけど、純一のことをすごく見ていたくなるの…気になってる…って感じかな。」

この時の顔を真っ赤にして話す梨穂子はめちゃくちゃ可愛かったのは今でも覚えている。

「じゃあ俺が手伝ってやるよ！梨穂子と純一が仲良く出来るように！」

それから俺は梨穂子と純一の仲を進展させるように行動するようになった。

最初はあからさますぎて梨穂子に注意された。

鈍感魔神の純一は全く気にもしてなかったが…

今では梨穂子に純一と話し易いようなキッカケを作るぐらいになっている。

そんな思い出に耽っているのを、授業開始のチャイムが中断させた。

「あっ！もう行かないと遅れる～。じゃあ純一に説明よろしくね、リョー！」

次の休み時間に返しに来るから～、と言い残して梨穂子は上機嫌で自分の教室に帰っていった。

「じゃあ俺も純一に説明しに行きますか！」

と意気込むと、ちょうど帰ってきた純一の所へ向かった。

次の休み時間に梨穂子は純一に数学の教科書を返しにきたのだが、間違えて数学のノートを持ってきていて、急いで取りに戻り数学の教科書を返すとそのままさらに英語の教科書を借りようとしていた。

なんでも違う日の時間割りを持ってきていたそうだ。

さすが天然…

4話

「陸上競技とかたるいわ～…」

ＧＷも終わり、体育の授業では今月末に行われる体育祭のために、様々な競技にクラスで取り組んでいた。

体育祭には短距離走、長距離走、リレー、障害物走、借り物走などがあり、これらの競技から全員が一つは選択して出なければいけない。

この時、本気で優勝を目指す熱血集団に属していると厄介なことになる。

あらかじめ授業中に計測されたタイムを基に、体育祭実行委員の独断で出る競技が決まってしまうことだ。

そして俺のクラスは厄介なことに熱血集団だった。

足の早い奴は得点が多く取れる長距離走やリレーに、足の遅い奴は得点があまり入らない短距離走や、足が遅くても勝つチャンスがある障害物走や借り物走に廻される。

どう考えても足が遅い方が楽できる。

（今年はテキトーに力抜いて走って、借り物走でもしてよっと。）

去年は薫とタイムを競いながらだったため、授業で好タイムを連発してしまい、結果長距離走った後リレーにまで出る事になってしま

った。

そんなことを考えていると、男子とは少し離れた所で計測していた女子の集まりから、もじゃもじゃ頭の女子がこっちに向かって歩いてきた。

「あら～！こんな場所で会うなんて奇遇ね～！り・ょ・う・君」

「お久しぶりですね。薫さん。たしか去年の今頃、大口叩いときながらぜんぜん私にタイムで勝てずに悔しがってた時以来ですかね。」

しまった…ついいつもの癖で挑発しちまった…

「相変わらずの低レベルな嫌みね～。ただ今年は去年の様にはいかないわよ！」

完全にやっちまった…薫のボルテージを急上昇させちまった…

「いや、今年は俺の不戦敗でいいぞ！というかたぶん俺はもう薫には勝てないと思うんだ！運動なんかぜんぜんしてないし、それに比べて薫は今も昔もスポーツ万能でクラスのアイドルじゃないか！俺みたいな凡夫の相手してる暇なんてないだろ！」

あからさまなお世辞で話を早急に終わらそうとする。

「まぁ凡夫で根性ナシのあんたがそこまで私に畏れを為して逃げるのなら別にいいんだけどね～？」

薫もあからさまな挑発を返してきた。

「はは～。ワタクシめは凡夫で根性ナシのド貧乏でございます。許して下され～」

悪いが俺はプライドなんてもん持ち合わせてない。

薫も俺の性格知ってるのに安い挑発するな～。

予想外だったのか少し考え込み、ついに対俺最終兵器を出すことにしたようだ。

「それじゃあしょうがないわね。せっかく私に勝てたらバイト先でお腹一杯奢ってあげようと思ってたのにな～」

「さて、薫。三千円弱くらい手持ちはあるよな。とっとと走って飯食いに行くぞ。」

「あんた変わり身早いわね…」

「男には譲れないものがあるんだよ！」

「プライドより一食を選んだ奴がなにいってんのよ…」

結局挑発に乗り今年も長距離走ｏｒリレーは決定的になったが、そこは短距離走、長距離走でのタイム測定により手に入れたお食事券で±０…むしろ＋になったO。

ステーキとか何ヶ月ぶりだろうな～！

5話

体育祭まで残り数日といったところで、下校時間ギリギリに俺は七咲と二人で帰っていた。

なぜこんなに遅くまで居残っていたのかというと、七咲は部活の練習、俺は体育祭の練習で残っていたからだ。

「応援団の奴らがうるさいんだよね～声が小さいだのやる気出せだの指先まできっちり伸ばせだの…」

「確かにそこまで言われると逆にやる気出せなくなりそうですね…」

「そうだろ！だからちょっと退屈した拍子にあくびしただけで居残りさせられて…」

「それは先輩が悪いです。真剣な人の前であくびするなんて最低だと思います。」

「ぐっ…そうは言ってもあの場にいたらしょうがない、って思っても不思議じゃないと思うぞ！」

「いえっ。私はそういった行事では手を抜かない様にしているので、逆に先輩を注意していたと思いますよ。」

「…確かに七咲なら注意しそうだな…」

「はい！絶対注意します！」

七咲は満面の笑みを浮かべて、俺に言い放つ。

「まぁ居残ったおかげで久しぶりに七咲と二人で帰れたからいっか！」

「二人で…というと、水泳クラブの帰り道以来ですね。」

「懐かしいな～水泳クラブ！あの頃の七咲はもっと素直だった気がするわ～」

「まぁまだ子供でしたからね。」

「クラブが終わった後、毎日のように勝負を挑んできてたよな。たしか２５ｍ自由形で…仮にも相手は年上の男子なのに負けたら泣きじゃくって、手を抜いたら怒って…」

「なっ…泣いてなんかいませんよ！」

七咲の顔が真っ赤になる。

「あれ～そうだっけか～？」

俺はここぞとばかりに七咲に攻め込んだ。

「俺には七咲が叔母さんに泣きつくのを見てた気がするんだけどな～」

「そんなことありません！絶対に先輩の記憶違いです！先輩の記憶力の悪さは入学式の時に分かりましたから！」

「ぐっ…それを言われると反論できないな…」
結局のところ簡単に七咲には負けてしまった。
後輩の女子に連戦連敗とか情けね～…

「そういえば先輩はどうして水泳部に入らなかったんですか？」
七咲は少し赤くなった顔のまま訪ねてきた。
「…」
「先輩？」
七咲が不思議そうに俺を見てくる。
「ああっ…ちょっとタイムが伸び悩んじゃって、疲れちゃったというか…やっぱ俺には才能ないのかな～って思ったからだよ。」
それを聞くと同時に七咲が顔をしかめていく。
「俺ってなにやっても中途半端な成績しか残せないんだよね～中学の頃も…」
ペラペラと喋り続ける俺とは反比例に、七咲は無口になっていった。
「…」

「どうした？七咲？」

「先輩は才能なくなんてないです…」

「はい？」

「先輩は才能あるって言ってるんです！」

七咲の様子が急変した。

急な変化に俺の頭はついていけない。

「まぁ…とりあえず落ち着けって、七咲。」

「先輩のフォームは凄くキレイでした！ムダな力が入ってなくて、リズムも一定に保たれていて…」

「それはありがとう…でもやっぱ限界はあるというか～…」

無駄に謙遜してしまった。

これにより七咲のボルテージはどんどん上がっていく。

「それなら昔先輩に一度も勝てなかった私はどうなるんですか！」

「小学生の時の話だしな～…。それに今やれば七咲の方が速いだろ、たぶん。」

俺は七咲のご機嫌を取りに行く。

しかし、この一言で七咲のメーターは振り切れた。
「たぶ…ん…？当たり前ですよ！先輩はもう泳いでないんですから！そんなに水泳は甘くありません！大体先輩は小学生の時から怠けすぎなんですよ！必ずと言って良いほど週に一回はクラブをサボってました！それなのに何で私よりタイム良いんですか！負けるのが悔しくて真剣に泳いでいた私より、才能がないという先輩の方がなんで速いんですか！」

「ミスった…分かったから落ち着けって！」

一人呟いてから七咲を宥めにいく

「また子供扱いして…そこまでいうなら勝負しましょう！」

「いや、全く子供扱いしてないからね！」

「体育祭終わって次の日、水泳部が休みなのでその日に勝負しましょう！」

「話を聞いちゃくれない…」

「じゃあそういうことで！失礼します！先輩！」

怒りつつもキッチリ挨拶をすると七咲は一人先に帰ってしまった。

「はぁ～…面倒なことになったな…」

ひどい嵐が通り過ぎたかのように辺りがしずかになる。

「これからバイトだっていうのにほんとにため息しかでてこない…」

そんなグチを一人言いつつ、重い足取りでバイト先に向かった。

5話（後書き）

結局短いので、とりあえず2つ投稿しました。

短い上に駄文なんて目も当てられないレベルなんですけど…

って感想が聞こえてくるようです…。

6話（前書き）

体育祭編です。

因みに自分は寝てたか人と話してたかしか、体育祭に関しての記憶がありません。

…身体能力は極限に低いんで、どの競技でも活躍が出来なかった…

そんな記憶ないんだからね！

6話

体育祭前日の夜、授業が早く終わるのをいいことに俺はバイトに明け暮れていた。

この時期はあまりお客さんがいないためかぼ～っと座っていることが多い。

楽して金を稼ぐには持って来い！の仕事だと思う。

夏が来なければ…

仕事を終えて着替えて帰ろうとすると、コーチの方に呼び止められた。

「巽！突然なんだけど、明後日月曜なんだけど空いてないか？」

「明後日ですか？」

「そう！実は家族が事故に遭っちゃって実家に帰らなくちゃいけなくなってな…でも急だから他の人も予定が空かなくてな…明後日だけで良いから入ってくれないか？」

心底申し訳なさそうに言ってきた。

（明後日っていったら七咲と勝負する日だったよな…）

少し考え込む。

「本当に頼む！巽しかいないんだ！」

ここまで言われると断れないのが俺という存在であるわけで、

「確か仕事は2時からでしたよね？それなら大丈夫だと思いますよ！だから心配せずご家族の方についていてあげて下さい。」

俺は快く引き受けた。

（後で七咲に連絡しとかないとな…）

次の日、空一面の青空の下、無駄に長い開会の言葉や選手宣誓を終え、輝日東高校の体育祭は幕を開けた。（開会の言葉だとかは休憩時間と捉えてる。）

輝日東の体育祭はクラス別にチームを分けて行う。

一年A組、二年A組、三年A組で一チームと言った具合だ。

点数はそれぞれの学年で行われる様々な競技の上位者のいるチーム

に与えられる。

また応援合戦では審査員（ＰＴＡのお偉いさん方など）の判断で一位から三位までの順位が決められ、それに応じた点数がチームに入る。

応援合戦だけは上位しか発表されないようになっているのは、最下位チームのことを考えての行動だろう。

そうして全ての競技が終わった後、チーム総得点で決着がつけられる。

ちなみに一位になっても何も貰えない。

賞品がなにもないこと…、真夏のような炎天下でやること…、そしてそんな中、長距離走とリレー、そして借り物走にまで出なくてはいけなくなったこと…、そんな理由から俺のテンションは最低値を記録していた。

「ど～うした！大将！元気がねぇ～ぞ？」

「なんでこんな日に、俺はこんなに走らなきゃいかんのか嘆いてたとこだよ…」

不機嫌さ全開で愚痴る俺

「まぁ～まぁ～！それだけ見せ場が増えたってことじゃねーか！羨ましいな～！」

やたらテンション高く答える梅原

「どうしたの？やけに上機嫌だね。」

気になっていた純一が訪ねてみた。

「フッフッフッ…なんとあの愛しの先輩が応援しにわざわざ来てくれてるのだ！ここでやる気を出さなくていつやる気を出す！」

「そんな理由かよ…」

（なんか梅原がいつにも増して面倒くさい…）

「それは確かに良いチャンスだね…よし！僕も森島先輩に良いとこ見せれるように頑張るぞ！」

純一も急にテンションを上げてきた。

（純一の意味の分からないテンションの上げ方が出ちゃったよ…）

俺は一人面倒くせぇ…と愚痴りながら出番をただひたすら待っていた。

午前の部と午後の部に分かれており、午前の俺の出番は借り物走のみだ。

ちなみに3つ走る理由だが、元々は借り物走とリレーの二つを走る予定だった。

運良くリレーのみで決定しそうな所に薫が、なんか借り物走やりた

かったみたいよ！、などと余計なことをクラスの実行委員の奴に言った所為で、じゃあ借り物走にも出してあげるか！、となってしまった。

この時の薫の顔は笑顔（完全に人を貶めようとしている顔）だった。

そんなこんなで迎えた当日の朝、長距離走を走る予定だった奴が熱を出してダウンした、との連絡が入る。

急に空いてしまった枠に誰をぶち込むか考えているとまたしても薫が、確か怜が去年長距離走で二位取ってたような…、とわざとらしく少し大きめの声で独り言を言った。

この時の薫の顔も先日のような顔付きだった。

そうして今に至る。

そんな人為的に起こった不幸を愚痴っていると、パン！と音が鳴り、それと同時に大きな歓声が響き渡った。

「最初の競技が始まったのか…確か最初は一年女子の短距離走だっけな。」

次々と競技が進む中、知ってる顔がスタート位置に着く。

（あれは美也ちゃんか。確か美也ちゃんも二つでる、とか言ってたもんな。）

そんなこと考えていると、スタートの合図は鳴り響き、美也ちゃんを含めた一年生がゴールに向かって走り出した。

美也ちゃんは昔からスポーツ万能で、運動会では決まってリレーの選手に選ばれている。

今回もその自慢の身体能力を見せつけるかの様にぶっちぎりでゴールしていた。

「美也ちゃん凄いじゃないか、純一。」

「まぁ運動だけは無駄に出来るからな。」

「本当に似た者兄妹だな。」

「そんな褒めてもなにもでないよ…」

純一は微妙に照れながら答える。

「褒めてないからな…」

そんなんだから3バカって呼ばれんだよ…

あれっ？なんで俺はそれにはいってるんだ？

…気にしたら負けだな！

そうこうしているうちに俺の出番が近付いてきた。

「選手の皆様にお知らせです。借り物走に出場する選手の方は所定の位置に集まって下さい。」

「それじゃ行ってくるわ。」

「頑張れよ！大将！」

へいよ～、と気怠そうに梅原に返事をしつつ所定の位置に向かった。

借り物走は唯一全学年の男子女子が混ざって一斉にスタートする競技だ。

選手はスタートすると同時に校庭のど真ん中に設置された机に向かう。

その机の上にはお題が書かれた紙が表からは見えないようしっかり折り畳まれて置いてある。

選手はそこから紙を一枚取ってそこに書かれてあるお題をゴールまで持ってくる、といった競技だ。

またこの時一度引いたお題は変更できないよう実行委員が見張っている。

この競技は完全に実行委員のお遊び企画と言っても過言ではなく、お題は実行委員が全員で考えて決めてるそうだ。

よって地雷が存在する…

スタート位置周辺にはすでに借り物走の参加者と思われる生徒がちらほらいた。

とりあえず顔見知りに声をかける。

「七咲。お前も借り物走に出場するんだな。」

「あっ…巽先輩。はい。私も参加します。奇遇ですね。」

上下ジャージ姿の七咲がいた。

こんな暑いのに上も脱がないのか…とても真似できないな…

「そうだな。七咲はここの借り物走見たことあるか？」

「いえ…借り物走自体初めてです。」

「そうか。ここの借り物走はたまに厳しいお題が入っているから気を付けとけよ。」

「例えばどんなものですか？」

「先輩の男子を連れてくるとか、女子の下のジャージを持ってくるとか…あとＰＴＡ会長と校長両方連れてくるってのもあったな。」

「それは厳しそうですね…」

七咲の顔が若干引きつった。

「だからこの競技は楽しいのかもしんないけどな。」

「そうですね。」

借り物走について軽くレクチャーしてると実行委員に借り物走の選手全員が呼ばれた。

もうすぐ始まるみたいだ。

「よし！じゃあお互い頑張りますか！」

「はい！先輩には負けませんよ！」

そういって七咲は笑顔を見せる。

そしてピストルの音が鳴り響いた。

スタートして俺がお題の置いてある机に着いた頃には既に残り数個しか紙がなかった。

「じゃあまぁテキトーに…っと」

と言いつつ左端に残った一枚を手にする。

「中身は…っと」

なんか宝の地図を開くみたいで面白いな、などと考えてた俺は甘かった。

つい呆然としてしまった俺を見張り役の実行委員が笑っている気がする。

「…まじかよ〜…」

俺の紙に書かれていたお題は

『……』

と書かれていた。

「いやいや…なんでこんなとこで暴露しなきゃなんないんだよ…」

俺は机の前から動き出せずにいる。

（連れて行くのは簡単だし、誤魔化すのも出来ると思うけど…いや嘘ついて誰か適当な奴を…）

などと考えに耽っていると誰かに背中を叩かれた。

我に帰って振り向いてみると、少し顔を赤くした七咲が立っていた。

「な…七咲どうした？」
「えっと…」
何か凄く言いづらいことみたいだ。
七咲の視線がこっちを見ないように斜め横を見ている。
少し時間が過ぎてから、七咲はこちらをチラチラ見つつ言葉を絞り出していく。
「先輩…突然ですみませんが…先輩の下のジャージ貸してくれませんか…？」
どうも七咲は『先輩男子のジャージの下』にでも当たったのだろう。
「ここで脱ぐのか…」
確かに俺は上は体操服の下は短パンの上にジャージといった組み合わせのためジャージを脱ぐくらいなら出来るのだが、大観衆に囲まれて校庭のど真ん中で脱ぐとなると話は別だった。
「無理をいってすみません…でも先輩しか頼れる人がいないんです！お願いします！」
七咲は必死にお願いしてくる。
（確かにまだ入学して少ししか経ってないのに気軽に頼める先輩なんていないよな…）

「分かったから頭上げなって。後輩に頭下げられてやんないわけにはいかないし。」

といいつつ下のジャージを速やかに脱いだ。

「はいよ。じゃあ先にゴールに向かってくれ。俺はまだだから。」

そういって七咲に自分のジャージを手渡す。

「ありがとうございます。ゴールで待ってますから！先輩！」

と言って七咲はゴールを目指して走っていった。

「さぁ俺のは…」

そしていまだに決心が付かない俺。

既に何人かはゴールしているみたいで残されるほど注目度は上がっていく。

「このままウジウジしてても変わんねーならいくしかねーか！」

と半ば自棄になりながらとあるクラスに向かって走り出した。

「純一！ちょっと来てくれ！」
俺は呑気に欠伸をしていた橘純一に声をかける。
「僕？一体なんて書いてあったの？」
眠たそうに欠伸をしながらのんびりと訪ねられた。
「話はあとだ！とにかくゴールまでダッシュするぞ！」
有無を言わせず強引に連れ出す。
「全く強引だな～」
少し不満げながらも純一は全力で走ってくれた。

なんだかんだ良い奴なんだよな…

「よしっ！やっとゴールだ～！」
大きく息を吐いて疲れを表現する俺と純一。

「じゃあお題の紙を見せて下さい。」

となかなか鋭い目つきの先輩だと思われる人に言われた。

「はい。これです。」

そういって紙を手渡す。

先輩らしき長髪の女子生徒はお題を一目見て、

「あらっ…君がこれに当たったの…ご苦労様。」

といいつつ微笑みを浮かべた。

「本当に苦労しましたよ…出来れば他言無用でお願いします。」

「分かってるわよ。お疲れ様。あと…はい、これ。」

と労いの言葉を言いつつ、大人の風格を帯びた先輩（仮）がお題の紙を返してくれた。

俺はそれを礼をしつつ受け取る。

そうして先輩（仮）は実行委員の仕事に戻っていった。

「結局なんて書いてたの？」

純一は興味本位に聞いてくる。

「ああ…クラスで一番バカな奴ってお題だった。梅原か純一で迷っ

て時間かかっちゃったんだよな～」

「それならお題達成できてないじゃないか！早く梅原連れてこないと！」

「いや。実行委員の人はゴール認めてくれたぞ？」

「えー！僕のどこからどう見たらバカに見えるんだよ！」

「この場で騒いでるところとか…後はにじみ出てるバカのオーラからじゃないか？」

「そんなのでてないよ！怜や梅原じゃないんだから！」

なんて口論していると横から笑い声が聞こえる。

「確かに私から見ても先輩たちはおバカさんに見えますよ。」

隣には先にゴールしていた七咲がいた。

「七咲！僕を怜なんかと一緒にしないでよ！」

「七咲。そんな純一に気を配らなくていいんだよ？あと俺にはもっと気を配ってもいいんだよ？」

なに言ってるんだよ！気を配って貰ってるのは怜だろ！、まぁ純一はバカだから気付かないんだよな～、と口論は終わらない。

「クスクス…そういうところがいけないんじゃないんですか？それより巽先輩。ジャージありがとうございました。」

いまだ口論が続いていた俺と純一をピシャリと押し止め、俺にジャージを渡してきた。

「そういえば七咲も借り物走出てたんだね。お題はなんだったの？」

と純一が聞いた。

「えっ…」

なぜか答えられず、顔を赤らめていく。

「『男の先輩のジャージ』とかじゃないのか？」

「そっ…そうですね。だから他の人には頼みにくくて…」

と七咲は軽く微笑みながら言った。

「それで順位は？」

と俺はついでに聞いてみた。

「はい！おかげさまで三位に入ることが出来ました！」

七咲は満面の笑みだ。

「お～！好順位じゃないか！」

ちなみに俺は十五位だったそうだが…。

「はい！ありがとうございます！」

「七咲は凄いな～！それに比べて怜は…」

「うるせー！そんなことより早く飯食べにいこうぜ～」

俺は話題をそらしつつ、提案した。

「確かにもうすぐ昼休憩だね！」

そう言って純一もそれを了承する。

「じゃあそういうことで！じゃあな！七咲！」

俺は自分のクラスの席に戻ろうと振り返る。

そこで純一はなにか閃いたようだ。

「あっ…そうだよ！七咲も一緒に食べればいいんじゃない？その方がきっと楽しいよ！」

「えっ…いいんですか？」

「もちろんだよ！七咲が迷惑じゃなければ。」

「いえ！そんなことありません！是非ご一緒させてください！」

「分かったよ！じゃあ僕達のクラスの席の方に来てくれない？場所は美也が知ってると思うから。」

「はい。わかりました。では失礼します。」

そういって七咲は小走りに自分のクラスに向かっていった。

「なんか話が勝手に進んでんな～。まぁいいか！七咲だし。」

少し大声で純一に存在をアピールする。

「そうだろ！七咲といると楽しいからね！」

純一は気にした様子はない。

「まぁ…そうかな。」

不覚にも簡単に純一に丸め込まれてしまった。

こうしてお昼の約束を取り付けて、俺達はクラスの席に戻っていった。

7話（前書き）

今回おまけ的なものを後付けしました。

まぁ最初のだけじゃ短すぎたんで、急いで足しただけなんですけどね！

7話

「それじゃいただきまーす。」

いただきます、と様々な質の声で響いた。

校庭の脇のスペースにシートを敷いて俺たちは陣取っていた。

シートの上には色鮮やかな種類の料理が並んでいる。

「さぁ～！張り切って食べるわよ～！」

薫がジャージの袖を捲り上げながら言う。

目の前には卵焼きや唐揚げといったシンプルなおかずとやや小さめのおにぎりの入った可愛らしいお弁当が置かれている。

正直薫に似合わない…絶対にこんなこと口に出せないが…。

「頑張って応援してたらお腹ペコペコだよ～。」

いつものように笑顔を振りまいている梨穂子。

野菜やフルーツが多く、炭水化物が少ないちょっと大きめのお弁当だ。

「こら！ちゃんといただきますって言ってから食べなさい！」

隣に座る弟、七咲郁夫（小学校一年生）、を叱りつけてる七咲。

郁夫の分も考えてか弁当箱は二段になっていて、ボリューム満点だ。
「あぁ～！逢ちゃんのお弁当美味しそう～！も～らい！」
と七咲のお弁当からタコさんウインナーをつまみ食いする美也ちゃん。
お弁当は叔母さんが作った特製弁当で、純一、美也ちゃんそれぞれの好物、唐揚げやハンバーグなどが沢山入った豪華なものだった。

「純一…」
俺は小声で話しかける。
「どうした、怜…？」
純一も俺の態度に合わせて小声で話す。
「なんか俺貧富の格差に泣きたくなったわ…」
…おにぎり一個と野菜炒めしか入ってない弁当箱を持ちながらボヤいた。
「あんた相変わらずダイエット生活？」
「違うわ！単に金欠なだけだよ！」

その一言によりみんなから生暖かい目で見られることになった。

「チクショー！そんな目で見んじゃねぇ！そんな目で見たってこの野菜炒めはやらんぞ！」

「いや…いらないわよ…」

薫は呆れかえる。

「私の分ちょっとあげるからそんな怒んないの～！」

「私と郁夫のも少し作り過ぎちゃったのでよかったらどうぞ。」

と自分のお弁当を俺に近付けつける梨穂子と七咲。

「あぁ～梨穂子さん！七咲さん！私にはあなた達がまるで天使に見える！」

と感謝（オーバーリアクション）して食事に戻る。

天は俺に味方したようだ…

因みに親同士は少し離れた場所で仲良く食べている。

「でもみんな料理上手いよな～。それって自分で作ったんだろ？」
と俺は七咲、薫、梨穂子のお弁当を順番に指で差しつつ聞いてみる。
「そうですよ。私はお手伝いをよくやるのでそれで少しは出来るように。」
「私も逢ちゃんと一緒かな。たまにしか手伝わないけどね。」
「私は料理本片手に練習してたら出来るようになってたよ～。お菓子ばっかりだけど～」
と三人とも家庭的な一面を披露していると、一人居心地が悪くなったかのようにそわそわし始めた。
「美也ちゃんはまず叔母さんの手伝いをするところから始めようか？」
それに気づいた俺は出来る限り優しくフォロー使用とする。
「そんなのだめだよ！僕の家庭の食卓をメチャクチャにするつもり？」
「まぁそれも美也ちゃんのタメなんだし頑張れ！兄貴！」
「じゃあ美也には朝ご飯を付くってもらおう！」
「美也ちゃん。今時料理出来なくてもなんとでもなるから気にしな

くていいんだよ。」

と二人でコントを繰り広げてる

…と美也ちゃんの様子がおかしくなった。

「やばい…。調子乗りすぎたな…」

明らかに美也ちゃんのボルテージが急上昇しているのがわかる。

俺はなんとか挽回できる策はないかと模索する中、純一がトドメの一言を刺してしまう。

「まぁ美也はまだまだ子供だから、当分作ってもらってればいいと思うけどね！」

それもめちゃくちゃいい笑顔をしながら、比較的大声で…。

（バカ…空気読めよ…）

「バッ…」

「バ？」

純一が美也ちゃんに聞き返す。

「バッ…バカにぃに！バカタッツー！美也だって料理くらいできるやい！」

そういって純一、俺に強烈なみだれひっかきを放つ。

「「ギャ～～～～！！！」」
悲痛な叫び声が辺りに広がった…

「あんたたち美也ちゃんをバカにしすぎよ！美也ちゃんはまだ練習してないだけなんだから！」
「そうですよ先輩！人には得意不得意があるんですから！」
「それってあんまりフォローになってないような～」
と俺達を叱る薫と七咲。
そして半ベソの美也ちゃんを慰めつつ突っ込みをいれる梨穂子。
「「本当にすいませんでした！！」」
と美也ちゃんに土下座する俺と純一。
「ほら！純一も怜も謝ったから許してあげて、美也ちゃん？」
「ふ～んだ！にぃにとタッツーなんて知らないよ～だ！」
「ほらほら早く食べないと私が美也ちゃんの分も食べちゃうぞ～！」

といって美也ちゃんのお弁当からおかずを取る梨穂子。
「あぁ～！それ食べちゃだめ～！」
と元気な声で止めに入る美也ちゃん。
「なんか凄く仲がいい姉妹みたいだな。」
「確かにそうだね。梨穂子がいたら美也の世話は楽になるだろうな～。」
「それなら付き合ってみればいいんじゃない？」
「バッ…なにいってんだよいきなり！」
「そんな照れんなよ！」
純一の背中を強めにバシバシ叩いてやる。
「照れてなんかないよ！」
と意地を張る純一。
「くっついちゃえば面白いのにな～！」
「えっ！なんの話なんの話？」
と梨穂子が食いついてきた。
「な…なんでもないなんでもない！それよりもうすぐ午後の部が始

まるから片づけないと！」

そういってテキパキと片づけ始める純一。

「本当ですね。それじゃ私は郁夫を連れて行かなくては行けないのでお先に失礼します。」

といって七咲は郁夫を連れて去っていった。

「ほら！あんたら二人もいつまでもイチャイチャしてない！」

と片付けをしている純一と純一にしつこくなんの話をしていたか聞いてる梨穂子に薫が注意する。

「別にイチャイチャなんかしてないよ！」

「そんなことないよ～！」

と二人で答える。

「ハイハイ。息揃ってるとこ見せられてももっと暑くなるだけだからやめてくれよ。」

弁当の容器を片付け、シートを片付けようとしていた俺が茶化す。

「もう～茶化さないでよ～！」

二人で顔を赤くしながらも梨穂子だけは凄く幸せそうな顔をしてた。

今日も梨穂子の手伝い上手く出来たかな？…

そう思いつつ俺達は自分のクラスに戻っていった。

おまけ１

「七咲さんのお弁当美味しそうね～！」

「ホントホント～！」

薫は感心したように、梨穂子は目を輝かせて言っている。

「ありがとうございます。良かったら少し食べて下さい。」

七咲は笑顔でお弁当を勧めた。

「ホント～？ありがとう逢ちゃん！」

七咲に抱きつきながら言う梨穂子。

それに対して七咲もどういう反応をすればいいか困ったような顔をしていた。

「ずるい～！私も～！」

といって美也ちゃんも七咲に抱きつき始めた。

「ほらほら～！七咲さん困ってるでしょ～！」

といって薫は二人を引き剥がす。

「大丈夫？七咲さん？」

「は…はい。突然だったので驚いただけです。」

「いきなりフレンドリーに来たからね～。桜井さんは食べ物与えとけば懐くから簡単で良いでしょ？」

「そんなことな～いで～すよ～だ！」

「梨穂ちゃんはカン～タン～！」

と七咲のお弁当を食べながら言う梨穂子と美也ちゃん。

「あぁ～！逢ちゃんのお弁当スゴく美味しいよ！棚町さんも食べてみて！」

「やっぱり？じゃあ私も頂くわね！」

「はい！是非召し上がって下さい！」

「…うん！スゴく美味しい！七咲さんって本当に料理上手なのね！」

そんなこと…と照れる七咲。
隣ではなぜか誇らしげに、そうでしょ～！、と胸を張る美也ちゃんがいた。
「でも棚町先輩のお弁当も美味しそうですよ。」
「今朝早起きして作ったからね～良かったら食べて感想聞かせて！」
「はい！頂きます！」
そんな会話を聞いて、次は私のも食べて～、と七咲に近寄る梨穂子。
そうして女の子四人での会話は盛り上がっていった。

「なぁ純一？」
「なに？」
「どうして女の子ってあんなにすぐ仲良くなれんだろうな…」
「確か薫と梨穂子は七咲と初対面だよな…」
「それに比べて俺達は…」

そういって横を見ると未だに一言も話さずに七咲のお弁当（一段目）を食べ続けてる郁夫がいた。

「なに話しても頷く位だもんな～」

「イナゴマスクの話を出したときは少し食いついたんだけどな～」

俺達二人でどうにかして郁夫と仲良くなろうと試みるも全て反応はイマイチだった。

結果、俺と純一二人だけで盛り上がるわけにもいかず、

「「「……」」」

少しの間、男子陣は黙々と食べる事にだけ集中していた。

おまけ2

「でも…先輩の野菜炒めも凄く美味しそうに出来てますよね。」
七咲は意外そうな顔をする。
「まぁ一人暮らししてたらこんくらいは出来るようになったかな。
外食ばっかじゃ金かかるし。」
「えっ！先輩一人暮らししてるんですか？」
「知らなかったっけ？」
「はい。叔母さん方はどちらに行かれたんですか？」
「ちょっくら上の方に…」
と言いにくそうに話す俺。
「あっ…すみません。無神経なこと聞いて」
「いや…七咲は気にしなくていいんだよ…」
そういって下げられている七咲の頭にポンッと手を乗っける。
七咲の顔はそれでも晴れない。
辺りの空気が重くなったように七咲は感じていた。
（橘先輩も美也ちゃんも少し俯いちゃった…）

と場を暗くした責任を感じていた七咲に、

「気にしなくていいよ。七咲さん。そいつの両親は東北の方の知り合いの所に出稼ぎに行ってるだけだから。」

と暴露しやがったのは近くにいたもじゃもじゃだった。

それと同時にあえて黙っていた純一、美也ちゃんの二人は笑いを堪えられなくなる。

「えっ…」

「薫言うの早いよ〜！もう少し伸ばして、七咲が俺に気を配るのを楽しみにしようとしてたのに〜！」

「あんたは本当趣味悪いわね〜！後輩の女の子いじめて何が楽しいのよ！」

「いつも弄られてるからこそ、ここぞとばかりに攻めようかと…」

「というかあんたは毎回毎回ワンパターンなのよ！この前クラスの奴にも同じこと言ってたでしょ！」

「いや〜！意外に好評だったからつい…」

などと薫とふざけあっていると小さく低い声で、先輩、っと聞こえた気がしたので、そちらを向いてみる。

そこには先ほどから梨穂子に頭を撫でられている七咲の姿があった。

「七咲！あの～これはですね…ちょっとした冗談というか～…」
と途切れ途切れながら弁解する俺。
ただし七咲は俯いた状態のまま動かず梨穂子に撫でられている。
「お～い七咲…」
と恐る恐る声をかけてみると、ついに七咲は反応を示す。
ガバッと立ち上がると、座っている俺に手が届く範囲まで近づき仁王立ちした。
「七咲…さん？」
何も言わずに七咲はまるでハンマーを持ってるかのようにゆっくりと拳を振り上げて、そして弾丸の様な速さで拳を振り下ろした、
俺の頭目掛けて…。
「ッ～！！めっちゃ痛いんですけど七咲さん！」
ゴッ！という重い音がなった頭をさすりながら七咲を見上げようとしながら声をあげる。

「先輩は私にそんな口答えをするんですね。」
七咲…いや七咲さんはすごく冷たい口調で言い放った。
「七咲…さん？あの～心なしかいつもの可愛らしい表情が今はとても怖く見えるんですけど…」
主に身に纏っているオーラのせいで。
「いえ。普段と特に変わりませんので、そのように見えるのは先輩になにかやましい心があるからだと思いますよ。」
七咲の表情は変わらず怖い…てか冷たい。
「さて。私先輩と少しお話したくなりました。
少し先輩をお借りしてもよろしいですか？棚町先輩？」
「いや～魅力的な誘いだけどやっぱりみんなで「先輩は黙っててて下さい。」…はい。」
圧倒的な威圧感に俺は耐えられない。
「あ～七咲さん。半殺し程度にしてあげなよ？」
あの薫が少し言いよどんでる…
てか半殺しってなんだ！
「大丈夫です。少しお話するだけですから。」

そういって俺の耳を引っ張りながら校舎裏に向かう七咲。

「七咲さん！耳は引っ張るためにあるんじゃないから！千切れるから！」

周りの目も気にせず大声をあげる俺。

引っ張られる俺には酷く怯える郁夫の姿が見えた。

そして俺達二人は仲良く？校舎裏に向かった。

「なんか楽しそうだったね～！」

「いや梨穂子！どこにそんな要素あったよ！」

「なによ純一！あんたは今の楽しくなかったの？」

「薫も微妙に引いてたじゃないか！」

「それは…七咲さんの新たな一面を見て驚いてただけよ！」

「みゃーもビックリしたよ…」

「さぁ気を取り直して食べるわよ！」

「そうだね！」

と残った面々で和やか？な会話が始まる。

犠牲者のことには誰も触れない…

ＢＡＤＥＮＤ

8話

「ただいまより輝日東体育祭午後の部を始めます。最初の競技は…」

と大きなアナウンスが校庭全体に広がった。

「たしかこの次のが純一が出る競技だったよな？」

「そうだよ！僕の活躍に目が眩むこと間違いないさ！」

「タイム計った時は目も当てられなかったけどな。」

純一は練習では早かったもののタイム測定の時だけ派手にずっこけたため実行委員が短距離走に配置した。

なんでも、本番に弱い奴に他の競技は任せられない！らしい。

「あれがなければリレーのメンバーに選ばれてたのにな～」

「俺はむしろ変わってほしいわ…」

悔しがる純一を軽く羨む俺。

「じゃあそろそろ僕は行くよ！」

「おぅ。頑張れよ。」

任してよ！と大きく応えて集合場所に向かう純一。

「じゃあ俺は寝ますか…」

と椅子に座りながら用意していたキャップを目深に被り頭を下げ目を閉じる。

今日も弁当作りで早起きしていたため午前の部でも出番以外はほとんど寝ていた。

普段は授業中に寝て過ごしてるが、体育祭でもその生活リズムは変わらない。

ジリジリと肌を灼いている日の光を意識の外に置く…。

周りの歓声が徐々に遠ざかっていきやがて消えていく…。

後は意識を手放すだけだ…

俺は「　」が欲しかった。

「　」は他の誰かと取り合いになった。

俺は「　」をソイツに譲る。

本当に欲しかった。
でも簡単に譲った。
俺よりも他の人に幸せになってほしいから…

周りの人に見捨てられたくないから…

「イタッ……なんだ？」
突然頭部に衝撃を感じ、急速に現実に引き戻された。
「リョー？起きた？」
上から聞こえてきたのは昔から聞き慣れた声だった。
「あぁ…どうした？梨穂子？」

違うクラスである梨穂子がわざわざ俺を起こす理由が寝起きの頭では考えつかない。

「寝てたのが見えたから来たんだけど、もうすぐ純一が走る番だよ？応援しなくていいの？」

「そんなことか…
純一ならきっと大丈夫だろ。
一位か笑いを取ってくれるさ。」

よっ、と身体を伸ばし全身のスイッチを入れていく。

「そうだね！純一は運動得意だからね～！」

と俺の回答に満足したのか満面の笑みで言う梨穂子。

「おっ…噂をすれば純一の出番じゃないか？」

ほらあれ、と指を指しつつ梨穂子に言った。

「ホントだ～！頑張れ～純一～！」

「梨穂子は別のクラスだろ…まぁそれが梨穂子らしいけどな。」

他の人にする応援とは少し違う意味合いを持っているだろう梨穂子の応援を聞きながら、俺は独り言を言う。

俺がボーっとしている間に、純一は応援に応えたかの様で一着でゴールしていた。

俺のクラスのみんなと混ざって喜ぶ梨穂子の方を向いて純一はガッツポーズを決める。

その後よそ見していたためか、前にいた実行委員の女の子にぶつかり、上から覆い被さるように押し倒したのはさすが純一！と言わざるを得なかった。

もちろんそれを見た梨穂子は少しふくれっ面になっていたが…

純一にタオルでも持って行ってやれば？と梨穂子を遠ざけて俺は校庭の端でそろそろ始まる長距離走のウォーミングアップに向かおうとした。

そうだね～、と照れるだろうと予想していたのを裏切って素直に頷き、選手が集まる場所へ向かおうとする梨穂子が何を思いついたかクルッと振り返り俺を呼ぶ。

「次はリョーが頑張ってね～！リョーもきっと大丈夫だよ～！」

大声で一言激を入れた梨穂子は満足して振り返っていった。

突然の応援に俺は返事も出来なかった。

「…はぁ～…なんか頑張んなきゃいけない雰囲気になっちまったじゃねーか…」

面倒くさいことになった、という考えとは裏腹に顔の表情は綻んでいく。

「ほんじゃまぁ一位目指してみますか！」

俺は気合いを入れ直し校庭端へと向かった。

梨穂子が応援してくれたからかは分からないが俺は全体で二位を獲得した。

三年の陸上部の先輩が今年は大人気なくも参加していて、一人圧倒的な差を付けてゴールしていたため完敗の二位だ。

まぁ梨穂子の満足そうな笑顔で

「学年一位取れただけでスゴいよ～！」

と言ってくれたし、圧倒的な差を付けられつつも全力で走った俺には暖かい、余裕で一位を取った陸上部の先輩には冷ややかな拍手が起こったのでまぁいいか。

その後行われた学年別リレーは散々なもので相手にグングン置いていかれた。

もう歩くのもツラい状態で勝てるかよ…

アンカーの梅原がなんとか抜き返してくれてクラスは一位をとれたからお咎め無しになったから良かったものの負けていたら後でクラスからネチネチ言われたに違いない…

「来年こそは短距離走のみで…」

そんな願いは届かないだろうと思いながら競技は続いて応援合戦に移っていく。

（てかこれは俺を過労死させようとしている誰かの陰謀なんじゃないのか？）

と三競技走る原因（悪友）の対処を本気で考えつつ命を振り絞るように最後の競技に参加した。

「やっと終わったな～体育祭…」

壇上では優勝した組の代表者が実行委員長から毎年使われているトロフィーが渡されている。

「最後に森島先輩の勇姿が見れて大満足だね！」

壇上の森島先輩に釘付けな純一は最後までずれてやがる。

「純一…こういう時は優勝出来て大満足、って言うもんだと思うぞ。」

そう。なんと俺達のクラス含むＡ組連合が優勝したのである。

「怜には言われたくないよ。体育祭中、面倒くさい、疲れたくらいしか言ってないだろ。」

「眠い、腹減ったも言ったわ！」

「変わんないだろ…それは…」

体育祭が終わり元気になり始める俺。

「ははっ！よし！後は家帰って明日のバイトまで寝るだけだ！」

夢が広がるな～、と一人テンションが上がってると高橋先生に睨まれてるのに気付いた。

もう少しだけ大人しくしとくか…

「優勝おめでと〜！」

閉会式が終わると梨穂子が俺らの元に駆け寄ってきた。

「まぁ僕が本気を出せばこの位どうってことないよ！」

「短距離走走っただけのくせになに威張ってんだよ。」

「確かに怜よりは頑張ってないけどね。」

「ん…随分素直じゃん。純一らしくないぞ。」

「今日は怜に花を持たせようと思っただけだよ。」

「ホントにリョー凄かったもんね！長距離走なのにあんなにビュンビュン飛ばして大丈夫なのか心配しちゃったもん。」

「本当だよ！あれは凄かったね！」

などと二人して俺の話で盛り上がる。

「あれ？どうしてそんなに顔が赤いの？怜？」

純一はニヤニヤした顔で聞いてくる。

俺は突然話を振られてちゃんとした対応が出来なかった。

「えっと…あぁ～…二人が応援してくれたおかげだよ。サンキュー…」

（…話繋がってねぇ～！）

すぐさま揚げ足をとるように

「あれ、リョー？顔赤いよ～？なに照れてるのかな～？」

「怜は誉められるとすぐに顔に出るからね！からかいがいがあるよ！」

とまた二人にからかわれる。

昔は純一だけだったのに、今では薫、梨穂子までからかってくるようになった。

これあんまり見せたくない弱みなんだよな～

などと話しているとまた違う人物に声をかけられた。

「先輩。優勝おめでとうございます。」

変わらず上下ジャージ姿の七咲が後ろから声をかけてきた。

助け船が来た！と突如現れたチャンスをしっかり捕まえようと思い、俺はすぐさま七咲の方を向いた。

「ありがとう。七咲。頑張って走った甲斐があったよ。」

「本当に凄かったですよ。運動してないとは思えないです。」

「まぁ日頃鍛えてるからな！安い食材のために身体張ってたらこれくらいは出来るようになったわ。」

など後輩には弱みを見せないように冗談を交えて話す。

「あっ！七咲じゃないか！お互いお疲れ様。」

「お疲れ～逢ちゃん！」

「橘先輩に桜井先輩もお疲れ様です。」

三人で労いの言葉を掛け合ってる中、俺は話が逸れたことに一安心する。

「それで巽先輩。」

少し話が落ち着いた所で、七咲は俺に言ってきた。

「ん？なに？」

「明日の事なんですけど、時間はお昼の１２時からでいいですか？私その後予定が出来てしまって早めがいいんですけど…」

とまるでデートの時間を決めるかのように俺に言ってきた。

「なに？二人でどこかに行くの？」

「はい。明日近くの室内プールに行こうと約束しまして。」

「へぇ～プールか～体育祭の後なのに頑張るな～」

と少し羨ましそうにしている純一。

「じゃあワタシたちも行ってみようか～？」

と梨穂子は少し勇気を出して純一を誘っていた。

「面白そうだね！せっかくだしみんなで行こう！」

と脳天気に話す純一を俺は完全に無視していた。

（明日のこと七咲に言うの忘れてた～！）

嫌な汗がダラダラと出始める。

（しかもどんどん話しづらい展開になっているし…）

七咲や梨穂子の顔が明日を楽しみにしている顔になっているのを見てそう　思う。

あれ？と首を傾げる純一。

どうしたのかと訪ねる七咲。

怜は…、と何かを話す純一。

それを聞くと七咲はすぐに俺に話を振ってきた。

「それで先輩。お昼からでよろしかったでしょうか？」

無自覚ながらチェックメイトをする七咲に俺はしどろもどろ返答する。

「えっと…七咲。明日なんだけどさ…ちょっと今日の疲れが残って本気が出せないかもしれないから延期…とか出来ないかな～？って提案してみるけどどうかな？」

「ダメです。」

バッサリと切り返された。

「…どうしても？」

「ダメです。」

「明日俺も少し用が出来ちゃって、出来れば日にちを変えてほしいな～とか思ってるんだけど…」

「まさか先輩は私との約束を忘れて、違う人と約束をしたなんて言

いませんよね。」

笑顔で聞いてくる七咲。

…これは早めに降参しといた方が良さそうだな…

「しゃーない…じゃあ明日12時に集合でいいや。」

「はい。ありがとうございます。それでは失礼します。明日は負けませんからね。」

そうして礼儀正しく挨拶をした後七咲は自分のクラスに帰っていった。

「しんどいことになったな〜」

明日の予定にため息を吐いていると純一が突拍子もないことを言い出した。

「それで怜はいつから七咲と付き合ってるの？」

…思考が止まる

「…いや…俺は付き合ってるつもりないんだが…」

「でもプールでデートするんじゃないの？」

「梨穂子まで…面倒くせぇ〜…」

勘違いしてる二人にどう説明しようか…

もうテキトーに誤魔化しとくか…

「それなら純一と梨穂子の方が付き合ってるように見えるぞ。」

「「えっ！」」

「二人仲良く話してること多いし、タオル届けたりして…」

瞬時に赤くなる純一と梨穂子。

「ホ…ホントに見える？」

「まぁ冗談だけどな。」クルッと手のひらを返す。

「えぇ～！ひどいよ～！」

「なにがひどいんだ？」

さっきの仕返しとばかりにどや顔で返す。

「うう～…リョーのイジワル！」

顔を真っ赤にした梨穂子は一人走って行ってしまった。

顔がまだ少し赤い純一は

「梨穂子は冗談も分からないのか…」

などと大人ぶってる。

それにイラッときた俺は更に

「でも付き合えばいいカップルになると思うけどな。」

と追い討ちをかけといた。

「ぼ…僕はしっかりした子がタイプなんだ！梨穂子じゃ合わないよ！」

ははっ、と乾いた笑い方をしながら話す純一。

そんなことを言う純一を置いて俺はさっさとクラスに戻る。

いちいちつきあう義理も体力もないからな。

そうして今年の輝日東の体育祭は終わった。

8話（後書き）

体育祭編終了です…

見せ場も作れず終わってしまいましたが、グダグダダラダラがモットーの世界観（というか意図せずそうなってしまう）なので、こんなんでいいか、と妥協してしまいました…

すいませんっした！

9話

「明日かぁ…」

私はすでに寝る支度を済ませベッドの中に潜り込んでいる。

家の手伝いが日課となっていて、今日も洗い物を済ませ、郁夫をお風呂に入れて寝かしつけてから床についた。

「先輩とまた一緒に泳げるなんて嬉しいな…」

後は寝るだけ、という状況なのに気持ちが高ぶって眠れない。

明日のことを考えているからだ。

…先輩のことを考えているからだ…

「先輩はいつから泳いでないんだろう…」

小学生の頃からの付き合い。

ただ一緒に泳いで、一緒に帰って、たまに一緒に遊んで…

そんな関係。

「私より速かったらどうしようか…」

水泳クラブで何度も何度も勝負して、結局全然勝てなかった。

先輩が小学校を卒業する年は毎日のように勝負していた気がする。

「うん…その方が嬉しいかもしれない…」

いつもヘラヘラして泳いでいる先輩。

物覚えの悪い先輩。

頼りにならない先輩。

でもとても頼りにしたくなる先輩。

泳ぎがとてもキレイだった先輩。

常に越えるべき存在だった先輩。

私の全てをさらけ出せた先輩。

…気になって仕方がなかった先輩…

「そしたらまた先輩と一緒に泳ぐ理由が出来るし…」

別の中学校に入って会えなくなった先輩。

高校生初日に会えたときはびっくりして少し顔が赤くなってた気がする。

「先輩凄く大きくなってて驚いちゃった…」

全く変わってなかった先輩。

身長は凄く伸びていて、顔つきも大人っぽくなっていたが全く変わってなかった。

「先輩も覚えていてくれたのかと思ったのに…」

思い返すのは入学式の帰り道。

まるで覚えているかのように話を返す先輩。

昔からいい加減な人だった。

それがバレて私に必死になって謝ってくる所まで変わらない。

「そういえば先輩今一人暮らししてるんだっけ…」

これは今日初めて知ったこと。

なんでも叔父さんがリストラに遭って、お金を稼ぐために夫婦で出稼ぎに行ってるらしい。

先輩は高校に入学したばかりで、叔母さんたちが高校だけは卒業してほしい、と言って一人残していったそうだ。

「それなら朝の支度とか大変だよね…」

朝起きて朝、昼の分の食事を作って、洗濯物を干して…時にはゴミ出しもあるだろう。

私はその手伝いをしているから大変なのは分かっている。

「お弁当作ってあげるくらいなら迷惑にならないかな…」

ふと先輩にお弁当を渡す自分の姿を想像して真っ赤になる。

顔が熱くなり目が冴えてしまった。

「よし。明日先輩に聞いてみよう。」

決心して目を閉じる。

まだまだ眠れなさそうだけど今はこの幸福感に包まれているだけでいい。

やっぱり私は先輩の事が好きだ…

「おし！１２時１０分前！」

俺は左手首に着けた腕時計を見て安堵する。

「七咲はたしか時間に厳しかったもんな…」

小学生の頃から遅刻が多い俺を叱ってたと思う。

「七咲は…まだ来てないみたいだな。」

前日に勝るとも劣らないほどの強い日差しの中、プールの前には俺の姿しかなかった。

ちなみに純一と梨穂子はプールじゃなくて映画に向かわせた。

この後予定が入ってることと、梨穂子へのアシストを考えての行為だ。

（梨穂子は泳ぎ苦手だからな～）

とりあえず近くのコンクリート塀に寄っ掛かって待つことにした。

５分経った…

更に１０分経った…

更に１５分経った…

七咲はまだ姿を見せない。

「中で待ってるのかな。」

そうなんだろうな～と考えた俺は入口の所にいる施設の人に一言告げてから中へと入っていった。

こういう時顔馴染みだと便利だ。

水着に着替え終えてプールサイドに出てきたが人の姿はほとんどなく、七咲の姿もそこにはなかった。

なんかあったのかな…などと考えつつも準備体操を進めていく。

念入りに準備体操を行いさぁ軽く泳いでようかな、といった所で早歩きで入ってくる七咲の姿を見つけた。

七咲の隣にはなぜか郁夫もいる。

「先輩すいません！遅れちゃって…」

こちらを見つけると急いで近付いてきた七咲はすぐに謝ってきた。

「別にいいけど…なんかあったの？」

「いえ…少し寝坊してしまいました…」

恥ずかしそうにしながらも申し訳なさそうに答えた。

「それならしゃーないな。なんもなくてよかったよ。」

と頭にポンと手を乗せる。

「はい…すいませんでした…」

それでもまだ謝る七咲。

それをあえて無視する事にした。

「それで郁夫はどうして付いてきたんだ？俺に逢いたくなったのか？」

カワイイ奴め！と頭を手のひらでグリグリ撫でながら俺は言う。

郁夫は何も反応してくれなかったが…

「あっ…郁夫実は泳げないみたいで…この後教えてほしいと頼まれたので、連れてきたんです。」

「そういうことか。良かったな～！姉ちゃんに教えてもらえて～！」
またもグリグリしてみるが無反応…
嫌われてんのか？俺…
「コラ！郁夫！ちゃんと先輩に返事しなさい！」
と七咲が郁夫を躾る。
怖い姉ちゃんだな…と郁夫に同情したからか、郁夫に助け船を出してやる。
「まぁまぁ。それより早く始めようか？2時からクラブの低学年の生徒達が殆ど占拠しちまうから。」
このプールは50メートルが6レーンあるだけだ。
それを学校帰りのクラブの生徒が4レーンほど使うため、その間は2レーンしか一般開放されない。
「そうですね。では私も準備してきます。」
と七咲は郁夫と一緒に準備体操に向かった。
「じゃあ俺は軽く泳いどくかな！」
そういって一人水の中に潜る。

「じゃあそろそろやりますか？」

ひと泳ぎ終えた所で、隣のレーンで泳いでいた七咲に声をかけた。

七咲も了承してくれたため俺達は一度プールサイドに上がった。

「ちょっと頼んでくるから待っててくれ。」

そういってプールサイドにいる監視員に話しかけにいった。

内容は飛び込みの許可。

ここでも顔見知りの力を存分に発揮して一度だけなら、と了承を貰えた。

「じゃあ１００メートル自由形一発勝負だ。準備はいいか？」

「大丈夫です。先輩こそ大丈夫ですか？」

「まぁたぶん…。じゃあ郁夫合図してくれ。」

そういって郁夫にスタートの合図をだすよう促した。

郁夫が手を叩いたらスタートにするのは俺が決めたことだ。

スタートって言わすのは時間がかかりそうだったし、監視員の人に今から飛び込むから合図を、と頼むわけにもいかないかな、と無駄に気を使ったためだ。

「じゃあ郁夫おねがい。」

そういって七咲は飛び込みの体勢に入る。

「勝てっかな…」

不安を出しつつも俺も飛び込みの体勢に入った。

パン！と郁夫の手を叩く音が聞こえると同時に俺達は水面に向かって勢い良く飛び込んだ…。

結果は俺のギリギリ勝利で終わった。

最初から飛ばした俺が七咲から逃げ切りなんとか勝利を収めた。

「相変わらず先輩は速いですね。」

負けたのに七咲はとても嬉しそうに話している。

「ターンの後全然スピードが乗らなかった時はちょっとどうしようかと思ったわ。」

「そうですね。先輩の姿が近付いたときは勝てるのかと期待しちゃいましたよ。」

「まだまだ負けらんねーよ。一応俺先生だから。」

と胸を張りながら七咲に言った。

「先生？私先輩から教わった覚えがないんですけど…」

不思議そうに言い返す七咲。

「そうじゃなくて…おっ！噂をすれば何人か来たぞ！」

そういってプール入口を指差した。

そこから何人か水泳クラブの帽子を被った子供たちが入ってくる。

「あぁ～！たつみせんせ～！今日はたつみせんせ～が教えてくれるの？」

入口にいた子供たちは俺を見つけると走って駆け寄ってきた。

「そうだな。今日はコーチの松ジィが休みだから代わりに俺がやるぞ。」

「やった！たつみせんせ～の方が練習楽だもんね！」

ねぇ～！と意気投合する子供たち。

「てめぇら…今日はビシビシいくから覚悟しとけよ！」

えぇ～！と反発されても変わらないからな。

子供たちと盛り上がってた所為で七咲はポカーンとしていた。

「先輩は水泳辞めたんじゃ…」

「いや、そうは言ってないけど。俺ここでバイトしてるから。プールの監視員、兼たまにコーチみたいなことしてるんだよ。」

子供たちに腕を引っ張られつつ俺は答えた。

「いや～金に困ってたらコーチの松ジィが…松ジィ覚えてる？昔俺らにも教えてくれてた人なんだけど…」

「はい。松原コーチのことは覚えてますけど…」

「たまたま松ジィにあったらさ。ここでバイト募集してること教えてくれて、それから働いてんだよ。」

実はこの後も急遽バイトが入っちゃって…と俺は七咲に告げた。

「そうだったんですか…」

七咲はなんだかとても嬉しそうな笑みを浮かべている。

なんかあったのか？

俺にはさっぱり分からず、とりあえず子供たちの相手に回ることにした。

先輩が水泳を続けていることが凄く嬉しかった。
また先輩という目標が出来たのも凄く嬉しかった。
先輩が子供たちに人気があるのは凄く嬉しかった。
今日は本当にいい日だ、と子供たちに悪戦苦闘する先輩をみて思う。
「じゃあ郁夫。あっちのレーンで泳いでみようか。」
と郁夫にも水泳の楽しさを教えてあげようとする。
郁夫も先程の勝負をみたからか早くプールに入りたそうにしていたし。
「先輩。それじゃあ私達はあちらにいますから。失礼します。」
「分かった。七咲も頑張れよ。」
「はい。先輩もバイト頑張ってください。」
そういって奥のレーンへと向かう。
後ろから子供たちが、あれせんせ～の彼女～？
違うわ！お前らの先輩だよ！

と騒ぎ声が聞こえる。

先輩の彼女に見られたことが、たとえ子供にでも嬉しかった。

一つ聞くのを忘れていたことを思い出して、私はクルッと先輩の方に振り返った。

「先輩！明日先輩のお弁当作りますから一緒に食べましょうね！」

と先輩に大声で話す。

子供たちにヒューヒューとからかわれつつも先輩は了承してくれた。

「よし、明日は少し早起きしないと…」

意識はすでに明日へ飛んでいた。

その意識を無理やり引き戻して、郁夫に泳ぎを教えることに全力を注ぐことにする。

それでも明日のお弁当の献立を考えてしまうのを止めることは出来なかった。

早く明日にならないかな…

9話（後書き）

水泳の知識０じゃこの程度しか分かんないっす…

なんで水泳を選んだ…

１０話（前書き）

やっと１０話！

実はこの話は１３話の予定だったとかそんなことは気にしない！

…あまりに文章が短すぎたんで、結合せざる得なかったんです…。

１０話

体育祭も終わってクラスに満ちていた活気はどんどん萎んでいった。
それもそのはず、体育祭は数少ない行事の一つだし、このクラスで初めての学校行事だったわけだし。
まぁクラスの雰囲気が変わった理由の大元はそんなもんではないが…
「さて…俺もそろそろ動きますか。」
そういって席を立つのは旧C組の３バカの一人。
向かう場所は隣のクラスだ。
B組に着いて中を覗くと目的の人物は女の子と仲良く話していた。
話が盛り上がっているらしく俺が来たことには気付いてない。
「梨穂子～！ちょっといいか～！」
俺は悪いと思いつつも目的の人物を呼んだ。
こんなことすれば噂の一つでも立ちそうだが、今のところは出てないみたいだし、まぁ大丈夫だろう。
「あっ！リョー！どうしたの？」
梨穂子は友達にちょっと待ってて！と一声かけてからこちらに寄っ

てきた。

「え～っと…本日はお日柄もよく…」

「今日午後から雨降るらしいよ～」

「マジか！洗濯物干しちまったよ…」

「あはは…それは残念だね～」

「はぁ～…まぁそれはいいとしてだ。」

「いいの？」

「よくないわ！…っとこんな話がしたかったんじゃないんだ。」

このままじゃ話が終わらないので強引に戻そう。

「そうなの～？」

「実はそうなのよ～。ワタクシ巽怜は梨穂子さんに頼みたいことがありまして…」

「分かってるよ～。いっつも頼まれてることだし。」

梨穂子は何でもお見通しかのように話す。

さて話は戻るが、なぜ俺のクラスの雰囲気が落ちているのかと言うと、

「ノートのことだよね。放課後になったら何個か貸したあげるよ～」

「かたじけない…」

もうすぐ今年度一回目のテストが始まるからだった。

輝日東高校にも高校生活に必要不可欠なテストがもちろん存在する。偏差値自体そこそこなため、基本的な内容を理解しとけばなんとかなるようなものだが。

また教師によっては授業中に出した応用問題を出してくる人もいる。そんな教科書やノートを理解出来れば大丈夫なテストで困る人物とは誰か？

そう。授業中に寝てばかりで全くノートを取っていない俺のような奴である…

そのため俺は毎回梨穂子にノートを借りてそれをコピー（手書き）する事でなんとか今までも赤点を回避してきた。

（梨穂子は授業は結構真面目に受けてるからな～）

梨穂子は授業中意外にもあまり寝ないため板書されたことはキッチ

リと書いてある。

ただふと違うことを考えてたりしてしまうため、上の空になって聞き逃すことがあるそうだが…

「別にいいよ～その代わり数学教えてね～」

「おう！そっちは任せろ！」

これも毎回あることで俺の唯一成績のいい教科である数学を数学が苦手な梨穂子に教えている。

なぜ数学だけ得意なのかは分からないが、とりあえず８０点後半位は毎回取ることが出来た。

「じゃあ放課後ね～！場所はどうする？」

「それじゃ久しぶりに梨穂子の家でいいか？洗濯物取り込んだら向かうから。」

「うん！いいよ～！」

そうして梨穂子と約束した。

梨穂子の家には幼なじみのためか何度も行ったことがある。

純一と梨穂子とは昔から家族ぐるみの付き合いで、しょっちゅうお互いの家で泊まったりもした。

そんなわけで

「あら～怜君！久しぶりね～！今クッキー焼いたんだけど食べる？」

と家に入ってすぐにお菓子を勧められるぐらい梨穂子の叔母さんとも仲がいい。

「ありがとうございます。めちゃくちゃ旨そうですね～。」

「あ～！お母さんワタシも～！」

「梨穂子は昨日冷蔵庫に取っといたお母さんのプリン食べたからなしでーす！」

「そ…それは～…あはははは…」

まるで子供のような会話だがこれが桜井家の普通なのだ。

梨穂子も叔母さんのことを、なんでも話せる友達みたい、と話していたことがあったな。

「じゃあ梨穂子。とっとと始めようか。叔母さん。絶対に梨穂子にクッキー食べさせないんで安心してください。」

そういって叔母さんからクッキーの入ったバスケットを貰い、一足先に二階の梨穂子部屋に向かった。

後ろから梨穂子の、裏切り者～！という叫び声が聞こえたような気がする…

まぁ無視するけどね。

梨穂子の部屋は結構シンプルだ。

入って左からタンス、ベッド、机がくの字状に並んでいるだけで、後は女の子らしく（梨穂子の部屋しか入ったことはないが）何個かぬいぐるみが置かれているだけだった。

ぬいぐるみそれぞれに名前があるらしく、一人になるとぬいぐるみの名前を呼んでぬいぐるみに話しかけているらしい（叔母さんから情報が流れてきた）。

俺は部屋の中央に折り畳み式の円い机を置いて、梨穂子は自分の勉強机でそれぞれ作業を始めた。

梨穂子は学校指定の数学の問題集、俺は梨穂子のノート写し。

そして梨穂子に分からない問題が出てきたら、俺が解答を見ながら解き方を説明する、といった流れが延々と続くだけである。

そうなると基本不真面目な俺は単調なノート写しにダレてくるわけで…

「なぁ梨穂子？純一とのデートは楽しかったか？」

梨穂子の勉強を邪魔することにした。

「ひゃっ！いきなり変なこと言わないでよ～あれはデートじゃないってば…」

梨穂子は手を止め、体をこちらに向けて話を返してくれた。

いい暇つぶしになりそうだな。

「でも二人っきりで映画だろ？誰がどう聞いてもデートとしか思わないでしょ。」

「…やっぱりそう聞こえちゃう？」

と恥ずかしそうにしながら聞いてくる。

「そりゃね～。で、結局どうだったん？」

「見た映画が地球侵略に来た宇宙人と主人公が戦うやつで、凄い迫力だったよ～光線がビュンビュン飛んだりして「映画の話聞きたいんじゃないからな？」」

身振り手振りつけて映画の内容を話し始めた梨穂子をキッチリ止める。

「えーっと…映画の後純一とファミレスでデザート食べて…普段と変わらない感じで話して…それで一緒に帰ったよ？」

「手なんか繋いだりしてねぇの？」

「そんなこと出来ないよ～！…そりゃ繋ごうかな～くらいは思ってたけど…」

もじもじして話す梨穂子。

「純一はそんなこと気にせず綺麗な人を見て、なぁ！あの人凄く美人だったな！なんて言ってくるし…」

「そ…それはドンマイ…」

「ホントドンマイだよ…」

落ち込む一方の梨穂子。

「まぁ今度は上手く行くだろ！俺が二人っきりになれるようセッティングしてやっから落ち込むなって！その時手をつなぐなりキスするなり好きにすればいいじゃん！」

梨穂子応援隊隊長の俺はすぐさま梨穂子の機嫌を取りに行く。

「そうだよね…よ～し！次は頑張るぞ～！」

「その息だ！梨穂子！」

「頑張るぞ～！お～！」

「お～！」

俺達は二人で拳を作って片腕を天井に向かって突き上げながら大声をあげた。

梨穂子の機嫌は良くなったみたいだな…

「じゃあ梨穂子はどこに行きたい？」

ある程度気合いを入れてから俺は今後の予定を決めるべく梨穂子に聞いてみた。

すでに俺の頭の中に勉強の二文字はない。

「えーっと～駅前のケーキ屋さん！」

「放課後にでも誘って行け！そうじゃなくて休日にデートで行くような場所だよ。例えば遊園地とか展望台とか…」

「えーっと…純一は高いところ苦手だから…」

「そういやそうだったな…面倒くせぇ～奴だな…」

「それじゃ水族館に行きたい！」

「水族館か…じゃあどうやって誘おうかな…」

俺は一人考え込み梨穂子は俺をただただ待つ。

「じゃあ梨穂子が直接純一を誘うとか…」

「え～！助けてくれないの～！」

「それが一番手っ取り早いんだけどな…」

「それは～…あはは…」

梨穂子の反応はイマイチだ。どうもまだそこまでは踏み込めないみたいだ。

「でもデートっぽくしなきゃ意味ないしなぁ～俺や薫がついて行ってもダメだろ？」

「え？別にいいけど？」

「いや～…そう思ってくれるのは嬉しい限りですが、今回は楽しむのが目的じゃないだろ？」

「そうなの？」

梨穂子は純一と楽しめれば誰がいようが関係ないらしい…

「俺達がいたらデートじゃないだろ…でもそんな感じでいくか！俺と薫と梨穂子と純一で水族館行くようにして俺と薫はどっかに消えればいいんだから！」

「え～っと…棚町さんは協力してくれないと思うけど…」

「薫なら面白そう！とかいって乗ってくるだろ。」

「…なんとなくだけど棚町さんも純一のこと好きなんじゃないかな～って思うの。」

「薫が？そんな感じしないけどな～」

いつもふざけあってるだけの印象しかないわ。

「たぶんそうだと思う…だから棚町さんはダメだよ～」

「まぁ…梨穂子がそういうなら他の手考えるか。」

「三人じゃダメなの？」

「俺一人離れる理由がなくなるからな～二人っきりにさせようとあからさまになるし…」

「それもそうだね～」

「じゃあ伊藤さんはどうかな？あの子なら付き合ってくれるだろ？」

「香苗ちゃんか～うん！あとで何か言われそうだけど付き合ってくれると思う！」

「じゃ伊藤さん含めた四人でいくか！」

「そうだね！いつ行こうか～？」

「テスト終わりの週末とかがいいだろ！そこの方が俺的にも誘いやすい。」

「うん！じゃあ香苗ちゃんにも言っておくね！」

「よし！それじゃそういうことで！純一にはテスト終わってから言うから待ってろよ！」

「分かりました！隊長！」

こうしているうちに時刻は七時近くになっていた。

叔母さんが夕食に誘ってくれたため一緒に頂き、満腹感を得つつ俺は自宅に帰った。

ノートはもちろん写しきれてないがまぁテストはなんとかなるだろ！

写しきれてないのはいつものことだからな！

だからダメなのか？

こうして梨穂子と約束した。

上手くいきゃいいが…

11話

「「はぁ～…」」

俺と純一の溜め息が暖かい風が吹く屋上に流れる。

「二人とも撃沈だったみたいね～」

梨穂子と同じクラスの伊藤さんがそんな俺達を見て状況を察知してくれたみたいだ。

今日はテスト最終日で、俺と純一、梨穂子に伊藤さんの四人で集まって昼飯を屋上で食べていた。

テストは午前中で全て終わったが、俺達の学年だけ二学期にある修学旅行についての集まりが有るため残されていた。

テストが散々な結果になりそうな俺と純一は傷心の心を癒すべく購買部で飯を買ってから屋上に向かうところ梨穂子達に遭遇して一緒にお昼を食べることになった。

もちろん梨穂子達の出てくるタイミングから純一がテストの成績が悪く落ち込むことまで全て打ち合わせ通りだが。

「今回難しすぎだろ…」

「僕もそう思うよ…絶対平均点を落としに来てるよ…」

「今回は凄く甘く作ったって言う先生ばっかりだけどね…」

「で…でも数学は難しかったよね～」
梨穂子は話を合わせようとしてくれていた。
まぁまったく気付かないで、
「いや、数学は楽勝だっただろ。」
なんて言ってしまった。
「うん。８０点ぐらいはいったんじゃないかな？」
「それなら今回も俺の勝ちだろうな～。俺は９０点は固いと思う。」
「う…裏切り者～！」
梨穂子の声が屋上に響き渡った。
他は負けてるんだから許してくれ…梨穂子…
「でも今回は自信あったのにな…」
俺は溜め息をつきつつ、例の作戦を実行する。
「僕もだよ…」

「本当心が痛むな…」

「誰か僕達の心を優しく癒やしてくれないかな…」

「そういやイルカとか見るのはヒーリング効果があるらしいぞ？」

「そうなの？」

「あぁ。せっかくだし二人で水族館でも行くか？」

「男二人で行って何が楽しいんだよ…。逆に寂しくなるだろ？」

「俺達を優しく癒してくれるイルカがいるじゃないか…」

「それもそうだね…じゃあ二人寂しく行こうか…」

「うわぁ…橘君こんなのでいいんだ…ねぇ？自分で誘った方が良かったんじゃない？」

なんて俺の小芝居とそれに乗っかる純一を見て伊藤さんは梨穂子に耳打ちする。

「あはは…リョーも必死に考えてくれたから…」

なんて俺を庇ってくれる梨穂子。

俺の抜群の演技に何の不満があると言うんだ…

「じゃあ今週の日曜行くか…」

「はいはーい！私達も行くわよ～！」

「伊藤さん…君も成績悪かったんだね…」

ズレたこと言いやがるのは純一。

「橘君に言われるほど悪くなかったけどね。ただ水族館にちょうど行きたかったから。ね？桜井？」

「う…うん！ちょうどイルカが見たかったんだ！」

「うわぁ…あんたも演技下手だったんだ…」

「え～っと…二人も来るのか？見ろ純一…神は俺らを見捨ててないぞ！」

「本当だね…一気に華やかになったよ！」

良かったな～なんて肩を組み合うバカ二人（俺達）。

伊藤さんの目がなんか引いてる。

（自称）モテない男なんてこんなもんなんだよ…

「じゃあ日曜一時に駅前の広場でいいか？」

「私達はいいよ～！」

「僕もいいよ！」

「じゃあそんな感じで！それじゃ教室に戻るか！」

約束を華麗に取り付けた俺は、そろそろチャイムなるよ、と言って立ち上がる。

「それじゃ行きましょうか！」

伊藤さんがそう言って立ち上がるのを皮切りに残り二人も立ち上がる。

こうしてそれぞれの教室に戻っていった。

俺は全て上手くいったな～と安堵していた。

しかし上手くいかないこともあるもので…

「ゴメン！日曜にどうしても外せない予定が入っちゃって行けなくなっちゃった！」

と伊藤さんが申し訳無さそうに、手の平を顔の前で合わせながら次の日の昼休みに俺に言ってきた。

「それはしょうがないからいいけど…どうすっかな～…延期すっかな？」

「でも桜井が凄く楽しみにしてて…昨日も帰り道水族館のことばっかり話してたし…」

「そっか～…でも俺女友達ってそんないないからな～」

どうしようか～と二人で考えても結局昼休み中に良案は浮かばなかった。

最悪三人で行くことにしてドタキャンするか～などと考えながら一人校舎を出た所で後ろから女友達の一人が話しかけてきた。

「先輩。今お帰りですか？」

「あぁ…七咲か。俺はちょうど今帰るとこだけど七咲は？」

「はい。私も今帰るところです。よかったら一緒に帰りませんか？」

「あぁ。一緒に帰るか。」

「はい。じゃあ行きましょうか。」

そして俺達は二人並んで校門から出る。

最近七咲と話すことが多くなって、もっぱら俺のバイトや一人暮らしについて聞いてくる。

今日もその辺を当たり障りないよう話す。

「先輩はバイトもお休みの日は何をしているんですか？」

「基本的に休みの日はバイトが入ってるからなぁ…まぁゴロゴロしてたりその辺をブラブラ歩いたり…特に何をしてるってことはないかな。」

「そうですか。なら今度お休みの日があったら一緒に出かけませんか？」

「そうだな～…いつになるかわからないけどそれでいいなら…」

「はい。私待ってますから。」

「ん？そうだ！それなら次の日曜はどうだ？」

「日曜ですか？はい。大丈夫ですよ。」

「実は日曜に純一と梨穂子と三人で水族館に行こうとしてるんだけど一緒に行かないか？」

「お二人もいるんですか…まぁ先輩ですもんね…」

七咲は頭に手をついて呆れている。

「どうした？七咲？その日はやっぱなんか予定あったか？」

「いえ大丈夫です。」

「じゃあ日曜１時…いや１２時に駅前の広場集合してくれ。」

「はい。分かりました。」

そういって七咲を誘っといた。

これでなんとかなるだろうな。

そして当日に至る。

「こんにちは。先輩。」

「おっ！七咲来たか。」

「はい。お待たせしました。お二人はまだ来てないんですか？」

七咲は辺りをキョロキョロ見渡す。

「あぁ…二人には一時集合って言ってあるからな。」

そこで俺は本日の主旨の説明に入ることにした。

「えっ…」

「実は今日は純一と梨穂子二人っきりにさせるための集まりで、七咲にそのことを教えるために先に呼んだんだよ。」

「…用は手伝って欲しいってことですね？」

「そうなんだよ！七咲！せっかく楽しみにしてくれてたのに悪いけど今日は二人っきりにさせてあげてくれないか？」

頼む、と手を合わせて七咲に頼み込む。

「別にいいですけど…先輩はそれでいいんですか？」

「…！なにが？」

「あの…私と二人っきりになるんですけど…」

あぁ…そういうことか…

「あぁ…七咲なら二人でいても楽しいし問題ないっしょ！」

「はぁ～…そうですか…」

とあからさまに七咲から元気がなくなっていく。

「なんか元気ないな～七咲？今から飯奢ってやるから元気出しな！それもあって七咲を時間より早く呼んだんだから！」

「いえ、それくらい自分で出しますよ。それに先輩お金あるんですか？」

「後輩にお金のことで心配されるとか情けねーな～。この前松ジィの代わりにバイト入った時、松ジィからも臨時収入が入ったから大丈夫だよ。」

胸をポンと叩いて自信満々に七咲に言う。

「先輩…松原コーチから脅してお金取ってきたんじゃないですよね…」

「そんなことするか！」

「ふふっ…すいません。そういうことならありがたく頂きます。」

七咲は機嫌を取り戻してくれたようだ。

「よし！それじゃ食いたいもん食って良いぞ！」

「…でも先輩？私が先輩と二人っきりを嫌がってたらどうしたんですか？」

待ってましたとばかりに、俺はその質問に即答する。

「昼飯で釣ろうとしてた！」

「……そうですか…」

「まぁ細かいこと気にすんな！七咲ならそんなこと言わない自信もあったしな。七咲ってお節介焼きっぽいからな。」

「…それは好きな人にだけですよ…」

「ん？なんか言ったか？」

「なんでもありません！それより早くお昼食べましょう！」

「あ…あぁ…じゃあ行くか。」

こうして七咲を仲間に引き入れた。

これで梨穂子と純一を二人っきりにするのも楽勝だな～。

ただ昼飯で入ったラーメン屋で七咲がやたら俺の方を気にしてたな…

コショウ取ろうとしたら先に取ってくれたり、水が無くなったらすぐに注ぎにいってくれた。

七咲は本当にお節介焼くのが好きなんだな～

１１話（後書き）

なんかＰＶってやつが１００００を越してました！

正直どういうことか分からないですが、ありがとうございます！

今後の更新ペースなんですけど、基本的に今まで通り不定期になります、すいません！

今このＳＳが終わってないのに他のやつを考えていまして、そちらが１話完成する毎に更新していこうかな～と思っていますので、気長にお待ち下さい。

本当に浮気性で駄文しか書かない自分なんだと反省しております…

すいませんでした！

１２話（前書き）

改めて自分の書く文章を見て…面白くねぇ～！と思ってしまった…。

というか元々書こうとしてたのは、アマガミのヒロインに、別のヒロインのイベントをさせたかったんですよね～。

梨穂子と水族館デートとか、七咲をおんぶして家まで送ったり…全く出来てない…ｏｒｚ

12話

小学校からの親友である怜の誘いで僕達は輝日東水族館に行くことになった。

なんでもイルカにはヒーリング効果があるらしく、イルカを見て僕達の傷付いたか弱い心を癒そう！ということで水族館になった。

最初は梨穂子と同じクラスの伊藤さんも来る予定だったのだが、急用ができ来れなくなったと当日になって聞かされた。

それでも怜が代わりに七咲を水族館に誘っていたらしく、当初の予定とは少し変わったが僕、怜、梨穂子、七咲の四人で向かうことになる。

駅前からほどほどに混んだバスに乗り込み、僕達は目的の水族館を目指した。

バスの中で昨晩のテレビ番組のことで盛り上がる僕と梨穂子が、静かにしてください、と七咲に注意されたり、吊革を掴みながら寝ていた怜が降り遅れかけたりもしたが、無事に水族館に辿り着いた僕達はとりあえず目的のイルカショーを先に見に行くことにした。

誰もイルカショーについて調べてこなかった所為か、水族館に着くとすぐにイルカショーが開演する時間だったことと、次回のショーは三時間後だったため先に見てから水族館を回ることになった。

ショーが行われる会場は二百人くらい入れそうな広さで、ステージを中心に扇形に広がっている。

休日のためか家族連れやカップルといった人達が多くいたため四人が並んで座れる場所を見つけるのに手間取ったがなんとか座ることができ、僕達は並んでイルカショーを見ることに成功した。

二頭のイルカは可愛い調教師が水面から少し上に離した位置になるよう手で持ったフラフープの間を順にくぐり抜けたり、十メートルくらい水面上から離れた所にあるボールを頭や尾で触ったりとイルカ達の演技は華麗に成功していく。

そのたびに会場から歓声があがり、僕達の心を癒してくれた。

大成功のままイルカショーは幕を引き、僕達は大満足で客席から離れようとした時だった。

ショーが終わり会場出口へと多くの人が集まって大混雑になってしまい、人の流れにより、怜達がどんどん先に流されて行ってしまった。

「怜達いないね。どこ行ったんだろ？」

大勢の人の波に乗れず離れてしまった僕達は、やっとのことでイルカショーの会場から出るとそこに怜達の姿はなかった。

「たぶん怜のことだから先に行っちゃったんだよ！僕達も早く行こう！」

そういって僕は手を取って先に進んでいく。

少し顔を赤くしながらも文句なく手を繋いだまま付いてきてくれた。

「うーん…あいつら出て来ないな～。」

俺達はイルカショー会場出口の付近で純一達を待っている。

俺達は人の流れに逆らえず純一達を置いていってしまったからだ。

そしてなんとか流れから抜け出し、通路の途中で純一達がすでに来るのを十分は待っている。

「出てくる人もまばらになってきたし…もう先に行ったっぽいな。俺達も先に急ぐか。」

「そうだね～。そうしよっか。」

そういって先に行ったであろう純一と七咲を俺と梨穂子は追いかけることにした。

なんで俺が梨穂子と二人っきりになってんだよ…

「先輩方はどちらに行かれたんでしょうね？」

「そうだね～…あっ！七咲ペンギンだよ！ほら見なよ！」

「橘先輩…探さなくて大丈夫なんですか？」

七咲は少し呆れ気味に言ってくる。

「怜達なら大丈夫だよ！それより七咲も見てみなよ！ペンギンが泳いでるよ！」

それに構わず僕は水槽越しに泳いでるペンギンを指差した。

「そうですね…先輩方も探してくれてますしあまり動き回らない方が良さそうですね…」

「あっ！ペンギンがエサ食べたよ！丸飲みして大丈夫なのかな？」

「先輩…ただ見て回りたいだけなんじゃないんですか？」

七咲は完全に呆れた。

「そ…そんなことないよ！僕もあまり動き回らない方がいいと思っ

ての行動で…」

「クスッ…先輩って子供っぽいんですね。」

わたわたと慌てて弁解する僕を見て七咲は素直に感じたことを言った。

「そんなことないって！せっかく来たんだから楽しまなきゃ損だろ？ほら！七咲も見てみなよ！」

少し顔を赤くしながらも僕はペンギンを指差した。

七咲もそれに応じて水槽に近付きペンギンを見始めた。

「本当に可愛いですね。凄く気持ちよさそうに泳いでる…。」

「ハハッ！確かにあんなに自由に泳げたら気持ちいいだろうね！」

「羽根を必死にパタパタとばたつかせて…こういう所を見ると本当に鳥なんだなぁ…と思いますね。」

七咲はペンギンに釘付けになりつつも僕に話しかける。

「普段はよちよち歩きで守ってあげなきゃ、って思うのに、泳いでる姿は凛々しくて…」

（そういえば七咲っていつもビシッとしてるよな…）

「お腹は丸々しててて触ったらふかふかして気持ちよさそうですし…」

（家では手伝いして、部活も一生懸命だし…）

「あっ！今またエサを食べましたよ！あれはイワシですかね…」

（よし！そんな頑張ってる七咲を誉めてあげよう！）

そんなペンギンを羨ましそうに見つめている七咲に少し近付き、

「先輩？」

不思議に思った七咲が首を振り向かせ声をかけてくる。

「いや…七咲は本当に偉いよな。」

そう言いながら僕は七咲の頭をなで始めた。

「……先輩…なにしてるんですか？」

当然突然の僕の行動に七咲は戸惑う。

「いや…七咲はいつも頑張ってるから誉めてあげようかな～って思って…」

「そうですか…でも別に誉められるようなことはしてないと思いますよ。」

「そんなことないよ。七咲は部活を一生懸命やってて更に家の手伝いもしてるじゃないか！」

「そんな大したことはしてないですけどね。」

「それでもだよ。七咲はそんなペンギンみたいにちっちゃな体で色んなことを凄く頑張ってるよ。」

「ペンギンみたいですか…」

何やら微妙な表情を七咲は見せる。

「そういえば七咲ってペンギンに似てるね。小さいし柔らかそうだし…なんかクールな感じとか守ってあげたくなる感じとかも似てる気がしてきたぞ！」

「あの先輩…少し声が大きいですから…」

とついつい大声を出してしまった僕を七咲が周りを気にしつつ言ってきた。

「うっ…ごめん。ちょっと周りの人が見てるね…よし！怜達もいないし先に急ごうか！」

恥ずかしさから逃げるように進路の先を指差し歩き出す。

「そうですね。名残惜しいですけどそろそろ行きましょうか。」

そういって七咲は一人先へと小走りで向かってしまった。

「あっ！七咲酷いよ！先に行くなんて！」

「クスッ…先輩！置いていっちゃいますよ！」

七咲は笑いながらするすると人の流れの中を進んでいく。

「おい！七咲！またはぐれちゃうだろ！待ってくれよ！」

僕は人の流れをくぐり抜け追いかけた。

もしかしたらペンギンも少しイジワルな性格をしてるのかもしれないな…

「こんなことになっちまって悪かったな梨穂子…」

いまだ純一達が見つけられない俺は本日の目的をぶっ潰したことを梨穂子に謝ることしか出来なかった。

「別に謝らなくていいのに～あれはしょうがないよ。」

そして梨穂子が許すといった構図がさっきから続いている。

「…とりあえずとっとと純一達を見つけるぞ！」

「待ってよ～！今日はもういいからゆっくり見て回ろ！」

先へと急ぐ俺を止め梨穂子が言ってくる。

「でも…今日をめちゃくちゃ楽しみにしてたんだろ？伊藤さんから放課後耳がタコになるほど今日のこと話してたって聞いたぞ？」

「それは楽しみにしてたけど～…けど純一と遊ぶためだけで楽しみにしてたんじゃないよ！」

「えっ…」

「純一と香苗ちゃんと怜と四人で出かけるのって初めてでしょ？だからどの位楽しいか分からないでしょ？」

「まぁ分からないかな？」

「だから楽しみだったんだよ！この前純一と一緒に行った映画もなんだかんだで楽しかったし、香苗ちゃんと2人でショッピング巡りも楽しいし…それにリョーと休日遊ぶの高校生になってから初めてでしょ？」

「…まぁ梨穂子に気を使って断ってばっかだったからな。」

「でも昔一緒に遊んだ時は凄く楽しかったよ！その三人と遊びに行くんだから絶対楽しくなるだろうな～って思ってたの！」

梨穂子が言うには今日は『みんな』で遊ぶ日だったらしい。

「…そっか…なら楽しまなきゃむしろダメだな！」

梨穂子はウソをつけない奴だということは俺自身がよく知っている。

その梨穂子がこう言ってくれている以上、俺が梨穂子を楽しませなきゃな！

「そうなんですよ～」

「よし！じゃあとりあえずこの辺りをゆっくり見て回ろうか。」

「そうしよ～！」

そういや梨穂子と二人っきりで遊ぶなんて何時以来だろうな…

「あっ純一！、逢ちゃん！」

ゆっくりと様々なエリアを見て回り、出口付近になったところで同じくゆっくりと見て回っていただろう純一と七咲を見つけることが出来た。

「桜井先輩、それに巽先輩も…てっきり先に行ってると思ってまし

た。」

「いや～二人が後ろにいると思って待ってたのが裏目に出ちまったみたいで…まぁドンマイってことで！」

「怜は本当テキトーだな～まぁ僕達も楽しめたから良かったけどね！そうだろ？七咲。」

「そうですね。橘先輩が子供みたいにはしゃいでるのを見るのは楽しかったですよ。」

七咲はニヤリといった表現が適切な笑い方をしながら話してくる。

「あはは！年下の逢ちゃんに子供っぽいって言われてる～！」

「なっ七咲！うそ言わないでよ！僕はそんなはしゃいでないだろ！」

「純一がガキっぽいのは当然だが、梨穂子も結構子供っぽいだろ。マグロ見て俺が冗談で、旨そうだな～、っていったら昔行った美味しい寿司屋の話を延々としてたじゃないか、まるで子供のように。」

「そ…それは～…だって凄く美味しかったんだよ！」

「先輩…それが子供っぽいと言われる所だと思いますよ。」

まるで七咲が年上の様に梨穂子を諭す。

こうしてガキ二人を弄りながら俺達はバスに乗り込んでいった。

途中、七咲はペンギンみたいじゃない？と純一が言い出した時は梨

穂子や俺も賛同したため七咲一人が弄られることになってたがこれも良い思い出の一ページになることだろう。

また四人でどっか行きたいな〜

金が貯まってからだが…

（今回結構出費したもんな〜）

こんな所にも梨穂子と出掛けなかった理由は存在していた。

とりあえずまた明日からもやし生活が始まるな…

13話（前書き）

駄文＋遅筆の私をお許し下さい…

13話

「やっと飯食えるな…腹減ったわ～」

ようやく終わった授業の教材を片付けつつ俺は溜め息をついた。

四時間目の地理は本当にしんどかった。

ただでさえ地理という科目に俺の（自称）理系脳はついていけない上に、教師の喋り方がどうにも眠気を誘うものにしか聞こえない。

普段なら授業始まると同時に机に突っ伏して寝る体制に入りそのまま夢の世界を旅するところだが、如何せん今日は朝飯よりも一時間の睡眠を取って目覚ましで起きた後二度寝してしまったため、生じた空腹感が俺を眠りの世界へと行かせまい、と現実世界に何度も呼び覚ました。

ぐぅ～…

静かに授業が行われている中、何度も何度も腹の鳴る音が教室中に響き渡り、その度にクラスメートがクスクス笑う。

ぐぅぅぅ～

何度も何度も腹が鳴るので、自分の周りのクラスメートには誰が鳴らしているかバレている。

それでも俺は眠りにつこうと羞恥心を捨てようと決心したが、

ぐきゅるるる〜…ぐきゅ…

今までに無いほどの音が出て、クラス中に爆笑が起こったのを切欠に眠気より羞恥心が前へと出てきた。

それからは恥ずかしさから机に突っ伏していた…

「今日は飯作ってないんだった…忘れてた…」

朝二度寝した俺は当然昼飯も作っておらず、鞄の中をガサガサと漁っても目的の物は見つからない。

仕方なく偶には食堂でも行くか、とクラスから抜け出し食堂へと向かっていると

「お〜い！怜どこ行くの？」

と純一が俺の後を追ってきた。

「今日昼飯作ってないから食堂に行こうかなって…純一は？」

「僕も今日は食堂の気分なんだ！ちょうどよかったよ。」

「じゃあ俺は購買に行こうかな。」

「怜…何で僕の意見を聞いてから変えたのかな？」

「冗談だって。じゃあ席なくなる前にとっとと行きますか。」

そうして俺達二人は食堂へと向かっていった。

「あ～腹減った～！やっと食べれる～！」

昨日の夜から何も口にしてない俺は食事できる事への感謝を口にしてご飯を食べ始めた。

「怜…ご飯一杯だけって寂しすぎない？」

純一はそんな俺の昼飯メニューを見て憐れみの目を俺に向けつつ話しかけてくる。

「馬鹿やろう！これは大盛のご飯だ！それにお前にはこのふりかけが目に入らないのか！」

「…ごめん。僕が悪かったよ…」

全く純一はこの鮭ふりかけ様のことを忘れるなんて…

むなしくなんてないからな！

「あ～いたいた！リョー～！純一～！」

飯を半分ほど食べ終わり、メインディッシュとして残していた鮭ふりかけの封を切ろうとしていた所でなにやら聞き覚えのある声がしてきた。

「梨穂子か。どうしたんだ？相席なら別にいいぞ。」

食堂は俺達が席を確保して食べ始めた時にはすでにだいぶ込み合っていた。

それは俺達の食事が終わる所に差し掛かっても変わらないわけで、遅れてきた梨穂子が座れる席を探していたのだと推理した。

「違いますよ～。今日はもうお母さん特製オムライス弁当を食～べま～した～！」

俺のちっぽけな頭脳をフル回転した程度じゃ梨穂子の行動すら読み切れないようだ…

「オムライスの話はいいから。それで俺になんか用か？」

喜々とオムライスについて話す梨穂子を止め、俺は本題へと移行させた。

「え～っと～ここじゃちょっと～…。今日の放課後暇？暇なら一緒に帰らない？」

「今日はバイトも無いし暇だな。」
頭の中のスケジュール帳をめくってみるが特に予定は無いようだ。
「ホント？じゃ一緒に帰ろう～！」
「そうだな。純一はどうする？」
「僕はちょっと梅原と用事があるから…」
「またゲーセンか…まぁ頑張ってラスボス倒してこい。」
中間テストも終わり気が抜けてるのも分からなくもないが、週に四回は行き過ぎじゃないか？
「良かった～」
「ん？何が良かったんだ、梨穂子？」
純一は心から漏れた梨穂子の呟きをしっかりと聞いていたようだ。
まぁ純一には話せないようなことなのかな。
「なんでもないよ！それじゃあリョー放課後ね！」
このまま話していたらボロが出るのが自分でも分かっているのか、梨穂子は約束を取り付けるとすぐさま食堂出口の方へと急ぎ足で向かっていく。

やたら慌てていた所為か色んな人にぶつかっては謝っていた。
誰も食事を持ってなかったため大事には至らなかったがかなり危なっかしかった。
「何なんだろうね？何か相談したいことが有ったみたいだけど…」
「まぁ放課後になりゃ分かるし別に気にすることじゃないだろ。」
あんな態度をされてはいかに純一でも気にするみたいだ。
後で俺に追求するのなら適当に言って誤魔化せると思うが、梨穂子にしたら何かボロがでるだろう。
「まぁ何でもいいだろ。それより今日ゲーセンでやるのってたしか昔純一の家でやった格ゲーの続編なんだろ？」
「そうなんだよ！そのゲームに新しく２０もキャラが増えているんだ。それでラスボスが主人公の……」
だから適当に別の話題を振って、純一の鳥頭から梨穂子の内緒話？を消し去ろうとする。
純一はゲームの話となると周りが見えなくなる。
それ故純一の熱いゲームトークは昼休みが終わるまで延々と続くだろう。

あと三十分か…と心の中でうんざりしつつも純一の話に適度に相槌を打っていく。

こういうのも俺の役目なんだろうな…

「あっ！リョー！」

帰りのホームルームが終わり、宿題が出された教科を鞄に詰め込みさぁ梨穂子のクラスに向かうか、というところで先にホームルームが終わっていたらしい梨穂子が廊下から声をかけてきた。

「おう。待たせたな。じゃあ帰りますか。」

「了解で～す！」

梨穂子はウインクをしつつ右手で敬礼して答えた。

まるでアイドルが軍人の仕草を物真似しているような可愛らしい敬礼に少し心がざわつく。

俺はそんな梨穂子を置いて一人先に下駄箱へと向かう。

顔が赤くなってるのを見せないよう…

「あ～待ってよ～！」

そんな俺の後を梨穂子はちょこちょこと追ってくる。

いちいち仕草が可愛らしいな。

校門から少し歩き、辺りの人が少なくなってきた所で先日の水族館の思い出を再び（既に三度は聞いた）噛みしめている梨穂子に俺は本題について訪ねてみた。

「それで今日はどんな御用でしょうか？」

「え～っと今からリョーの家に行ってもいい？その時話すから！お願い！」

少し上目遣いをしつつそんな事言われたら勘違いするだろ！

「別にいいけど襲うなよ。」

「食べちゃうぞ～がお～！」

少し動揺した心を隠そうとふざけて返してみたが梨穂子はライオン？の物真似しているような可愛らしい仕草をしてきた。

「はいはい。そんなに食べてばかりだと太るから食べないでくださいな。ライオンさん。」

「えっ！やっぱり太ってる？」

「いや、そんな事ないと思うけど。ジョークで言っただけだよ。」

ん？やっぱり？

「どうやら相談事ってのはその事についてみたいだな。じゃあこの話は一時止めますか。」

そして俺達は俺の家へと少し早歩きで向かう。

なんだか少し気まずい雰囲気になってしまったな…

「実は今朝久しぶりに純一と一緒に登校してたんだけど…」

家についてとりあえず梨穂子にお茶（バイト先で貰ったパックのやつ）を淹れた所でボソボソと話してきた。

俺はとりあえずただ黙って聞き役に徹する。

「昨日のテレビ番組の事とかいろんなこと話して、ちょうど今日の朝ご飯について話してた時なんだけど、前の方に凄く綺麗で有名な森島先輩がお友達と登校してたの。純一ってやっぱり美人な先輩が好きみたいで、それから森島先輩のスタイルについての話になったんだけど…純一スレンダーな人が好きみたいで、勇気出して「私はどう？」って聞いてみたの。」

「梨穂子にしては凄く頑張ったな。」

「ホントだよ～。絶対顔赤くなってたと思うもん…そしたら純一はもう少し痩せた方がいいって…」

「純一がそんなこと言ったのか？」

それなら後で説教しとかないとな。

紳士として女性のスタイルをケチ付けちゃいかんだろ。

「正確には「う～ん。別に太ってるとは思わないけど、とりあえずお菓子を食べる量を減らした方がいいと思うよ。このままだとぷくぷく膨れてフグみたいになっちゃうだろうからね！」って」

ちょっと半目にしつつ純一の声真似をしながらその時の状況を教えてくれた。

似てないのは愛嬌ってことにしとこう。

「それは別に梨穂子に痩せろ、とは言ってないだろ。ただお菓子食べ過ぎだって言ってるだけじゃん。」

俺は素直に思ったことを口にした。

「でも「太ってるとは思わない」だよ？もう少し痩せた方がいいって言ってるようなものじゃない？」

「ん…まぁそう取れなくもないな…」

「でしょ～…そこでリョーに頼みたいことが有るわけですよ。」

「ん？」

正直今の話から全く自分が役に立てそうな事が見当たらない。

頭を傾げる俺を見て梨穂子は丸型の折り畳み式テーブルから正座の体制にしつつずずっと後ろに下がり、頭を下げつつ言ってきた。

「え～っと、これからリョーの家で生活させてください！」

それはもう大きな声で何の迷いもなく。

「……はい？」

俺の頭は更に混乱した。

誰か翻訳頼むわ…

１３話（後書き）

今までもですが、だいぶ都合のいいように話が展開していきます。

…最終的には文明の利器が出てくる終わりを想定してます…。

１４話

とりあえず今までに起こったことを纏めてみようか。

俺は今日昼飯を食べている時に梨穂子に相談があるから放課後一緒に帰らないと誘われた。

帰り道にその相談事を聞いてみた所、どうも純一の好みが自分よりもスレンダーな人みたいだから痩せたいということらしい。

そのために俺の家に住みたいらしい。

はい、意味分からな～い！

「り…梨穂子…さん…？それは一体どういうことでしょう？」

俺の返事？を聞くまでずっと頭を下げていた梨穂子はすっと顔を上げて答える。

やけに礼儀正しいのは茶道部での練習のたまのも…いや賜物なのかもしれない。

落ち着け俺！

「え～っと、だから何日か一緒に生活させてほしいっていうか～」

「というか？」

「何日かリョーのご飯を食べさせてほしいの。」

梨穂子は上手く纏められた、と満足げになっている。

相手に伝わってないことを纏めて話すのは悪くないが、いかんせん纏まったものすら全く理解が出来ないものだったが…

「え～っと～梨穂子さん？何時の間にダイエットと私の食事に関係が出来たのでしょうか？まだ二人は出会って間もない関係だと裁判官は考えます。」

「異議あ～り！二人の関係には複雑かつ巧妙に隠された過去がありま～す。」

…指をビシッと指して言ってくれたのはノリがいいな～とか思うけど、正直今何を話しているかすら分からなくなってきてますよ。

「私って美味しいものが大好きなの。あと食べること。」

やっと梨穂子も詳しく順を追って説明してくれるようだ。

「それでお母さんが作ってくれる食事がとても美味しくて家でご飯食べると知らず知らずの内にご飯が進んじゃうんだ。」

「まぁ梨穂子は本当に嬉しそうに食べるもんな～」

「うん。それに雑誌とかテレビで新商品とか紹介されてるのを見るととりあえず買ってみて食べたりしてるの。」

「ああ。梨穂子がお菓子を持ってきて食べているのを結構見るしな。」

「そんな生活なんで食べる量が増えちゃって…てへへ。」

少し恥ずかしげに照れ笑いしながら話を続ける。

「それでそういう環境から離れたいな～と思ってたら体育祭のリョーのお弁当を思い出したの。リョーと一緒の物を同じだけ食べてればきっとダイエット出来るだろうな～って。」

「つまり、痩せるまで俺の生活を体験して、食事量を制限しようというわけか。」

「うん…リョーには悪いと思ったんだけどリョーぐらいしか頼める人がいなくて…」

眉を下げてまるで捨てられた子犬みたいな表情をしてくる。

それはもう手を差し伸べなきゃ、と心を奮わせた。

「まぁ飯作んのくらいなら別にいいんだけど…一緒に住むってどういうことよ？」

俺が弁当作りゃいい話しじゃないのか？

「いや～家に帰っちゃうと誘惑に負けちゃいそうで～」

「…その点俺んちには何も誘惑するもんが無いもんな…」

なんかすげー悲しくなってきたな…

「ん？てか伊藤さんとかなら手伝ってくれそうだけどダメなのか？」

別に男子じゃなくてもいいだろ。

てか心臓に悪いから出来れば御免被りたい。

「香苗ちゃんも考えたんだけど…香苗ちゃんもお菓子好きだし、何より説明するのが恥ずかしくて…」

男子んちは恥ずかしくないのか！

「…そこは頑張ってほしいとこなんだが…てか本当に俺んちに泊まるつもりなのか？」

「うん！リョーの家に泊まるの久しぶりで面白そうだし！」

「それは昔の家の話だろ。それに純一もいたしな。」

両親が出稼ぎに行く前に住んでいた家ではよくあったことだが今は状況が違いすぎる。

「あのな～俺は一人暮らしなんだぞ。高校生にもなったんだから少しは抵抗を感じようか。」

このままだと本当に泊まりかねないため俺は梨穂子に目を覚ませ、と告げた。

「へっ？なんで？」

梨穂子はポカーンとしている。

俺が何を言っているか理解してないようだ。

「え～っと梨穂子さん？あなたは別に男の家に泊まっても気にしないと？」

「そんな事ないよ～！でもリョーなら別にいいよ！」

「…男として見られてないのね……」

ちょっと心が痛むのは俺のハートが弱いからだろうか…

「分かったよ。飯は作ってやるよ。でも泊まりは無くてもいいだろ。飯食ったら家に帰って寝ればいいし。俺んちからなら近いしな。」

「あはは～…寝る前のチョコって美味しいよね～…」

「……はいはい。梨穂子さんを甘く見てた俺が悪うございました。」

お手上げです、と諦めを見せる。

「じゃあいいの？」

「しゃーねーからウチに泊まることを許可してあげましょうか。」

「ありがとう！リョー！じゃあ早速着替えとか持ってくるね～！」

そういって梨穂子は置いていた鞄を肩に掛け、元気に玄関へと向かう。

「じゃあ俺は今日の飯買ってくるから。そうだな…たぶん６時過ぎには家に帰ってると思うわ。」

今日から二人分作るのか…金大丈夫かな…

「分かった～！じゃあその頃になったらまたくるね～！」

そうして梨穂子は一度自分の家に帰宅した。

それじゃまぁタイムセールに期待してスーパーに行きますか。

「よしっ！出来たぞ～！」

俺は出来上がった料理を二つの皿に分け、テーブルへと持って行く。

テーブルの上には既に用意されたご飯二膳、玉ねぎの味噌汁二杯、箸二膳が置かれている。

そこに先ほどまで炒められていた出来立ての野菜炒めが、大皿に乗ってドカッと置かれる。

「今日はまぁ初日だし豪勢にしてみた。遠慮しないで食べてくれ。じゃあいただきます！」

野菜炒めをおかずにご飯を食べる俺に梨穂子は少し遠慮気味に話しかけてきた。

「え～っと～…豪勢？」

「豪勢。」

「…じゃあ明日からは…」

「もやしが大活躍する。」

「…ちなみにこのもやしの山は？」

「野菜炒め。」

「…いただきます…」

梨穂子は観念したのかとりあえず食べ始めた。

「んっ！このもやし炒め美味しいね！」

シャキシャキと良い音を鳴らしつつ、野菜炒めをどんどん食べていく。

「ただごま油で炒めて塩胡椒振っただけなんだけど、意外といけるだろ？」

「うん！凄く美味しいよ！あっ！お味噌汁も美味しい～！」

「玉ねぎだけで充分甘さが出るからな。」

「うん！これなら何杯でもご飯食べれるね！」

モリモリご飯を食べている梨穂子。

本当に気に入ってくれて嬉しいところだが…

「もう米無いけどな。」

「へっ？」

ほっぺに米粒を付けながら梨穂子は聞き返してきた。

「だからもう米が無いんだって。とりあえず給料日までは買えないからあと三日は食べれないぞ。」

「え～っ！ご飯無いの～！」

「あぁよくあることだよ。酷いときはパンの耳に砂糖まぶしたやつだけの時もあるしな。」

「……」

あまりの過酷さに呆気に取られてしまったようだ。

「まぁまだそこまで酷くはないからおかずとしてもやしくらいは食えるさ！」

「う～…早くも挫折しそうだよ～…」

少し涙目になりながらもやしを食べていく。

本当に食べることが好きなんだな…

「というわけでダイエット生活は明日から始めるとしてだ。」

「既に始まってますよ～…」

「梨穂子。とりあえず持ってきた荷物の中にお菓子入れてないだろうな。」

梨穂子の発言を無視して俺は一応聞いてみる。

「え～っと～少ししかないよ。」

お前はなにしに来たんだ。

「それは没収な。あといくらかお金は持ってきてるか？」

「え～っ！あとで食べようとしてたのに～！…お金は少しは持ってきたよ。」

「じゃあそのお金は家に置いてこようか。お金あると買っちゃうだ

ろ？」

「…うん…わかった～…。」

「まぁ止めたくなったらすぐに言えよ。俺は梨穂子が太ってるって気にする必要ないと思うし。」

本心で思ってることを口にした。

「ううん。頑張って見るよ！目指せ！５キロ減！」

それでも梨穂子はやるようだ。

それほどまでに純一の事が好きなんだろうな。

食事も終わり、洗い物くらいするよ～、と言ってくれた梨穂子に甘えて宿題を進めている。

いつも俺が着けているエプロンを身に付けて梨穂子を横から見ているとなんだか不思議な気分になった。

（なんか彼女が家に来てくれたみたいだな…）

顔が赤くなるのを感じつつもバレないよう宿題に専念しようとする。

すると洗い物を終えた梨穂子が俺の近くまでやってきて「他にすることある？」と聞いてきた。

「それじゃ後は風呂入って寝るくらいしかやることないから好きにしなよ。テレビは無いけど昔からある漫画やら小説ならそこの棚にあるから。」

「う～ん…今日はとりあえずリョーの一人暮らし事情について聞いてみたいな。」

「俺の？別に普通だと思うけど。」

「まず一人暮らししている人があんまりいないからね～。何か面白かったこととか大変だったこととか…」

梨穂子は指折りに数えて聞きたいことを挙げていく。

「う～ん…まぁいいけどとりあえず風呂入ってそれからにすっか。俺ももうすぐ宿題終わるから梨穂子が上がる頃にはきっと終わってるし。それにこういう話は布団中に入って話す方が雰囲気出るだろ？」

「そうだね～。修学旅行とかでやった時凄く盛り上がったよ。」

「じゃあ風呂先に入っててくれ。たぶんもうすぐ一杯になるはずだから。」

「うん！ありがとう！じゃあおっ先に～！」

そうして梨穂子は着替えを取り出し、風呂場へと向かっていった。

「マジでためらい無いのね…とにかく布団出しとかないとな。」

宿題を少し残したまま先に布団の準備をしておく。
たまに様子を見にくる両親用に布団は計3セットあるから一つの布団で…なんて展開にはならない。
布団を並べるとき出来るだけ離しつつも違和感の無いような距離感を保つのに必死になった。
「てか一人暮らしで面白かったことか…なんかあるっけな？」
布団の準備を終え、残り少ない宿題を片付けつつ、俺はこの後に控える布団トークについて考える。
せっかくだし面白く話してやりたいしな。

こうしてダイエット生活一日目は終わりを迎えた。

１４話（後書き）

アニメでもですけど、梨穂子のキャラがダイエット失敗キャラになってる気がする…

それでも梨穂子はかわいいなぁ！！！

１５話（前書き）

ＰＶ２００００いってました！

感謝です！

15話

じりりりり！かちっ！

いつものように朝が始まる。

目覚めは結構いい方である俺は目覚ましが鳴るとすぐにスイッチを切り、むくりと起き上がった。

とりあえず顔を洗って頭をスッキリさせようと洗面台へと向かおうとすると、何か部屋の真ん中に落ちている事にやっと気が付いた。

「ん？」

寝ぼけたままの状態で落ちている物を注視してみる。

横長に二メートルくらい白い生地が伸びていて、片方から何か茶色い毛玉が飛び出ている。

「あぁ梨穂子か…そういや泊まってったんだっけ。」

ぼーっとしつつも昨日の出来事をぼんやりと思い出していく。

風呂上がりパジャマ姿の梨穂子にドキドキしつつも布団トークして、結局一時過ぎまで起きていた。

「目覚まし鳴ったのに全く起きねーんだな…まぁ適当な時間に起こせばいいか。」

未だにスゥスゥ寝ている梨穂子を一瞥して洗面台へと向かう。

「顔洗って…着替えて…飯作って…あと今日の準備して…そんなもんか。」

今朝行う事を指折りに数え、一つ深呼吸をして確認した通りに順に行っていく。

所詮普段と違うことなんていつ梨穂子を起こすか、と飯を二人前作らなきゃいけないことだけだ。

「今は七時前か…そんじゃあパパっと作りますか。」

ちなみに橘家の朝食は昨日の内に断りの電話をいれといた。

梨穂子を連れていけるはずないだろうし（梨穂子が純一に知られるのを恥ずかしがって）、俺一人で食べに行くわけにもいかない。

今月の給料日まであと三日…昨日は大丈夫と言ったが正直厳しいものがあるな…。

なんせ食費が急遽二倍になってしまったのだから。

「今あるもんっていったら…卵二個とモヤシ…あとあまりもんがちょこちょこか…じゃあ今日は野菜炒めと…」

あるものを使ってテキトーに朝と昼の分の食事を用意してみる。

部屋中に醤油の良い香りが充満する。

そのタイミングで梨穂子の寝顔がとても可愛らしい笑顔になったの

は偶然ではないだろう。

「おしっ。とりあえず出来たけど…やっぱ足んないよな…」

目の前にはサンドイッチや目玉焼きなど俺一人なら三食分は確保されている量が用意されているが、昼飯含めた四食分には少し足りないだろう。

どうしたものか…と考えていると登校まで四十分といったところになっている。

とりあえずテキトーにサンドイッチを弁当箱に詰め込んで、梨穂子を起こしますか。

「お～い！梨穂子～！朝だぞ～！」

「う…う～ん。あれ？リョーおはよ～…なんでリョーがウチにいるの？」

「ここは俺んちだよ。ほら飯出来たぞ。早く顔洗ってきな。」

「あ～…うん。」

むくりと起き上がるも、目は殆ど開いてない状態でそのまま動かない。

「洗面所ならあっちだ。ほら立って。」

梨穂子の肩を掴み、体を洗面所の方に向けさせてから立たせようとした。

パジャマ姿の梨穂子に触れるのは些か躊躇いが生じたが、既に昨日の夜にパジャマ姿への免疫は出来た（はずだ）！

梨穂子の髪から仄かに香るシャンプーだとか、柔らかい肩の感触なんかにも俺は全く動揺してないぜ！

「あ～ありがとう～…」

そういって梨穂子は立ち上がって洗面所へと向かっていった。

危なかったな…

「ごちそーさま～！」

梨穂子は元気良く告げてきた。

食べている最中の梨穂子を見る限り、量の不満はありそうだが味には問題ないようだった。

朝飯を食べ終わると梨穂子は梨穂子に持参させたピンクの弁当箱、俺は銀の弁当箱を鞄に詰めすぐさま学校へと向かう。

梨穂子を起こすの（を始めるの）に少し時間を取られた所為であまり余裕がない…といっても少し走れば全然間に合う時間帯でもある。

テキトーに会話しながら登校した俺と梨穂子はそれぞれのクラスへと向かい、クラスメートと談笑。

そしてそれぞれ授業を受け、昼飯を食べて、そして下校する。

帰り道も梨穂子は家の鍵を持ってないため一緒に帰る。

なんかこれ恋人同士みたいだな…

「お～い梨穂子。弁当箱出してくれ。洗っちまうから。」

家に帰ると俺は鞄を置いてすぐに台所へと向かい、床にぺたんと座っている梨穂子に弁当箱を出すよう促した。

「それくらい自分でやるよ～。リョーこの後バイトでしょ？」

朝から俺一人が家事を行っていることから、梨穂子は自分も何か手

伝うと下校中から言ってきている。

でもこれは譲れない。

「梨穂子にはこの後重要な仕事があるから体力残してといて欲しいんだよ。」

「えっ？重要な仕事？」

「そう。これだけの予算で材料買ってきてもらう。」

そういって財布から予算を抜き出し梨穂子へ渡す。

「３００円…これで二人分かぁ～…」

「そうだ。今日の晩飯、それから明日の朝飯と昼飯になるよう買ってくんだぞ。」

「えっ！これで三食？」

梨穂子の表情が固まる。

「二人分だから六食だな。」

「はぁ～…これは責任重大だよ～…」

「好きなもん買ってきて良いからな。わかったら弁当箱出してくんない？」

はぁ～い、と気怠げに返事し、弁当箱をぽんっと渡してくる。

渡されるとすぐに自分の弁当箱と一緒に速やかに洗う。
…自分のは水洗いでいいか。
「じゃあ俺はバイト行ってくるから。これが鍵だ。買い物行くとき使ってくれ。」
「うん…いってらっしゃ〜い…。あっ！ちょっと待って、リョー！。」
「ん？どうした？」
「お昼美味しかったよ！ありがと！」

こうして俺はバイト、梨穂子はスーパーへと向かっていった。
梨穂子がどんな買い物してくるかわからないし、下手したらケーキ一個買って終わりかもわからない。
俺も頑張って食材を調達しときますか。
「ただいま〜。」

バイトが終わって家に着いた頃には既に八時を回っていた。

「おかえり～！」

いつもなら返事のない言葉に返答があった。

「疲れた～。買い物はどうだった？梨穂子？疲れただろ。」

「ふっふっふ。それがですね。」

「ん？どうした？頭おかしく…は元からか。」

「ひっど～い！そんな事ないですよ～だ。いいから見てみてよ！」

冷蔵庫の方に指差しながら言ってきた。

なにやら見せたいものがあるらしいな。

「おっ…こんなに買えたのか！よくタイムセールに間に合ったな！」

冷蔵庫の中には様々な野菜がゴロゴロ転がっていた。

これだけの食材を３００円で買うのは俺でもたまにしかできない。

「実は違うのですよ。タイムセールには全然間に合わなくてどうしよう…って思ってた時なんだけど、八百屋さんなら安く買えるかな～と思って行ってみたの。」

「八百屋の方が高い気がするけど…」

「そうだったんだけど、安いお野菜を探していたら八百屋のおじさんが何が欲しいか聞いてきてね。それで事情を説明したら形が悪かったりしてお店に並べられないお野菜なら３００円で袋に入るだけ持ってってもいい、って言ってくれたの。」

「あ～あそこの親父っさん美人に優しいって有名だからな～。よし！これなら余裕で三日過ごせそうだな！」

よくやった、と梨穂子に向けてガッツポーズするが梨穂子はなんかぼーっとしている。

「どうした？なんか顔赤いけど…風邪でも引いたか？」

「なっ…なんでもないよ！ちょっと暑くって…」

「今そんな暑いか？たしかにもうすぐ夏だから寒くはないが…」

「いや～今年は夏が早く来てますね～。」

「ん？まぁいいや。それじゃあ今日は冷たいもん食うか！俺も戦利品あるし。」

そういって帰ってきてからずっと手に持っていた袋を掲げる。

「そういえばずっと持ってたけど何が入ってるの？」

手で顔をパタパタと扇ぎながら梨穂子はもう片方の手で指差してきた。

「実は松ジイから…バイト先の先輩から貰ってきたんだ。中身は冷凍のうどん三玉とめんつゆ。」

「やった〜！これでご飯無くても大丈夫だね！」

「しかも明日のバイトで他の先輩から何か貰えそうなんだよ。とりあえず今日はこれ使ってサラダうどんにでもしますか。」

「ホント？じゃあ今日は一杯食べれるね！」

これからの食事に梨穂子は既に心が移っている。

「一応ダイエット生活目的で来てんじゃなかったっけ？」

「あっ…そうだった。」

「たく…しゃーないな。じゃあダイエットは明日からってことで、今日はたっぷり食べますか！」

「アーイガチャ！」

お馴染みのウインク敬礼？をしつつお馴染みの返事をする。

そうしてなんとか食糧難を乗り越えた俺達は給料日を迎え、なんとか生き残ることが出来た。

梨穂子のダイエットの方も一週間経った所である程度落ちたらしく、ひとまずそこで終わった。
（どの位落ちたか聞いてみたらめっちゃ注意された。冗談のつもりだったんだが…）

これで隣から聞こえる梨穂子の寝言とか寝顔とかにいちいち反応しなくてよくなった。

まぁ名残惜しいものもあるが、これ以上続いていたら俺も限界だった…

いや、よく自分を保ったよ俺！めっちゃ誉めてやりたい！

その二週間後、梨穂子がリバウンドしたからまた泊めて～と言ってきたときは勿論丁重にお断りした。

１５話（後書き）

構成しっかり考えないで書いちゃいけないな～。

そんなことを今更ながら感じた夏の暑い日でした。

１６話（前書き）

実家に帰ってのんびりしてたら、投稿するの忘れてました…

１６話

私は四時間目の授業を終えるとお弁当を二つ持ってクラスから出て行く。

階段を一つ昇り辿り着いた所は普段は来ないフロア。

なんだか同じ学校なのに少し居心地が悪い。

そこには上級生と思われる人達がぞろぞろと教室から出てきて、それぞれ思い思いの場所へと向かっている。

私はそれによって出来た人の流れに乗って目的の教室を目指す。

目的の教室とは二年Ｂ組で目的の人物は小学校時代からの大切な先輩。

ただでさえ『会いに行く』という行為に少し胸の高鳴りを感じるのに、今日は私が勝手に押し掛ける形になる。

そのためか一歩一歩近付く度に緊張感が増していく。

目的の教室にたどり着き、教室の中を覗いてみる。

目的の人物はすぐに見つかった。

どうやら授業中寝ていたらしく、周りがすでに食事を取っている中、大あくびをしながら教材を机の中に片づけている。

机の周りには橘先輩が立っていて、早く早く！と急かしている。
きっと食堂かどこかに行くのだろう。
呼び掛けなくて済んだことに安堵しつつ、私は教室の前で先輩を待ち伏せることにした。

「怜！早くしないと食堂混んじゃうよ！」

「そんな焦んなって。別に食堂は無くなりやしないから。」

「席は無くなるからね！」

四時間目の物理の授業中ずっと寝ていたため体が上手く動かない。
昨夜俺の唯一の趣味と言っても過言ではない音楽を夜中ずっと聞いていた完徹してしまった。
久しぶりに日の出を見ちまったぜ…
それもあって今日の授業は全て睡眠時間へと変わり、登校してから今まで一度も席を立たずに過ごしてしまった。

「別に俺は今日弁当あるから食堂で座れなくても問題ないしな。」
鞄から弁当箱を取り出して純一に見せつけながら言う。
「僕は無いんだよ！頼むから早くしてくれない？もう僕お腹ペコペコなんだよ！」
腹を抱え込みつつ純一は懇願してくる。
昨日から純一の叔母さんが叔父さんの出張に付いていってしまったため朝飯を自分達で用意しなくてはいけなくなった。
そんな状況に対して朝の一食より少しの睡眠を取る純一と料理の苦手な美也ちゃんしか戦力がいない。
結果として今日は朝食を食べずに学校に来たらしく、一刻も早く食堂でたらふく食べたいらしい。
「分かった分かった。じゃ行きますか。」
ようやく教材を片付け終えた俺はゆっくり立ち上がり教室の後方のドアへと向かった。
「あ～結構ギリギリの時間だよ！なんで授業中寝てたんだよ！」
「それ純一には言われたくないな…今日バイト無いからって久しぶりに音楽聞いてたらオールしちまってな。」
「本当に怜は変わらないね…一度音楽聞き始めると本当何もしない

もんね。」

「ゲームでオールするより全然マシだと思うけどな。純一だってよくやってんじゃねーか。」

「なっ！ゲームを侮辱する発言はいかに紳士な僕でも許せないよ！音楽なんかより絶対面白いからね！」

「それは聞き捨てならないな…純一には音楽の良さを体で分からすしかないようだな。」

「えっ！なんで握りこぶし作ってるの？音楽と暴力関係ないからね！」

「芸術は爆発だ！」

「さらに意味が分からないよ！」

「先輩。廊下では静かにしてください。」

「「へっ？」」

「あと私から言わせてもらいますと次の日の事を考えず夜中に起きているのを改めた方がいいと思いますよ。」

横から急に声を掛けられて驚いてそちらを向く俺達に次いで忠告する。

しかし効果は無いようだ。

「七咲！七咲もゲームの方が良いよな！」

「てめっ！仲間を作るなんて卑怯な真似を！」

「ハッハッハッ！これでゲームの良さが分かったかな？」

「へっ！そんなガキみたいな趣味、七咲が好きな訳ないだろ！」

「なっ！ガキっぽいとはなんだよ！」

「ゲームばっかりやってっからもてねーんじゃねーの？」

「怜だって全くそんな話ないじゃないか！音楽なんておかず、でメインにはなれないんだよ！

「なんだと！」」

「なにさ！」

「先輩。私の話を聞いていましたか？」

言い争いを止めてハッと七咲の方を向くと、七咲は満面の笑みを見せていた。

そんな七咲を見て俺達はすぐに静かになった。

七咲の笑顔に癒されたから止めた、なんて理由ではなく七咲の形相にビビったからだ。

「先輩方は高校生にもなって学校でのルールを一から教わらないと

分からないんですか？」

「いや～そんな事は無いんだけど～…」

「なら先輩方は分かっていてルールを破ったんですね。」

「純一！下手に逆らっても墓穴を掘るだけだ！こういう時はとっとと謝って済ましちまった方が早い！」

「巽先輩は放課後キッチリお説教しますんでいくら謝っても今は許しませんよ。」

「んなっ！」

「怜…そういうことは大声で言っちゃだめだよ…」

「橘先輩はお昼休みの間ですから覚悟してくださいね。」

「えっ！僕は今から食堂行かないと…」

「純一！諦めやがれ！俺なんて放課後時間無制限なんだぞ！」

「そんな…」

俺達は並んで肩を落とす。

「まぁ反省しているようなので冗談はこのくらいにしときます。」

反省の色を見せていた俺達を見て、七咲は許してくれたようだ。

「それより今からお昼ですゆね？よかったらご一緒させてもらってもいいですか？」

そこで俺は七咲が弁当箱を持っていることに気が付いた。

「あぁ。七咲もこれからだったんだね。じゃあ一緒に食堂行こうか。」

「純一…大変残念な事に気が付いちまった…」

「えっ？何？」

「時間見てみろ…」

純一は言われた通り時間を見てみる。

「あー…もう間に合わない…」

すでにいつも食堂が多くの生徒で一杯になる時間になってしまっていた。

「まぁ今日は購買で我慢するんだな。あぁ俺は弁当有って良かったぜ！」

「そんな～…」

がっくり肩を落とす純一。

そこに救いの手が差し伸べられた。

「あの、実は今日お弁当作りすぎてしまったので良かったら処分してくれませんか？」

そういってそっと純一にお弁当を差し出す。

「えっ…いいの？ありがとう七咲！」

「しょうがないな～じゃあ純一には俺の弁当をやるよ！だから七咲の弁当を俺にくれ！」

「いいよ！怜の野菜炒めしか入ってない弁当なんかより七咲のお弁当の方がよっぽど美味しいから！」

「俺をなめんなよ！今日は肉野菜炒めだし、ご飯はチキンライスだ！」

「結局二つしか入ってないんじゃないか…確かに昼ご飯がなかった先週に比べれば良いかもしれないけど…」

「先輩…お昼食べないのは健康に良くないですよ。」

心配そうな目で七咲は俺を見てくる。

「金が無い時はしょうがないんだ…それより早く食べないと時間が無くなるな。」

「本当だよ。今日は晴れてるしせっかくだから屋上で食べない？」

「たまにはいいな。じゃあ行こうぜ。七咲。」

そうして俺達は屋上へと向かった。

輝日東高校の屋上は休み時間に限り開放されている。
そのため授業と授業の間に外の空気を吸いに来たり、気分転換に来る生徒もいる。
今の時期は少し気温が上がってきたため人の数は少ないが、新入生が入学した当初は物珍しさに屋上に来る新入生が後を絶えなかった。
そんな屋上の影が出来ている場所を俺達は陣取って食事を始めた。
「そういえば七咲。なんで俺達のクラスの前にいたんだ？」
自分で作ったチキンライスに舌鼓みを打ちつつ聞いてみる。
「実は先輩に頼みたいことがありまして…」
「僕に？怜に？」
「巽先輩にです。」
「俺に？」

「はい。今度出来ればもう一度水泳対決をしていただきたいのですが…」

「水泳対決ね～。」

確かに七咲との水泳対決は結構燃えるものがあったし、楽しかった。けど…

「俺これからちょっと忙しくなるからやれる暇がないかもしんないんだよね。」

「そうですか…無理を言ってすみません。」

「怜！七咲が可哀想だろ！今日とかにでもやってあげればいいじゃないか！」

「今日は帰ってからもう一回アルバム聞き直さないといけないから無理なんだよ！」

「怜は暇らしいけど七咲は？」

「私は今日部活があるので…」

「お～い！俺を無視するな～！」

「じゃあ学校のプールで泳げばいいんじゃない？」

「それは流石に厳しいと思います。部活中に部外者を入れるのは禁

止されてますし。」

「その前に水着がないわ！」

無視されないように少し食い気味で突っ込む。

「じゃあ怜！いつなら空いているんだよ！」

「そうだな…夏休み入る前でバイト無い日がいいから…来週の火曜日と金曜日かな。」

「残念ですがどちらも部活がありますね…」

凄く残念そうな顔を七咲はしている。

「なぁ七咲。どうして急に対決したいなんて言い出したんだ？」

そういえば聞いていなかった事情を今更ながら聞いてみる。

「そういえば聞いてなかったね。良かったら教えてくれないか？」

純一もそれに乗っかるように同じ問いをする。

「…実は夏の大会の選考に落ちてしまいまして…一年生の最初から選ばれるとは思っていなかったのですが、それでも少し気を落としてしまったんです。それで巽先輩に水泳対決で勝てれば…スッキリするかと思いまして…」

小さな身体をさらに小さくして七咲はポツポツと話してくれた。

「そうか…七咲選考落ちちゃったんだ…」

「こればっかりは実力主義だからしょうがないだろう。」

「はい…私の実力不足でした…」

「怜！七咲だって頑張ったんだからそんな冷たく当たらなくてもいいだろ！」

「でもな～それが勝負の世界だしな。三年間公式戦出られない人が出る競技だってあるのにそんなこといってらんないだろ？頑張ってるからって試合に出してあげる、なんて納得しない奴が出てくるだろうしな。」

「それは…そうだろうけど…」

「橘先輩…私なら大丈夫ですから…」

二人して俺の発言に明らかに元気が無くなっている。

第三者からこの状況を見たら絶対俺が苛めたみたいに見られるだろう。

俺はそんな空気に耐えられないし、理由はどうあれせっかく頼ってきた後輩を放って置くのも気が引ける。

「…あ～！じゃあ来週の火曜日にパーティーするぞ！」

「えっ？」

「七咲お疲れ様兼今更ながら入学祝いパーティーってことで。七咲が部活終わった後やるぞ。」

「ちょ…ちょっと先輩？」

突然の発言に七咲は戸惑いを隠せないようだ。

「それいいね！どこでやろうか？」

「少し狭くてもいいなら俺んちでもいいし、もしくは純一んちかな。そういや七咲と美也ちゃんって仲良いしちょうど良いかもな。」

「ちょっと待ってください。別にそこまでしていただかなくても…」

ヒートアップした俺達を七咲は止めに入る。

「まぁいいじゃんか！普段親にも言えないような愚痴みんなで言いまくってスッキリしようぜ！」

「そうだよ！溜め込んだストレスはすぐに吐き出さないと！」

「いや…別にストレスが溜まっているわけではないのですが…」

「あ～分かったから！じゃあ美也ちゃんと七咲の入学祝いだけならいいんだな！じゃあそういうことで！」

話が纏まらないのでイライラしてきた俺は言いたいことだけ言ってすぐ話を打ち切った。

「じゃあ時間や場所が決まったらまた教えるから！火曜空けとけよ

！じゃあな！」

そして俺と純一は立ち上がり一足先にクラスへと戻っていく。

七咲はいまだ呆然と座り込んでいるがそんなことは気にしない。

今日純一んち寄って帰って話纏めないとな…

17話（前書き）

暑い…夏ってどうしてこんな暑いんですかね…

これ以上近付くな大陽！少しばっかり減れオゾン層！

こんなに暑いんで更新遅くなっても仕方ない…ですよね？

よし、正当化できた！

次は出来るだけ早くあげるようにします…

17話

俺は七咲をパーティー会場である俺んちまで招待するために私服で校門の前で待っていた。

俺の家なら親の目を気にせず好き勝手出来るため決まったが、七咲は俺の家に来たことが無いため俺が部活終わりの七咲を迎えに行き、その間に梨穂子と純一に準備をしてもらうことにした。

俺も一度家に帰り、着替えて軽く部屋を片付けて料理を準備してから一度梨穂子に鍵を渡しに行って、再び学校へ戻る。

２０分ほど校門の前で待っていると先輩と真剣に話している七咲が歩いてきた。

邪魔しちゃ悪いと思いつつも七咲に声をかける。

「七咲。部活お疲れ様。」

「巽先輩。お待たせしました。」

「えーっと水泳部の先輩？はじめまして。２ーBの巽怜っていいます。」

七咲に隣の先輩？について聞きつつ挨拶する。

「私は３ーBの塚原ひびき。あなたが噂の巽君ね。よろしく。」

「はい？俺なんかしましたっけ？」

「七咲がしょっちゅうあなたのこと話しているわよ。何でも泳ぎ方が凄くキレイだとか…」

「つ、塚原先輩！そんなに言ってないですよ！」

「あらっ？言ってることは認めるんだ。」

「それは…」

「へぇ～七咲は塚原先輩の前だと手も足も出ないみたいだな。これからは先輩が近くにいる時会おうかな。」

「せ、先輩！」

「クスクス。そういえば巽君とはじめまして、じゃないよ。」

急にターゲットが変わる。

「へっ？」

「私体育祭の借り物競争の審判してたからその時に会ってるわよ。」

「なっ！！」

「たしか答えの口止めを頼まれたのよね。」

「すいません！勘弁してください！」

「クスクス。巽先輩も塚原先輩に手も足も出ないみたいですね。そ

れより巽先輩はどんなお題だったんですか？」

「言ってもいいけど七咲のも彼に言わないと不公平だよね。」

「「言わないでください！！」」

「クスクス。本当仲が良いみたいだね。」

「このままいたらずっと弄られそうだな…よし七咲走れ！」

そういって七咲の手を掴んで走り出す。

「せ、先輩！急に走り出さないでください！あっ！塚原先輩お先に失礼します！」

「あっ…クスクス。いじめ過ぎちゃったかな？でもたしか七咲の好きな人って巽君だったよね。巽君（好きな人）の下のジャージ持ってきてたし…あの様子だともう付き合ってるのかな？今度それとなく聞いてみよう。」

塚原先輩が見えなくなるまで手を繋いだまま走り、見えなくなった所で走るのを止める。

そこで手を離して、そのまま家にいるだろう美也ちゃんを迎えにいく。

そして三人並んで近くの俺んちへと向かう。

家に入るとすでに準備は終わっていたようで、梨穂子と純一がくつろいでいた。

俺達三人も同じように好きな場所に座る。

結果的に俺、美也ちゃん、梨穂子、純一、七咲の順でテーブルを囲むように座った。

「じゃあ料理持ってくるからちょっと待っててくれ。純一、手伝ってくれ。」

ＯＫ！と言って男二人台所へ向かう。

迎えに行く前に用意しておいたおにぎりやジュースなどをテーブルへと二人して持ってくる。

テーブルはすでに純一が家から持ってきた料理が並んでいる。

一人暮らしのテーブルでは全部乗せるには小さいためおにぎりやジュースはお盆に乗せたまま床に置いておいた。

「それじゃストレス発散を目的としたパーティーを始めますか！」

そういって俺、梨穂子、純一が隠し持っていたクラッカーを盛大に鳴らした。

パンッ！と鳴った際、七咲と美也ちゃんはビクッと驚かせていたが、そんなこと気にせず俺達はジュースを全員のコップに入れていく。

「それじゃかんぱ～い！」

「「「かんぱ～い！」」」

コップを合図と共に前に出しぶつけ合う。

ただ一人、七咲だけがコップも持たずポカンとしている。

「七咲！ノリ悪いぞ！ほら乾杯！」

「あっ…はい。乾杯。」

七咲は俺が持っているコップとコップをコツンとぶつけてそのまま一口飲む。

「先輩。いきなり言われても困りますよ。」

「美也ちゃんだって同じ条件なのに出来ているんだから反論は認めないぞ。それより早く食べないと梨穂子が全部食べちゃうぞ。」

「こんなに食べれないよ～！」

そういいつつも梨穂子の皿にはすでに沢山のおかずが乗っていた。

「梨穂子は本当食いしん坊だな～！」

「梨穂ちゃんの食いしん坊〜！」

「クスッ、そうかもしれませんね。では私も頂きます。」

「おう！遠慮せず食べてくれ！」

テーブル一杯に広がった料理を七咲に勧めた。

「て言っても怜が用意したのおにぎりとサラダだけだよね。」

「えっ？じゃあこのおかずは…」

「美也のお母さんが作ってくれたの！タッツーのじゃないから安心して食べて良いよ！」

「美也ちゃん…俺は別に変なもん入れたりしないからね…」

「フフっ…じゃあ安心ですね。」

「…もういいや…たまには俺が作った奴も食べてくれ…」

いつのまにそんなキャラで固定されてたんだ？

「え〜っとね。私が不満なのは〜」

ある程度時間が経った所で、今回のパーティーの目的である愚痴ト

ークが始まった。

ただくじ引きで順番を決め、順に愚痴っていくだけの話だ。

「う～ん…」

一番手の梨穂子は愚痴が思いつかないようで、さっきからずっと唸っている。

「え～っとね…あっ！カロリーが高いものほど美味しいことかな～」

「…すげ～梨穂子らしいな…」

「うん…さすが梨穂子だよ…」

野郎二人はむしろ感心してしまった。

「他に無いんだもん！じゃあリョーはどうなの？」

「俺か？俺は八百屋のオヤジに文句がある。」

「あの商店街の八百屋さんですか？」

「そうだ。あそこのオヤジ、美人にはめっちゃ優しいのに野郎相手だと全くサービスしてくんないんだよ！何度まけてくれ！と頼んだか…」

「…怜のも怜らしいとしか言えないよ…」

「うるせー！お前には給料日前の極貧生活が分からないからそう言

えるんだ！」

「…次七咲は何かある？」

「逢ちゃんの楽しみ～！」

「スルーかよ！」

橘兄妹のスルースキルはかなり高かった…

「えっと、私は…巽先輩が付き合ってくれないこと…ですかね。」

はい？

「「「えー！！！」」」

急に投下された爆弾に七咲以外全員が驚きを隠せない。

「えっ、いつタッツーに振られたの？タッツーなんかのどこがいいの？タッツーはなんで逢ちゃんの事振ったの？高菜の花、ってやつ？」

爆弾発言に対し美也ちゃんが質問責めし始める。…っておい！

「ちょっと待った！俺七咲に告られた覚えが無いわ！てか本当美也ちゃんの中の俺ってどんだけ低価値なの？あと高嶺の花、だ！」

もう突っ込み所が多すぎてわけがわかんねー…

「いえ、私は先輩が『水泳対決に』付き合ってくれないのが不満な

だけですよ。」

したり顔を見せながら七咲は俺に言ってくる。

やられた…

「なんだ…そういうことなんだ。てっきり怜に先越されたのかと思ったよ…」

「ホントびっくりしたよ〜。」

「みゃーも〜…」

全員の力がドッと抜ける、

「フフっ、すみません。少しいじわるしたくなってしまいまして。」

全く悪びれてない七咲さんを除いて…

「…ふーん。そうなんだ〜。」

なんか美也ちゃんが納得しているが気にする事が出来ない。

「…次、純一は？」

とっとと話を切り上げようと次の純一に振る。

「僕？僕はね、自分がこんなにも魅力的なのに全然モテないことだよ！」

「純一。とりあえず一発なぐっていいか？ありがとう、じゃあいくぞ。」

「まだ何にも言ってないからね！というか何で殴られなきゃいけないの？」

「あはは～…」

「梨穂ちゃん…こんなのだけど頑張って…」

「こんなの、ってなんだよ！」

「うっせー！お前みたいな奴が俺みたいなモテない野郎の代弁すんじゃねぇ！」

とりあえず一発殴っといた。

そのあと美也ちゃんに何故か蹴られた。

俺のことそんなに嫌いか…

「じゃあ最後はみゃーだね！」

ちょっとした乱闘があり熱くなった場を鎮めるのに時間がかかったがようやく最後の一人まで辿り着いた。

俺や純一はすでに疲れていて、梨穂子と七咲は何故か沈んでいる。

「美也ちゃんってなんとなく悩み無さそうだけどな～」

「タッツーみたいに単純じゃないからね〜！え〜っとね、みゃーの不満な事はにぃにが何も買ってくれないこと！」

「えっ？」

「美也がテレビ見てて、あれ食べたいな〜、って言っても買ってきてくれないし、みゃーに返したくないからってバレンタインのチョコも貰ってくれないし！」

「…純一…頑張って応えてやれよ…」

「怜！自分が関係ないからって無責任なこと言わないでよ！」

突き放した俺にすがりついてくる純一。

梨穂子と七咲も苦笑いを浮かべるだけだ。

「…しゃーない。じゃあ俺から入学祝いってことでこれをプレゼントするから勘弁な。」

そういって机の中に入っていた小さな袋に入った物を美也ちゃんと七咲に手渡す。

「あの、私にも…ですか？」

突然のプレゼントをしっかり持ちつつ、目をパチパチさせながら聞いてきた。

「入学祝い、って言ったろ？それに元々今日渡すために買っといた奴だから遠慮しなくていいぞ。」

「先輩…はい。ありがとうございます。」

「何買っていたの？」

梨穂子や純一にも言わないで用意したので二人とも中身が気になっているようだ。

「あ～！白猫のキーホルダーだ！カワイイ～！」

「私のは黒猫…ちょこんと座っていてかわいいですね。」

「へぇ～怜にしては良いチョイスなんじゃない？」

「うん。とってもかわいいね～！」

なかなかの好評具合に俺は何故か照れてしまう。

「なんとなく七咲も美也ちゃんも猫っぽいな～って思ったから色違いのにしたんだよ。どっちがどっちかは決めてなかったからテキトーに渡したんだけどな。」

「分かる～！なんだか二人とも猫っぽいよね～！」

「にっしっし。逢ちゃんとお揃い～！」

「そうだね、美也ちゃん。せっかくだからどこかに付けようか。」

そういって七咲は筆箱に、美也ちゃんは何も持ってなかったのでとりあえずベルトを通す穴に付けていた。

「気に入ってもらえてなによりです。それじゃそろそろ解散しますか。もう１０時前だしな。」

時計を差しつつ、今夜のパーティーを終了の合図を出す。

「もうこんな時間に…そうですね。今日は終わりましょうか。」

「そうだね。じゃあ七咲。夜道だし送っていくよ。」

「えっ？でもご迷惑ですし…」

「いいって！僕は紳士だからね！」

「じゃあ紳士（笑）の純一は梨穂子を送ってくれ。その方が家近くて楽だろ？七咲は俺が送っとくから。」

「う～ん…じゃあそうしようか。じゃあ梨穂子、美也、帰ろうか。」

「そだね～。じゃあねリョー！逢ちゃん！」

手をめいいっぱい振りつつ、梨穂子と美也ちゃん、ついでに純一が帰っていった。

「じゃあ七咲。俺達も行くか。」

「あの先輩…お片付けしなくてよろしいのでしょうか？」

「ん～あとで音楽聞きながらでもやるから大丈夫だよ。それより早く帰んないとご両親が心配するだろ？」

「それはそうですけど…」

七咲は片付けを俺一人にさせるのを良しとしないようだ。

「ほら！いいから行くぞ！」

いちいち説得するのも面倒なので、七咲の鞄を持って先に外へ出ることにした。

「あっ！先輩待ってください！」

それを見て七咲も慌てて追いかけてくる。

こうして賑やかな夜は終わった。

みんなきっと帰って安らかに眠っているだろう。

そんな中俺は一人片付け（というより音楽）に熱中し、三時頃まで起きていてしまった。

明日のバイトやばいかもな…

案の定ミスりましたよ…

18話

テスト終了のチャイムが鳴り、クラス全体が一気に騒がしくなる。
期末テスト最終日の最後のテスト、つまりこれが終われば学生が待ち望んでいたものがあるわけで…
「ひゃっほ～！夏休みだ～！」
こうやってテスト終了と同時に叫び出す輩が毎年一人は出てくる。
もちろんそいつはその後担当教師からお叱りの言葉を受けるのだが
……梅原ドンマイ！

今学期最後のＬＨＲはやはり落ち着かないものだった。
みんな明日から始まる夏休みに思いを馳せているためだろう。
そんな中、俺は一人ぼーっと外を見ている。
別に何か興味を引かれるものがあるわけでもないが外を…空を見続けている。
「あぁ…雲になりたいなぁ…」

ふらふら漂ってテキトーに雨降らしときゃいいだけ…なんて良い生活なんだ！

「こらっ怜！なにボーっとしてんのよ！」

何もせずただボーっとしているだけの俺を見て何を思ったか知らないが薫と田中さんがいつの間にか俺の席の近くにいた。

「あぁ薫か…いや雲になりたいなぁ…って思ってただけだよ。」

「あんたそれギャグ？」

「頭が雲になってる薫には言われ、ガッ！」

ギャグで言ったつもりなのに右側頭部を思いっきり殴られた。

「薫…クリーンヒットしちゃったみたいだけど…」

「知らないわよ！恵子行くよ！」

「え～っとお大事にね。待ってよ～、薫～。」

痛みから意識を取り戻した時には薫達は雲の様にいつの間にか去っていた。

「…俺がなんで殴られなきゃいけないんだよ…」

こうして夏休みは始まった。

理不尽な暴力が最初のイベントとは…

夏休みが始まってすでに二週間が経過した。

俺にとって夏休みなんてバイトをするための長期休暇みたいなもので、いつもの長期休暇通りバイト三昧の日々を過ごしていた。

なんやかんやで今日でバイト１０連チャン。

プールは夏休みが営業本番のため連日人が大量にくる。

そのためどこのプールでも人手が足りなくなるほど忙しい。

その点、俺が働くプールは２５ｍがあるだけのなんの変哲もない場所なので比較的混まないところだ。

そのため去年は楽できるんだろうな～…なんて甘っちょろいこと考えてたわけで…

「怜。今日は一丁目の方のプールへ行ってくれ。」

なんて言われたときは意味が分からなかった。

なんでもここのプールの館長と近くのプールの館長は交友があり、繁忙期になったりなんかアクシデントがあると助け合っているそうだ。

その一環としてこの時期になると毎日何人か他の勤務先に飛ばされることになる。

わざわざ辛い所に飛ばされる…そんな状況に耐えられなくなったバイトがどんどんいなくなり、連絡が着かなくなるのも日常茶飯事らしく、その穴埋めにまた他のバイトが借り出される。

そして休みがなくなったバイトが嫌になって辞める…といった悪循環に陥る。

その点、俺はバイト探ししているとき拾ってもらった恩と金を稼がなきゃいけない事情があるため、都合の良い手駒として連日入りっぱなしの状況に不満が無い訳ではないが精一杯続けている。

そりゃ雲にもなりたくなるわ。

そんなこんなで今日でバイト15連チャン。

すでに夏休み前に入ったバイトが四人辞めている。

この頃バイト先の館長が心配して他のプールに飛ばされず、比較的楽な職場で働かせてくれるが、そんな日に限ってプールのスクール生が来て暴れたり、変なおばちゃんが混んでるだのクレーム付けてくる。

あぁしんどい…

今日でバイト１８連チャン。

ようやく明日バイトが休みになった…と思っていたらコーチの一人が体調を崩したようだ。

松ジィに頼み込まれて仕方なく明日も出ることにした。

松ジィも凄く疲れた顔していたな…

しゃーないな…頑張りますか！

次の日、松ジィも体調を崩した。

それでも無理して来た松ジィを無理やり送り返し、松ジィの分までコーチの仕事をする事にした。

結構な年のクセに働き過ぎなんだよ…

そうしてバイトは２５連チャンに達した。

新しくバイトも入ってきて松ジィらコーチ陣も復活してきた。

そんな中でも俺は休まなかった。

だってこのままきたら一ヶ月働いてみたくね、なんて松ジィには言ったけど、実際は他のバイトが旅行行きたいから変わってほしいと頼まれたから。

こんな時でも他人を優先してしまう自分に頭がクラクラしてくる…

そしてようやくバイト３０連チャン。

前日からかなり体調が悪い気がするが、『病は気から』なんて言うし気合いで負けなけりゃ何とかなるだろう。

そう思って俺は今日もバイト先へと向かった。

ペンギンの像が横に立つ入り口を通り抜け、受付の人に挨拶をしていく。

脇の方にある従業員ロッカールームに入ると元気に後輩の（俺からしたら先輩の）コーチと松ジィが楽しそうに話していた。

挨拶してから何の話をしているのか聞いてみると今日行われるサッカーの試合について予想していたようだ。

俺もサッカーは好きなので話に参加しようとしてはみたものの、話を聞いているのが精一杯で何も考えず話していた。

松ジィにはやけに感心されてたが…

開館時間になり、いつものようにお客さんがドッと入ってきてすでになんだか息苦しい。

松ジィもはしゃぐ子供達を抑えるのにいつものように苦戦している。

俺は俺でプールの中にアクセサリーか何かを落としたと言われ、他のお客さんに邪魔扱いされつつも探している。

必死扱いて探して見つけたのに持ってくるのが遅いとか言われたときはこのおばさん絶対頭悪いな…とか謝りつつも思っていた。

…あっ…アクセサリー付けて泳ぐな、って言うの忘れてた…

１２時になると一回目のピークが終わる。

ここのプールには食事をとるスペースなどなく、大抵のお客さんは朝来て昼に帰るか、昼に来て夕方帰るか、のどちらかで１２時頃は意外にお客さんがいない。

そこで俺はその間に飯休憩を取っておく。

普段なら飯は弁当を持ってきて食べるが、この頃は面倒くささとバイト代が入ったため格安のカップめんを買い溜めして持ってきて食べるようになっていた。

カップめんを立ち食いそば屋のサラリーマンの如くちゃっちゃと食べきり、すぐにプールサイドへと戻る。

他のバイトにも休憩をあげなきゃいけないことと、もうすぐ1時になるためお客さんがチラホラ入ってきているためだ。

一時を過ぎると子供達が結構来る。

朝は夏休みスペシャルとかでアニメの再放送を見ているため昼から動き出すのが多いためだろうか…

スクール生が友達を連れてやってくることが多く、その関係で子供達に挨拶されることが増えた。

一応仕事中なので笑顔で返すだけだが、生意気な口たたいた奴がいたら連れてきたスクール生に罰を与えているから俺に対しての態度は良好になりつつある。

「先生〜！元気〜？」

また今日もスクール生が来たみたいだ。
松ジィがスクール生からタックル喰らっているのが見える。
「りょー先生〜！元気〜？」
次いで俺にタックルしてきたのを精一杯受け止めてやる。
少しフラついたが何とか受け止め…
「よーし！宗太に続け〜！」
ちょ…ちょっと全員のなんて受け止められる訳な…グシャ

「お前らな〜…タックルは挨拶表現に含まれてないんだからやらないこと！あとプールサイドで走るな！」
はぁ〜い！と元気良く返事していることから反省をしてないことが目に見える。
「お前らな〜挨拶ってのは「こんにちは。先生。」そう！こんな風にするもんなんだよ。お前らもこの子みたく言葉だけで挨拶しなさい！」
「「「はぁ〜い！」」」

「あぁもうこいつらは…君はこんな風に汚れずに育ってくれよ。」
振り返ってレベルの高い子供を撫でつつ言う。
「はい。分かりました先生。」
しゃがんで撫でていたため少し上から返事が返ってくる。
「すげ～いい子なんだな…ん？」
声の発生源が想像していたよりも高かったことに違和感を覚え、少し目線を上げる。
「でも小学生と比べられてもあまり嬉しくないんですけど。」
俺が頭を撫でている子供の隣で競泳水着を来ている女の子が立っていた。
「な…七咲！」
「はい。お久しぶりです。」
あー！先生の彼女ー！なんて後ろでスクール生が騒いでいる。
「違うからね～。宗太はあとで先生のとこ来るように～。」
やばい逃げろ～！と子供達はプールの中へと消えていった。
「だから走るなって…まぁいいか」

後でキッチリ指導してやるから。

「それにしても久しぶりだな。郁夫も元気にしてたか？」

コクリと頷く郁夫を見て初めて反応を返され少し感動しているところに七咲が話しかけてくる。

「郁夫も先輩に慣れてきたみたいですね。この調子で郁夫の人見知りが治ってくれればいいんですけど…」

「確かに。俺のようにトークも出来るクールな男を目指しているなら頑張んないとだめだぞ！」

「郁夫。この人みたいにはなっちゃだめだからね。ちゃんと自分の発言に責任を持てるようにならないと。」

「ははっ。手厳しいな。」

「…？それよりつかぬことをお尋ねしますが、私達とこんなに話していてもよろしいのですか？」

「う～ん…ダメだろうけどまぁいいっしょ。それより「郁夫。先輩の邪魔しないようにあっちに行こうか。」…巽は寂しいと死んじゃうんだぞ。…まぁいいや。水泳楽しんでこいよ。」

「はい。失礼します。」

七咲と郁夫はプールサイドへと向かっていった。

たぶん今から準備運動するんだろう。
それよりも今は七咲と話している間、ずっとプールの端からこちらをニヤニヤ見ていたスクール生軍団をシバきに行こう。

「ふぅ…あと一時間か…」
チラッとプールに備え付けられている時計を確認するとバイト終わりまで三時を回ったところだった。
「はぁ～…やっと休み取れるぞ～…」
３０連チャンのお礼と言ってはなんだが、明日から三連休をもらっている。
最初は夏休み終わるまで休んでもいい、と言われていたがお金欲しいんで…なんて言って計五日間しか休みを貰わなかったのは昨日の話。
「明日は寝てるぞ～！」
久しぶりの休みが目の前に見えているためかすでに俺の中での緊張の糸は切れてしまったようで、完全に脱力してしまった。
「おっと…やべやべ、ふらついちまった。気合い入れ直さないとな。」

一回深呼吸してもう一踏ん張りするか、と空気を吐き出した所で急に話し掛けられる。

「先輩、大丈夫ですか？」

へっ？と顔を上げると七咲が少し心配そうな顔をして立っていた。

「あ…あぁ。ちょっと気抜けてただけだから大丈夫だよ。」

やば、周りから分かるほど気が抜けてたか…と反省しつつも、すぐに笑顔を見せて返事をする。

それを聞いて七咲の傍にいた郁夫も心成しか分からないがホッとした表情を見せる。

「ウソですね。先輩本当は体調が悪いんじゃないんですか？」

それでも七咲はキッと俺を見ながら言ってくる。

「おいおい、先輩を舐めんなよ。この程度で「先輩だから信用出来ないんです。」…分かった分かった。気を付けるさ。じゃあ俺は仕事に戻るわ。」

「あっ先輩！」

じゃあな～と後ろ手に手を振りながらプールサイドを歩いていく。

そこで視界が急激に横回転していった。

１８話（後書き）

物語もようやく夏休みに入りました。

って言っても現実世界ではもう夏休み終わってる学生さんばっかですよね～。

この小説の夏休みも速攻で終わる予定なんで（主人公の金欠病により）すぐに季節的に追い付くでしょう。

これからもよろしくお願いします！

１９話

テレビからお笑い芸人の生み出す笑いが聞こえる。

俺はソファーに座りながらテレビの画面を眺めていた。

後ろからは母さんが台所で調理をする音が聞こえる。

部屋には美味しそうな匂いが充満していて、俺の腹の虫は悲鳴をあげている。

玄関からドアの開く音が聞こえる。

もう８時になるし父さんが帰ってきたのだろう。

居間へと向かう足音が聞こえる。

毎日の様に母さんから帰ってきたら手洗いうがいをして、と言われているがもはや直ることは無いだろうと俺は思っているが、それは今日とて変わらなかった。

母さんのお帰り、という声が聞こえる。

俺も父さんにお帰り、と言おうと振り向くがそこから声を出すことが出来なかった。

父さんが何か話す声が聞こえる。

俺の位置からは何も聞こえなかったが、母さんの顔が驚愕に変わっ

ていく。

何かが崩れる音が聞こえる。

テレビから笑い声が聞こえる。

俺を呼ぶ声が聞こえる。

「ん……んぱい…先輩！」

「ん…何？」

身体が揺れるのを感じ、ゆっくりと覚醒していく。

「先輩！大丈夫ですか！先輩！」

どうやら俺を呼んでいたのは七咲のようだ。

事実七咲は俺の名を呼びながら体を軽く揺さぶっている。

「あぁ…七咲か…どうした？」

何故か横たわっていた俺はノロノロと起き上がっていく、

「あっ！先輩まだ起き上がっちゃダメです！」

のを七咲に止められた。

「あれ？俺なんで更衣室で寝てんの？てか今何時？」

スタッフ用の更衣室のベンチに寝たまま備え付けの時計を見るともうすぐ四時になるところだった。

「やべ！バイトサボっちまった！」

急激に頭が冴え、ガバッと起き上がる。

少しフラついてしまったが、とりあえず立ち上がろうとしたところ、

「先輩！いいから寝ててください！」

七咲にベンチの上にちょっと強めに押し込まれた。

「先輩は倒れたんですよ！無理しないでください！」

「へっ？倒れた？」

「そうです。ここまでコーチの方に運んでもらったんです。」

うーん、と頭を抱えてみるも全く思い出せない。

「あとバイトでしたら今日は上がって良いそうです。また今日から夏休み終わるまで休んで良いそうです。」

俺を落ち着かせようと要件を矢継ぎ早に伝えてくれた。

「そうか…倒れちまったのか…」

自分に起きた状況を受け止めることしかできず、再び横たわりボーっと天井を見る。

「俺本当体力ねぇな～！この程度で倒れちまうとは…郁夫にも情けないところ見せちまったな。」

七咲の隣で俺を見てくれていた郁夫に恥ずかしげに笑う。

郁夫は顔を振ってくれたが、やっぱりなんだか恥ずかしかった。

「よし！それじゃ今日はお言葉に甘えて帰って、明日から頑張りますか！バイトも一日も早く復帰しねーといけないし。」

ゆっくりと起き上がりつつ、帰る支度を始めようとする。

「じゃあ七咲。着替えるから出てい…七咲？」

少し出てもらおうと七咲の方を向くとそこには下を向きながら震える七咲がいた。

なんだか郁夫までビビっている様に見える。

「先輩…先輩は頑張りすぎです…」

七咲がボソボソ呟く。

かなり小さな声だったがこの静かな部屋では充分の声量だった。

「先輩は一人で頑張りすぎです…。聞きました…先輩が夏休み入ってから一日も休まずバイトしていたって…自分の休みを他の人に譲って働き続けたって…」

「そ…それは俺、金がないからしょうがないんだって！生活費稼がなきゃいけないし！」

低いトーンで話されると何故か凄く悪いことした気がする。

なので自然と言い訳するような口調になってしまった。

「…先輩が優しいのは知ってます。いつだって他人を優先する性格だってことも…」

そこで七咲はグッと顔をして上げた。

「でも自分の事もちゃんと考えてください！先輩が倒れた時、私がどれだけ心配したと思ってるんですか！」

ぶちまけるように自分の思いを俺にぶつけて、七咲は走って更衣室から出て行った。

郁夫は俺と更衣室の出口を交互に見て、少し迷いながらも七咲の後を追った。

バタンという二つの音が聞こえた後、キーンと耳鳴りが聞こえるほどの静寂が更衣室に広がった。

「…なんか怒られたし…しかも七咲泣いてたな…」

あれ？これ俺が悪いのか？

まだ頭が回ってないようで、考えても考えても答えは出なかった。

「…俺が悪いんだろうな〜…とっとと着替えて追いかけるか…」

方針が決まるとすぐさま行動に移る、といっても今まで倒れていた所為かお世辞にも早いとは言えない速度で着替えていく。

「今日はすみませんでした！失礼します！」

帰り支度を終えるとそのまま出口へと急ぎ、受付の人に謝罪してから扉を抜けた。

本当は松ジィやら先輩にキッチリ謝罪しておきたかったが、今はそれよりも七咲を追うのが先だろう。

気持ち勢い良く飛び出し、さぁ七咲はどこ行ったかな？と考える間もなく七咲は見付かった。

ペンギンの像の立っているコンクリートの台に郁夫と座っていた。

こちらをチラッと見てからすぐに下を向いてしまった。

どうやら待っていてくれたらしい。

「お待たせ。じゃあ帰るか。」

「はい…郁夫、帰るよ。」

七咲は郁夫と手を繋いで立ち上がる。

やはり先程の件があった所為か少し元気がない。
そして俺達は暗黙の了解で途中まで一緒に帰ることになった、かつて二人で帰った道を…

夕暮れ時を歩く俺達に会話はなかった。
ただただ家までの距離を縮めるだけで、七咲との距離は離れたままだった。

「なぁ七咲。正直俺はなんで七咲が怒ったのかは分からない。」

会話なく並んで歩いていたところで俺から七咲に話し掛ける。
話し掛けられる予想はしていただろうに、七咲はビクッと体を震わせた気がする。

「でも心配させたことに関しては海より深く反省してる。この通りだ。許してくれないか。」

俺は歩みを止め、七咲達に向かって頭を下げた。
勢い良く下げた所為で少しフラついたが今はそんな事は問題ではない。

「…」

七咲は俺の方を振り向かないまま、何も言わず立ち止まっている。

「…でも俺はこの性格を直す気はないんだ。これからも他人を優先していくと思う。それで七咲をいらつかせるかもしんない。でもそれは勘弁してほしい。」

こんなこと言って七咲は怒って帰っちまうかもしんない。

もしかしたら二度と会いたくない、ぐらい思ったかもしんない。

それでも俺もこれは譲りたくない。

「…先輩は…」

ようやく七咲はこちらを向いてくれてポツリポツリと話し始めた。

「ん？」

「先輩はどうしてそこまで他人の為に動けるんですか？私もお節介焼く方が性にあっていますが、先輩みたいには出来ません。先輩は自分を傷付け過ぎなんです。」

七咲の意見も尤もだろう。

「そんなことは～…あるか…。…あんま理由は言いたくないんだけどな～…」

俺は確かに自分が重荷を背負うのを承知で、他人を手助けしてしまう節がある。

「先輩…女の子を泣かしておいて、そんな態度取れちゃうんですか。やっぱり先輩はひどい人ですね。」

涙目のまま七咲はいつもの様にニヤリと笑う。

こんなことされちゃ話さざるを得ないよな。

「そうだな～…七咲この後大丈夫か？」

「えっ…特に予定はありませんけど…」

「じゃあこれから俺んち来ない？飯ぐらいなら作るからさ。」

七咲は少し考え、

「分かりました。郁夫、ここから一人で帰れる？」

と答えてくれた。

郁夫も力強く頷いている。

「ありがとな、郁夫。今度何か買ってやるから今日は許してくれよ。」

俺達に気を使ってくれた郁夫の頭を撫でながら言う。

「じゃあ早速行きましょうか。郁夫、お母さんに事情説明しておいてね。」

「そうだな。じゃあ郁夫頼むな！」

郁夫に大きく手を振りながら家へと向かう。

初めて人に話すことなので少し緊張してきたな…

「まぁ実は俺も詳しいことは聞いてないから分からないんだけど…」

俺は七咲に冷えた麦茶を出しながら、前置きを加えた。

「俺の父さん…今は実家の山形に、母さんと戻ってるんだけど、その父さんが、子供の俺が言うのもなんなんだけど凄くいい人でさ。五十歳間近なのに、いまだに小学校時代の友達と連絡取り合ったり、会社では部下に慕われてて、休日家に呼んじゃうくらいいろんな人と仲が良かったみたいなんだ。そんな明るくて、周りに笑顔が溢れている父さんを俺は尊敬してる、昔も今も。」

一口麦茶を飲む。

冷えすぎていて、なんだか口の中が痺れる感覚がした。

「部下の人達にはすげー人気だったらしいし、上司の人にも、その裏表のない性格が気に入られてたみたいなんだ。…でも同期や歳が一つ二つ上の人達からすれば、自分を差し置いて出世していきそうな父さんに、あまりいい印象を持ってなかったみたいでな。それで

も父さんはそういう人達とも仲良くしようと、積極的に話し掛けたり、残業の手伝いとかしたんだってさ。…まぁそれも気に食わなかったのかもしんないけど…。」

胡座をかきながら、目線だけをあちこちに配る。

とても七咲を直視していられない…恥ずかしくて…。

「そんな時、急に上司に呼び出されたんだってさ、仕事のことで。結構大きいプロジェクトをやってた最中で、父さんもそのプロジェクトに関わってたやつなんだけど…いきなり、リストラ勧告を受けたらしい。」

「えっ！？」

それまで一言も話さず、真剣に俺の話を聞いていた七咲が、たまらず声を上げた。

「理由は情報の漏洩…父さんが纏めていたチームにしか無い詳細な情報が、そのまま他社に渡されていたらしくって…しかも、部下の人達も口を揃えて、父さんしかそのデータを持ってなかったって言ったらしい。…まぁ後から部下の人が、父さんの同期の人達に強要されたって泣きながら謝りにきたらしいけど。…そんな風に、人に裏切られて、社会的地位も無くしたのに、父さんはその後俺と姉さんに優しく言ってくれたんだ。『他人のために動ける人になりなさい』ってな…。尊敬してる父さんに、あの状況でこんな事言われたら、それは従うしかないな、って中学時代の俺は思ったんだよ。…だから今みたいな性格になっていったんだと思う。」

もっとも小さい頃から言われてきた事だから、昔からその性格は作

られてたんだけどな、と俺は照れ隠しにと、頬を掻きながら話す。

「聞いてみたら大して面白くもなかっただろ？」

そういって俺は台所まで歩いていき、冷蔵庫から野菜を出していく。

俺は自分がこうまでして、他人のために動く理由を初めて他人に話した。

あまり心配させないよう努めて明るく話したけれども、話の内容が少し重いからか、七咲は暗い表情を見せている。

「七咲。今カップめんくらいしか無いんだけど何味がいい？あるのは醤油、カレー、シーフード。」

小さなカップめんを何個か見せつつ聞いてみたが反応がない。

「しょうがないな…今日は奮発して俺特製生姜焼きも作ってやるから機嫌直せ！なっ？それでカップめんは何食う？」

…

「お～い、七咲～！じゃあ七咲はシーフードな。今からお湯沸かすから少し待てよ～！」

それでも俺は努めて明るく振る舞う。

あんなこと言ったのに結局七咲から笑顔を奪っちまったし、せめてこれからは楽しませようと色々試してみたが七咲の返事は今一つのものばかりだった。

俺は七咲のご機嫌取りに苦労しつつも、二度とこの話はしないと固く誓った。

その後自信作の生姜焼きを食べても機嫌が戻ることはなく、食べ終えてから送る、という俺の言葉を七咲はやんわりと断って自宅へと帰っていった。

１９話（後書き）

ファザコンとか言うな！

…という話でした（笑）

たぶんあと１話で夏休み終わるんで、話がリンクして…と思ったらすぐ１０月に！？

あと全然関係ないんですけど、今書いている別小説もそろそろあげてみようかな～、って感じなのでこの酷い小説を読んでさらに時間が余る方がいらっしゃいましたら、是非ドブに投げ捨てに来てください！

20話

「おーっす大将。今日は邪魔するぜ～。」

「おう。遠慮せず上がってくれ。」

学生達の至福の時、夏休みが終わりを迎えようとしている今日、純一と梅原が俺の家を訪ねてきた。

「相変わらず暑い部屋だね…一応聞くけどエアコンとかある？」

「うちわがある。ほらっ。」

「…ありがたく使わせてもらうよ…」

今日三人が集まったのは単に野郎三人で遊ぶから…といった訳ではない。

「それじゃ早速だが始めるか。」

「そうだな。よぅし！夏休み終了まであと3日！3日全力を尽くすぞ！」

「「おぉー！」」

俺達三人でなければできないことを成し遂げようとしているだけだ。

「よし！じゃあ俺は早速取り掛かる！純一、怜、お前等も任せたぞ！」

「任せてよ！梅原も手を抜いたら承知しないぞ！」

「俺達三人が集まればこの程度のことなんてことないだろ。二日で終わらせてやろうぜ。」

しゃー！いくぞー！と気合いの入った叫びと共にそれぞれの担当のブツを開いていく。

梅原は文庫本…純一は化学の問題集…俺は物理の問題集…。

そう…。俺達はただ単に夏休みの宿題を終わらせるために集まったのだ…。

俺達三バカは小学生の時から夏休みの宿題と言うものに苦労させられてきた。

学力的に劣っている俺達は、他の人が夏休みの宿題に費やす時間の倍は必要であること、絵日記など毎日習慣付けしてやらなければいけないことが大の苦手だった。（好きな事に関してはまるっきり話が変わってくるが…）

それでも俺達はバカなりに課題をこなしてきたのだが、中学に上がると同時に課題の量と質に圧倒されてしまった。

一人でこなすにはどうしてもこれまで費やしていた時間の更に三倍

は必要だろう。

そこでバカ三人に電流が走る…

「「「三人で分けてやればいいんだ…」」」

中学一年から始めたこの策は当初何ヶ所もボロが出るほどの愚策だった。

しかし毎年の様に夏、冬、春休みの間に出される宿題を俺達はこなしてきた。

そして俺達はついに編み出した…教師を欺く必勝法を…

毎年の様に出される読書感想文…これを歴史が好きで表現力のある梅原に担当してもらう。

梅原は課題図書の中から、詳しい分野について書いてありそうな本を三冊読破し、豆知識を交えて感想文を書く。

これにより読書感想文についての評価は問題ない。

筆跡からバレないように後でちゃんと自分で写し直すのも忘れない。

続いて今回出された数学の問題集。

これに関してはクラスでも数学の成績が上位の俺と純一がいるので問題はない。

これは二人がそれぞれ挑戦し、出来上がったものを梅原が二人の答

えを交互に写すだけでなんとかなる。

今回出された化学、物理の問題集は答えが付いているため、俺と純一が空いた時間に適度に間違いながら写していけばいいだけだ。

それだけで終われば何も苦労する必要はないのだが…

「よっしゃー！一冊目読み終わったぜ！おまえ達はどうだ？」

ミッション開始してから三時間といったところで、部屋の隅でリラックスした体勢で物静かに読書していた梅原が順調に進む宿題の進行状況を告げる。

「俺の方もあと三ページで終わるぞ。純一は？」

「僕も後少し！三十分以内には終わるさ！」

俺達二人が取り組んでいた数学もあと僅かというところまできていた。

「ふっふっふ…今年は余裕で終わっちまいそうだな！ちょっと本気を出し過ぎちまったか？」

まるで戦隊物の悪役の様な口上で話す梅原。

「ふっ…僕達のことを甘く見た結果だね！」

ちょっとキザな戦隊物のブルーの様に話す純一。

「まぁ待てよ。戦いはまだ始まったばかりだ。気を抜いた奴からや

られるぞ。」

浮かれるみんなを纏める戦隊物のレッドの様に話す俺。

凄くノリノリで話しているが、こんな会話を誰かに聞かれたら恥ずかしくて卒倒しそうだが、そんなリスクを気にしないほどのハイテンション状態になっている俺達。

それほどまでに調子良く宿題は片付いていく。

今の俺達に敵はいない。

俺達は時計が七時を回った頃、一日目の戦闘を終了した。

「じゃあ今日の戦果を発表するぞ。俺は読書感想文一人分終わらして、すでに二冊目を読み終えた！」

おぉー！、さすが梅原！と言った声が聞こえる。

…といっても言っているのは残り二人なのだが…

「じゃあ俺な。俺は数学は終了、さらに物理終了だ！」

何？怜もやるな！なんて声が聞こえてくる。

毎回思うがなんで俺達はこんなにノリノリなんだろうな…

「じゃあ僕だね！僕も数学、化学終わらせたよ！」

純一も二つか…明日は負けん！なんて聞こえてくる…少し恥ずかしくなってきた…

「よし！今日の戦果は良好のようだな！それじゃ今日は明日に備えてここで一時休戦だ！」

「分かった！じゃあ俺は飯の用意をしてくる。純一は…」

「分かってるよ！宴の準備だろ？抜かりないよ！」

「よし！遊ぶぞー！」

そう、これが俺達が集まった二つ目の理由…俺の家で徹夜でゲーム大会を行うことだ。

なんといっても勉強が嫌いな三人は、ただただ宿題をするだけではモチベーションは上がらない。

その問題点を解消するためにとった行動とは、ある程度終えたら徹底的に遊ぶこと。

昼間は全力で宿題を片し、夜はゲームで明日のモチベーションを高める。

そしてそのまま家に泊まって、明日は起きたときから宿題を始める、といった流れで今までも宿題を乗り越えてきた。

去年俺が一人暮らしを始めたこともあり、家族の目を気にせず深夜三時までドンチャン騒ぎしたため、起きたのが昼の三時になっちまったのは小さな誤算ではあったが…

俺が作った簡易食をパパッと片付け、純一があらかじめ持ってきおいたＴＶゲームを始める。

この日のためにテレビ（昔使っていたもの）は押し入れの中にしまっておいてある。

「じゃあ早速始めようか！とりあえずこれからでいいだろ？」

「まぁその辺が妥当だろ。怜～！先やってるからな～！」

台所で食器をイソイソと洗っている俺に向かって梅原が言ってきた。

梅原もとっとと始めたくて仕方がないようだ。

「分かった！先に二人で最下位争いしててくれ！こっちも終わり次第行くから！」

少し嫌みを混ぜて返したのだが返事がない。

横目にチラリと見るとすでにゲームは起動していて、二人とも画面に釘付けのようだ。

「うわ～…疎外感～…とっとと終わらせるか！とりあえずはっと…」

そういって流しの中に溜まった食器を急ピッチで片付けていく。

「梅原、純一。起きろ。飯出来たぞ。」

俺は布団の中でグースカ寝てる二人を起こす。

昨夜は結局一時頃、隣の住人に壁ドンやられるまでゲーム三昧だった。

俺はその後すぐに寝たが、二人は音量を

横のテーブルにはすでに朝食が用意されていて、起きたらすぐ食べれるといった状況だ。

「ん…おはよ…今何時？」

「今十時前。飯出来たから早く起きろ。ほら梅原もだ。」

とりあえず意識が戻ってきているようだが、いまだ布団の上でボーっと寝転がっている二人。

こいつら絶対一人暮らし出来ないな…したら遅刻の嵐で留年するだろう。

「ほら！起きろ～！
5！4！3！2！1！」

カウントダウンを終える直前、純一がガバッと起き上がる。

伊達に毎朝俺に起こされてないな…

「0！」

とカウントダウン終了を告げると、俺は未だゴロゴロしている梅原の耳にヘッドホンをセットする。

セットが完了すると同時に大音量で音楽を再生した。

ギャー！と梅原の断末魔がヘッドホンから漏れる音楽と合わさって聞こえてくる。

「起きたか？起きないならもう一回やるけど…」

一度スイッチをＯＦＦにして、梅原に訊ねる。

「俺…が…悪かっ…た…」

そういって梅原はノロノロ起き上がる。

「いや～快適な朝だな！眠気なんて吹っ飛んじまうな！」

「怜が無理やり吹っ飛ばしたんだけどね…」
一足先に朝飯を食べている純一が何か言ったようだが気にしない。
「純一…俺は誤解してた…怜に起こされる朝がこんなに辛いなんて…」
「梅原…やっと分かってくれたんだね…僕の不運を…」
「良いから早く食べろって。てか朝からあんな名曲聞けたのになんて言い草だ！」
「…出来れば人間の耳に適した音量で聞きたかったさ…」
なんかボソボソ言っているが気にせず俺も朝食を食べ始めた。

「よし！二つ目終わり～！そっちはどうだ？」
朝食を食べ終えてすぐに宿題に取り掛かり、一時間経ったところで梅原が二つ目の読書感想文を終えたようだ。
「う～ん…こっちはまだまだ時間かかるな～」
「うん…終わりが見えないよ…」

順調に終わらせていく梅原に対して、俺達二人は頭を抱えながらペンを動かせずにいた。

俺達が今こなしているのは英語の本文和訳。

これも夏休みの宿題として出されたもので、英語の教師曰わく、二学期に行う範囲全ての本文和訳してこい！とのことだ。

一つの本文が大体３０行程度で、それが六つ。

なかなか長めの文章なのに二学期中に六章も終わんのかよ…と愚痴りながらも俺達は朝から辞書片手に和訳に勤しんでいる。

俺達三人の英語力からしたら、一つの和訳に二時間はザラにかかり、それが二人で六つ。

計六時間は英語と向き合ってなければいけない、そんな事実もやる気を下げる要因の一つだ。

やる気が下がれば更に和訳が遅くなる、といった悪循環に陥るのは避けられないところであった。

そんな唸っている俺達に救いの手が差し伸べられた。

ピンポーン。

「ん？誰だろう？はーい！」

俺は一度手を止め、玄関へと向かう。

面倒くさがって覗き穴を見ないでドアを開けると、

「こんにちは、先輩。今大丈夫でしょうか？」
と制服の夏服を着た七咲が可愛らしい笑顔を見せつつ俺に挨拶してきた。
「おぉ七咲か。まぁとりあえず上がりなよ。」
失礼します、と一言入れてから七咲は家へと上がると、すぐさま中にいた二人に気付いて挨拶をする。
二人とも突然の訪問に驚いているようだ。
「怜…七咲がどうして怜の家に来てるの？」
梅原と話す七咲をチラチラ見つつ、純一は俺に耳打ちしてきた。
「なんかやたら最近世話焼かれるようになって結構ウチに来て飯作ったりするようになったんだよね…」
「えっ？なんで？」
「…さぁ？」
明らかに理由は分かっているが勿論それについては触れない。
「巽先輩、橘先輩。今お二人は英語の宿題をやっているんですか？」
急に話を振られ、意識を向けさせられる。

「あ…うん。今ちょっと手こずっちゃってあまり進んでないけど…」

「そうなんですか…巽先輩も英語ですか？」

「あぁ。まぁ俺も純一と同じで全く進んでないけどな。」

「先輩も英語苦手なんですね。」

別に『英語』だけが苦手なわけじゃない。

「でしたら私が教えましょうか？私英語は得意な方なので。」

「えっ…いや流石に後輩に教わるのは…」

「じゃあ私の数学の宿題を見てもらえませんか？そのお礼として英語を教えますので。」

「いや…根本的な解決になってないが…」

「じゃあ決定ですね。ちょうど今日持っているのでお願いします。」

「お～い！話聞こえてるか～！」

なんて声を出すも七咲は全く気にせず、英語の宿題をジッと見ている。

英語を観ることはすでに決定事項なのだろう。

しょうがないので俺も七咲の宿題を見ていく。

すでに全て解き終えていたが、よく見ると間違いもチョコチョコあった。

こうして七咲を加えた四人で宿題を完成させていき、その日の夕方には全ての宿題を終えることが出来た。

そこで俺達が宿題を分けてやっていることがバレて摩耶ちゃんに報告すると脅されたのは内緒にしておきたい。

てか七咲の方が余裕で英語が出来たのは結構凹む出来事だった。

２０話（後書き）

自分はこういうことしまくって宿題を終わらせてました。

男しかいなかったですけどね…

21話（前書き）

なんか凄く長くなりました…

21話

「ねぇひびき。今度は輝日南の方のお店行ってみない？」

私はウィンドウショッピングの帰り道を親友であるひびきと一緒に歩いていた。

「はるか、いくら夏休みって言ったって私達受験生なのよ。遊びも程々にしないと…」

また始まった…ひびきはことある事に私を注意してくる。

今日のショッピングだって否を唱えるひびきを無理やり押し切って決まったことだった。

「そ…そんなこと分かってるわよ！」

勿論勉強しなければいけないことは分かっているのだが、まだ受験まで四ヶ月以上あるのだ。

少しくらい遊んだって罰は当たらないと思う。

「本当に分かってる？この前の模擬試験の成績が悪かったのに？」

…本当まるでお母さんかのように説教してくる。

「もう…分かってるわよ！本当にひびきはしつこいんだから！」

説教されるのが嫌な私は一人先に走り出し、ひびきを置いていくこ

とにした。

勿論ひびきにあっかんべえするのも忘れない。

「っ！はるか！危ない！」

「えっ…？」

ひびきの声に反応して横を向いてみると赤い車が私に向かってきている。

どうやら走り出した先は横断歩道で、不運ながらこちらは赤信号だったらしい。

車も私に気付いて急ブレーキをかけるがとても間に合う距離ではない。

なんだかこれまでの楽しかったことがドンドン浮かんでくる…これが走馬灯ってやつなのかな？なんて思っている間にも車は近付いてくる。

私死ぬのかなぁ～…なんて考えが浮かぶのと急激に横にひかれるのは同時だった。

ハッと意識を戻すと私は歩道でへたり込んでいた。

後ろからはひびきの心配そうな声が聞こえる。

「前向いて歩かないと危ないっすよ。それじゃ。」

「えっ！」

ふと頭上から声が聞こえそちらを向くと、そこには短髪の男の子が立っていた…いやすでに青信号に向かって歩き出していた。

「はるか！大丈夫！？」

ポケーッと助けてくれたであろう男の子を見ていると、後ろからひびきが駆け寄ってきた。

「はるか！ねぇ！どこか痛い所ない！？」

座り込んでいる私の体を支えつつ私の顔を覗き込んだ。

「ひびきちゃん…」

「どうしたの！？」

「…怖かった～…」

ホッとしたことで涙腺まで緩んでしまったのかは分からないが、涙がポロポロと出てきて顔が歪むのが自分でも分かった。

「はるか…よしよし。」

怒られるかと思っていたがひびきちゃんはまるで子供をあやすよう

に私の頭を撫でながら抱き締めてくれた。
それにより私は更に泣いてしまったのはしょうがないことだろう。
…その後キッチリ怒られたけど…
そういえば助けてくれた人にお礼言うの忘れてた…次に会ったときでいっか。

「よし！準備オッケー！じゃあ行きますか！」
そういって俺は家から出た。
今日から二学期が始まるわけで俺は久々の制服姿である。
いつもなら橘家へと向かうところだが、今日はそのまま学校へと向かう。
「なんで高校になってまで日直なんて制度あんだよ…」
そう、俺は二学期早々日直の順番が回ってきていて、早く登校するよう夏休み前から言われていた。
そんな訳でいつもより早く学校へと向かっている。

今日から二学期が始まるのに流石に時間が早いためか登校する生徒は少数だ。

特に急いで登校しなければならないほどの時間でもないことを腕時計で確認してから、俺はかなりのスローペースで歩いていた。

事実後ろから来る生徒やサラリーマンにドンドン抜かされていった。

「あ〜…まだ少し暑いな…」

まだ九月に入ったばかりなので、夏の暑さは引かず顕在していた。

制服をパタパタと扇いで涼んでいると、また輝日東の生徒に抜かれた。

なんとなくチラッと俺を抜いていった生徒を見てみると、そこには友達と話している見知った人がいた。

「あっ、塚原先輩。おはようございます。」

声を掛けられてから俺のことに気付いたようで、

「あぁ、巽君。おはよう。」

と俺の方に向き直って挨拶してくれた。

「えっ？ひびきの知り合い？」

と俺からは後頭部しか見えなかった塚原先輩の友達が俺の方をクルリと向いた。

「あら、可愛らしい子ね。ひびきのボーイフレンドかな？」
塚原先輩の友達はサラサラとした長い髪をしていて、所謂モデル体型…いや顔を含めてモデルのように綺麗な人だった。
「違うわよ、はるか。その子は私の後輩の知り合いなの。」
「ありゃりゃ、ひびきの弱みの一つや二つ握れると思ったのに…残念。」
どうも俺が塚原先輩の彼氏でないことが案外本気で不満なようで、とても残念な顔をしていた。
「それで君の名前はなんて言うのかな？」
横に並んで歩いている俺達の一歩前にクルッと反転しながら出て、俺の顔を覗き込むように眺めながら訊ねてきた。
「あぁ…挨拶遅れてすみません。っ！すみません！」
俺は挨拶も中途半端にお友達（仮）の手を掴んで、グイッと自分の方に引き寄せた。
前のめりになりながらお友達（仮）がいた場所を、横並びに話しながら自転車を運転する小学生が通っていった。
よくよく考えたら別にぶつかるような距離じゃなかったかもな…
「いや～急に引かれてビックリしちゃった～」

「急にすみません。自転車にぶつかるような気がしまして…」

掴んでいた腕をパッと話してお友達（仮）に謝る。

「いや、今のははるかが悪いよ。ちゃんと前見ないと。」

「まぁ何もしなくてもぶつかんなかったかもしれないですけどね。てかなんでこんな時間に自転車乗った子供達がいるんですかね？」

俺は自分の腕時計で時間を見ながら聞いてみる。

「確か輝日南の方の小学校は創立記念日とかで休みなんだったと思う。…それよりはるか、巽君に何か言うことないの？」

あれ、そう言えば時間が…

「あぁ！そうね！助けて「あぁ！ヤバい！遅刻する！すみません先輩！俺先に行きます！失礼します！」…行っちゃった…」

俺は塚原先輩とはるか？先輩に挨拶して一人先に学校へと走っていくことにした。

ゆっくり歩きすぎた～！

「よし！巽君に会いに行こ～う！」

四時間目の授業を終えると私は一つ下の階の２－Ｂ教室を目指して歩き始めた。

あの後ひびきちゃんから彼のクラスは聞いたから会えるとは思うけど…なんだか一人で行くのは寂しいなぁ～。

ひびきちゃんは水泳部の集まりがあるとかで昼休みになるとすぐに部室の方に行ってしまった。

それなので仕方なく私一人で巽君に会いに行く。

目的の教室を除いてみると大勢の生徒がいて、どれが巽君なんだか訳が分からなかった。

「ならば…おーい！巽く～ん！いるなら返事して～！」

私の呼び声が教室中に広まると、なぜか教室内にいた生徒全員がこちらを向き、シーンとなってしまった。

「ありゃ？たしか２－Ｂだったと思うけど…ねぇ君？このクラスに巽君っているかな？」

じれったくなった私は入り口付近で机に突っ伏していた男子生徒に訊ねた。

えっ…と、あの～…なんてしどろもどろではあったが、聞いたところこのクラスであることは間違いないらしい。

また他の子にも聞いてみたところ、どうやら屋上にお弁当を食べに

いったみたいだ。

私も何か買って行ってみよーっと！

朝から暑かったのだから教室内が蒸し風呂の様になるのも仕方がないだろう。

ただ俺はそんな状況が耐えれず、少しでも風に当たれるよう弁当箱片手に屋上に来た。

純一や梅原も同じ考えだったようだが、あいつらは弁当が無いため日陰のテラスで食べる！といって食堂へと行った。

よって一人で屋上の隅で食べている訳だが…気温が高いためか、コンクリートに熱が篭もっている屋上に他生徒の姿は殆どなかった。

「あぁ～平和だな～」

涼しい風がそよそよと吹く屋上で一人で食べる弁当にかなりの快適性を感じていた。

けして一人で食べることに寂しさを感じて独り言を言ったわけではない。

「あ～！いたいた！お～い巽く～ん！」

と急に自分の名前を呼ばれ、そちらを向くと今朝塚原先輩と一緒に登校していたお友達（仮）、はるか先輩がいた。

「あっどうも、はるか先輩。はるか先輩も屋上で昼飯ですか？」

はるか先輩の持っているサンドイッチと紅茶を指差しつつ訊ねてみた。

「う～ん…それもあるけど一番の理由は君に会いに来たからよ。」

「へっ？俺何かやりましたっけ？」

はるか先輩みたいな人にそんなこと言われて少しドキッとしてしまったが、まぁそんなモテモテ体質なんて生まれてこの方持ったことないので勘違いだろう。

「えーっと、そうじゃなくて…助けてもらったからお礼を言いにきたの。本当にありがとうね！」

「あぁそういうことですか。今日のはお節介みたいなものですから別に礼なんていいですよ。」

「今日のもあるけど…ひびきに聞いたんだけど、その前も私を助けてくれたことあったんでしょ？」

どうやら今日以外のことも含めてお礼を言いたいらしい。

しかし…

「えっ？全く覚えにないんですけど…」

それは俺自身が全く覚えてないことだった。

「惚けちゃって〜！ほら！夏休み終わりの水曜日にあそこの交差点で…」

と屋上から俺が助けたと言われる現場を指差した。

「水曜日…っていうと五日前ですか。そういや車に引かれそうな人に会いましたけど…あれって先輩だったんですね。」

「そうよ〜！あの時お礼言う前に君がいなくなっちゃうんだもん！」

なんかはるか先輩がプンプンしている。

俺としてもなんだか心が痛い。

「それは〜ちょっと用がありまして〜急いでたんですよ？」

「なんで疑問文になってるのかな？…まぁ助けてもらったんだから贅沢は言えないわね。本当にありがとう！」

「はぁ…どういたしまして…」

言えない…けして未だに記憶が途切れ途切れであまり思い出せていないなんて…

「…」

そこで急にはるか先輩が俺の方を見ながら考え込み始めた。

ヤバい！と内心焦っているところを見透かされたと思っていた。
しかしはるか先輩が次に発した言葉は、
「ねぇ…なんで君は私がピンチの時にそばにいるの？」
なんて答えようの無い質問だった。
「えっ…なんでといわれましても…」
「もしかして君ストーカーさん？」
「なんでそうなるんですか！」
突然冤罪を突きつけられ、話に思考回路がついていけない。
「じゃあなんで？」
小首を傾げて聞いてくる。
「えーっと…ですから偶々そこにいただけで…」
「やっぱりストーカーさんなの？」
「違いますよ！あ～もうなんて言えばいいんだ…」
「ほらほら～早くしないとストーカーさんってことにしちゃうぞ～！」

「だから～…」

もうヤケだ！

「俺は先輩にとってヒーロー的な存在だからじゃないですかね！」

「…えっ？」

…俺は何言ってんだ…

急激に体中のの熱が冷めていき、辺りの空気が重くなる。

ハズい…いっそ笑ってくれ…

重苦しい空気が勢い余って言ってしまった自分を嫌悪することしかさせない。

「プッ…アハハハハ！」

時間差ながらも先輩は笑ってくれた。

しかもお腹を押さえて、物凄い可愛らしい笑顔で笑っている。

「アハハッ！それなら仕方ないね！私のヒーローなんだもんね！」

気を使わせてしまったな…なんて考えていた俺は間違っていた。

…先輩結構本気で信じてるっぽい。

「あ～面白かった！それじゃあね！ヒーローさん！」

そういってはるか先輩は開けてもいない昼飯を持って屋上から出て行った。

「…結果オーライ…なのか？」

今は屋上に俺一人しかいない。

嵐は去っていったのだ。

「はぁ…とりあえず…」

俺は屋上の隅に座り込んで、自己嫌悪タイムに入った。

ヒーロー…何言ってんだ…なんて独り言を言っていたが、全て屋上に吹く涼しげな風が飛ばしてくれたため誰にも聞こえてないだろう。

結局、昼休み終了のチャイムがなるまで、俺がそこから動き出すことはなかった…

おまけ1

「あっ、七咲。お昼一緒に食べない？」

「はい。是非ご一緒させてください。…って今日は森島先輩と一緒ではないんですか？」

「フフッ…別にいつもはるかといる訳じゃないからね。」

「そうですか？たまに森島先輩がわざわざ部活終わるまで塚原先輩を待っているのを見るくらいなので、お昼とかは毎日のように一緒にいるのかと思ってました。」

「確かにはるかと一緒にいることも多いし、お昼も毎日のように一緒に食べてるけど、今日は私にもはるかにも用があったから。ただそれだけだよ。」

「森島先輩の用…というとやっぱり告白のお断りとかですか？」

「フフッ…七咲まで言うようになったんだ。」

「流石に何度も、告白されて断るのが大変だ～、って嘆いていると塚原先輩に聞いていませんからね。」

「はるかは本当に引く手あまたなのに誰とも付き合わないからね。年中休みなしでラブレターが届くのよ。」

「それはそれで大変そうですね…」

「試しに付き合ってみたら？なんて言ってみるんだけど、『そうでさねぇ。』って言うだけで結局変わらないし…」

「クスクス…なんだか塚原先輩って森島先輩のお母さんみたいですね。」

「はぁ…はるかにもっとしっかりしてもらいたいだけなんだけどね…それより今日はるかの用事なんだけど…」

「はい。なんなんですか？」

「七咲のお気に入りの二年生の先輩いるでしょ？」

「…質問に答えかねますね。一体どなたのことなのか分かりません。」

「実はその七咲の大好きなあの子に会いに行ってるんだよね。」

「えっ！たつ…」

「たつ…何かな？」

「…何でもないです。」

「フフッ…そうなの。巽君に会いに行ってるんだよ。」

「別に巽先輩、なんて言ってませんけど…」

「あらっ、そう。じゃあこの話はここで終わりね。それじゃあお昼にしようか。」

「…塚原先輩イジワルです…」

「ごめんごめん。七咲ってあんまりそういう話しないから聞けるときに聞いとこうかな、って思ってね。」

「…それよりもどうして森島先輩が巽先輩に会いに行ったんですか？」

「あぁそうね。実は…」

「そんなことがあったんですか…」

「うん。特に夏休みの方は本当に危ないところだったんだけど間一髪ってとこで助けてくれたの。だからそのお礼を言いに行ってるわけ。」

「なるほど…そういうことだったんですか。」

「そんな危ないことがつい先日あったのに、今日も…だからね。」

「森島先輩ならはしゃいで飛び出していく姿が想像できますね。」

「懲りないのよね～。今日も巽君と別れた後、すぐにクラス聞かれて会いに行く！っていうのを止めるので、怒るタイミング逃しちゃって…」

「そ…そうなんですか…」

「フフッ…たしか『可愛い子！』とか言ってたから結構気に入ってるのかもね。」

「はぁ…」

「ん？七咲どうしたの？心配になっちゃった？」

「…いえ。」

「そう。でも私は七咲のことも応援するからね。」

「えっ！」

「はるかは強敵だろうけど負けないでね。私は立場上手助けは出来ないけど。」

「先輩！？何を…」

「とりあえず素直になってみたら？彼モテそうだからうかうかしてると取られちゃうかもよ。」

「…！分かりました…頑張ってみます…」

「フフッ…やっと素直になれたね。…あれ？あそこにいるのはるかじゃない。」

「あ～ひびきちゃん！あのね！巽君凄い面白い子だったよ！あれ？

横にいるのは…たしか逢ちゃんだよね？相変わらず可愛いな～！」

「…気に入っちゃったみたいだね。」

「…先輩の女たらし…」

「えっ？なに話してるの？仲間外れにしないでよ～！」

「フフッ…七咲に頑張れって言ってただけだよ。」

「ん？逢ちゃん何かするの？頑張ってね！」

「…はい…頑張ります…」

おまけ2

キーンコーンカーンコーン…

ヤバッ、チャイム鳴っちゃったな…そろそろ教室に戻らないと…

俺は空になった弁当箱を片手に持ち、自分のクラスへと戻る。

すでに昼休み終了のチャイムは鳴ってしまっていて、あと五分もすれば授業開始のチャイムが鳴るだろう。

俺は少し急ぎ足で自分の階まで降りていった。

途中の階が少し気になったのは確実にさっきはるか先輩との会話の所為だろう。

未だ喧騒の絶えない廊下を通り抜け自分の教室に着くと、廊下にある自分のロッカーから次の授業の教材を空いている方の手で取り出し、それから教室へと入っていった。

教室の中も廊下同様ざわざわしていて、なんだか話し合いをしているかのようにクラスメートが固まって話していた。

その中には薫や梅原、純一の姿もあった。

なにしてんだろうな～と俺も話の輪に入ろうと、教室の隅の方にいた集団に近付いていくと、なぜかその集団全員が誰か一人の声を聞いてこちらを振り向いた。

集団で見られてとても威圧感を感じていたが、話してみないことには分からない。

俺はひとまず教材を机にしまい、鞄の中に弁当箱を入れてから聞い

てみることにした。

今思えばその時に逃げ道を確保しておけばよかったと思う。

机の横に掛けられた鞄をそのまま空けて入れようとしゃがんだところ、俺は急に横から衝撃を感じて倒れてしまった。

急に弾き飛ばされてなんだ？と思いつつも起きあがろうとするが、なぜかマサが俺の上にのしかかっているため立ち上がれなかった。

なにしてんだよ、と愚痴の一つ言ってやろうと思ったが、倒れている俺の周りを取り囲むように男子生徒が集まってきたため、プレッシャーからか何も言うことが出来なかった。

少しの間沈黙が漂ったが、すぐにケンが話し始めた。

なんでも今日の昼休み始まってすぐに、このクラスに森島先輩が来たらしい。

なんでも森島先輩は俺のことを探していたようで、わざわざどこに行ったかまで近くにいた生徒…ケンやマサ達に聞いていったそうだ。

そうなんだ…ところで森島先輩ってはるか先輩のこと？って能天気に訊ねてしまった時は男子全員から熱烈な視線を浴びてしまった。

一人残らずその中に殺意を含ませていたが…

男子全員に囲まれたまま押し倒されている状況はかなり恐怖心を感じる物があるが、それでもなんで自分が囲まれなきゃならないのか聞いてみた。

なんだか何人かの男子が手をパキパキ鳴らしたり手首や首を回したりしているが、そんなのは気にしないようにして返答を待つ。

そこでマサが訊ねてきた…お前はどうして学園中のアイドルである森島先輩と仲が良いのかと。

男子生徒が固唾をのんで俺の返答を待っているようだ。

少し顎に手を当てて考えてみる。

特に仲良くなった意識は無いが、まぁ話すキッカケになったのはこれだろうな。

俺は森島先輩の親友である塚原先輩と知り合いで、そこから知り合ったと簡単な経緯を交えつつ話してみた。

塚原先輩まで…

ん？

しかも塚原先輩と知り合った理由も後輩の女の子…

なんだか不穏な空気を感じ…いや今までも感じていたが、更に険悪な雰囲気になった気がする。

少しざわめく男子を尻目に、ケンが更に一言聞いてきた。

何々…その後輩の女の子は可愛いのかって？うーん…まぁ可愛い部類に入るだろうな…俺は思ったままの答えを口にした。

ガシャーン！

ん？なんだかなにかガラス質のものが割れた音が聞こえた気がする。

それと同時に囲んでいた男子生徒がゆらゆらと身体を揺らしながら少しずつ俺に近付いてくる。

俺の制止の声も全く聞こえてないようだ。

ちょ…落ち着け…痛っ！えっ？なんで殴られてんの？ちょっ！なんて俺の声は誰にも届かずただただ虐殺は続いていった。

結局先生が来る直前まで残虐行為は続けられ、先生がクラスに到着したときは俺以外の生徒全員が着席していた。

なんでこんな目にあわなきゃいけないんだ…

22話（前書き）

文化祭〜

22話

そんなこんなで始まりました文化祭。

お祭り大好き輝日東高校の二学期最初の行事だ。

輝日東の文化祭では主に文化部と一年生、二年生のクラス毎での出し物で外部の人を招く。

中学までの展示のようなお堅いものだけではなく、生徒主体で食事や遊びを提供するのが輝日東の文化祭である。

その中でも基本的に食事を提供するクラスが多い。

この文化祭で得た利益は、クラス毎に自由に使っても構わない、という伝統？があり、お金欲しさに利益の出やすい飲食店を開くクラスが多数出てくるからだ。

俺はクラスの体育祭での熱血ぶりを見ているから、文化祭も気合い入れてやるんだろうなぁ～なんて思っていたし期待していた。

なってったって臨時収入が手に入るんだし。

しかしいざ文化祭の話し合いをしてみるとクラスに熱気が全くと言っていいほど存在しなかった。

体育祭で鬱陶しいくらい縦横無尽の活躍をしていた奴らも隣の席の奴と楽しく談笑中。

どうやらスポ魂は文化祭には反応しないらしい。
結局いつまでも話が纏まらなかったため、学級委員の綾辻さんの提案した普通の喫茶店がこのクラスの出し物となった。
準備は体育祭とは違い緩やかな空気の中行われ、そしてそのまま本番を迎えた。

「客来ないな…」

「そうだね…」

俺達のクラスに現在一人もお客さんがいない。
文化祭が始まってあまり時間が経っていないことも理由としてあるが、それよりも大きな理由があった。

「梨穂子のクラスは大繁盛だな〜…」

隣のクラスである２－Ｂの出し物であるメイド喫茶に客を持って行かれているのだった。

「すでに行列出来てるし…」

教室から顔を覗かせつつ純一が嘆息した。

少しくらいこちらのクラスに流れてきても良さそうなものだが、期待に反してお客さんは全く来ない。

「確かに梨穂子のメイド姿可愛かったしな～。」

先日、準備している最中に梨穂子が俺達（主に純一）に見せに来たことを思い出す。

「…なぁ怜…」

突然ウェイター姿の梅原に話しかけられて、トリップ状態から戻ってくる。

「どうした梅原？」

「このままあっさりと2－Bに負けんのも悔しくないか？」

「いや、別に。」

「俺は悔しい！というわけで今から俺達の本気出してみないか？」

「本気っていってもな～。客来ないことには腕の振るい所無いし…」

エプロン姿の俺が言う。

「…俺達ホール組は今から客寄せをしてくる…お前らキッチン組は最高のフードを用意して待ってろ…」

「いや…今更最高って言われてもな～…大量に仕入れた激安のもの

しか無いし。」

「それを最高にするのが料理人ってもんだろ！いいから後は任せたぞ！」

「お～い。俺は料理人でもなんでもないぞ～…行っちまった…」

俺の反論も聞かず、梅原は何人か連れてサッサと呼び込みに行ってしまった。

「…まぁいいか…お～い！今梅原が客の呼び込みしてるから仕込みだけはキッチリしとこうぜ～！」

正直梅原がそんな連れてこれるとは思わないが、とりあえず準備だけはしておこうとキッチン組のクラスメートに指示しておいた。

と同時に初のお客さんが入ってきた。

あれ？意外に効果あんのかな？なんて思っていると更にお客さんが入ってくる。

「やべっ！準備急ごう！」

そういってキッチン組はホール組から受け取ったオーダーを迅速かつ丁寧に作り始めた。

急激に忙しくなった気がする…なんて溜め息一つ吐いている間にもまたもやお客さんがやってきた。

梅原何やってんだ…

「調子はどうだ！？」

１２時に差し掛かったところで、梅原ら呼び込み組が帰ってきた。

「ん～まぁまぁかな。」

俺はオーダーの焼きそばを作りながら答える。

そろそろいいかな…

「…意外と入ってないんだな…」

梅原はキッチンとホールを隔てるカーテン越しにホールを覗き込みながら呟く。

「最初は調子良かったんだけど、そっから尻すぼみ。っと焼きそば出来た。」

俺はホール組の女子に焼きそばを渡しながら梅原に答えた。

「くっ…Ｂ組は未だ大行列か…」

そう、Ｂ組は朝から衰えることを知らないかのように大行列が続いていた。

「まぁもう逆転は無理だろ。ほら梅原も午後は休憩なんだから諦めて文化祭楽しんでこい。」

「あれ？大将はどうするんだ？たしか大将も午後休みだろ？」

「いや、午後担当のマサとケンに休憩譲ってくれ！ってめっちゃ真剣に頼まれたから午後はホール組に入る。」

売り物の紅茶を少し掻払いながら言う。

…やっぱりそんな美味くないな…

「…そんな大将置いて休憩行けねぇよ。俺もホール組に入るわ。結局午前中、ホールの仕事しなかったしな。」

梅原は午前中手伝えなかったことに少し罪悪感を感じていたようだ。

「いや、大丈夫だって。それより梅原はサクラやってくれよ。」

「サクラ？」

「そう。いろんな所でうちのクラスの良い評判を広めまくってくれ。それなら休憩しながら呼び込みにもなるだろ？ホール組だって客が来なきゃ休憩みたいなもんだし。」

うん、我ながら上手く丸め込めた気がする。

梅原はすんなりと純一達を連れて休憩に入った。

「じゃあ俺もホールに入るから後頑張って。」
俺もキッチン組にそう告げてからウェイター姿へと着替えてホールへと向かった。

「ヤッホー！遊びに来たよ～！」
隣のクラスの大盛況とは打って変わって、午後も暇な俺達のクラスに元気な声と共にお客さんが入ってきた。
「あぁ、いらっしゃいませ。はるか先輩と塚原先輩、それに七咲と美也ちゃんと…」
「タッツー！この子は紗江ちゃんだよ！」
「そうなんだ。いらっしゃいませ、紗江ちゃん。」
一時過ぎたところでやってきたのはよく知った面々＋αだった。
ていうかこの面子って面識あったんだ…
「あの…えっと……」
俺が挨拶した後、紗江ちゃんはなにやらもじもじしている。

「とりあえず席にご案内します。こちらどうぞ。」
ちゃんのことは気になったが、いつまでも入り口の前で立たせておく訳にもいかないので教室の奥の方の六人席へと案内する。
お客さんそれぞれが気のままに座る。
「じゃあ注文がお決まりしだいお呼びください。失礼します。」
とウェイターっぽく席から離れようとしたが、
「え～…巽く～ん！少しお話ししようよ～！」
はるか先輩に呼び止められた。
なんかクラス中から視線を感じる…てか七咲まで睨んでやがる！
「うーん…まぁ暇なんで大丈夫だとは思いますけど…」
「じゃあ決まりね！座って座って～！」
「いや、流石にそれは…」
無理やり腕を引っ張ってくるはるか先輩を制して立ったまま話に参加した。
俺は紗江ちゃんに自己紹介をしたものの、紗英ちゃんはまたもじもじして数分使って漸く名前を言ってくれた。
もじもじしながら言う姿が森島先輩に気に入られたらしく、可愛い～！と言われながら抱きつかれていた。

紗江ちゃん顔真っ赤〜！と美也ちゃんが冷やかすと更に顔を赤くしていた。

そんな和やかな雰囲気の中会話が進んでいると、

「そういえばお客さん全然いませんね。」

と七咲に言われるほどお客さんがいなくなってしまった。

「隣のクラスにお客取られちゃってな。朝からずっとこんな感じだ。梅原が客寄せしてくれたりしたけどまぁ大して効果なく…」

「そうだったんですか。確かに隣のクラスは凄い人混みでしたね。先程横を通るだけでも大変でしたから。」

「だから梨穂ちゃんのクラス行けなくて〜…ざ〜んね〜ん…」

「ハハハッ！じゃあウチのクラスは暇だからゆっくりしてってくれよ。」

「うーん…確かに人いないね〜。…じゃあ私がウェイトレスやってもいい？」

「はい？」

「なんか見てたらやってみたくなっちゃった！今暇だしいいでしょ？」

「…まぁいいと思いますけど…」

「じゃあ決まりね！お～い！制服貸してくれない？」

…なんか嵐の予感がする…

「ちょっとそろそろ俺も仕事に戻ります。じゃあゆっくりしてってください。」

俺は入り口付近へと戻る。

ちょうど良いところに梅原達がクラスの様子を見に来てくれた。

…さぁ嵐の幕開けは近い…

「いらっしゃいませ～！こちらの席へどうぞ～！」

「はい。紅茶とアイスコーヒー二つ…あとクッキー一点で。はい、ありがとうございます。」

「うわ～…やっぱ忙しくなった…」

はるか先輩がウェイトレス姿になってから急激に客足が伸びた。

学園のアイドルとして呼び声高い（らしい）はるか先輩がウェイトレスをやっているのだ。

男子学生なら誰しも一度は見てみたいだろう。

俺ははるか先輩がウェイトレスをすることを梅原達に広めてもらった。

そのところ、男子学生殺到→行列できる→行列見て並ぶ人達が来る、といった流れで今ではB組よりも明らかに人の流れがある。

「先輩。ぼーっとしてないで働いてください。」

突然の混み具合に圧倒されている俺に七咲が横から注意する。

七咲も混み始めると自分も手伝う、とキッチンからエプロンを借りてきてホールの手伝いをしてくれた。

「あぁ…悪い。急に忙しくなったんで、ちょっと呆けちまった。」

「確かに森島先輩がウェイトレスしてから急に混み始めましたからね。」

「そうだな。はるか先輩の人気の高さを思い知ったよ。」

そういうと七咲は不機嫌な顔になる。

「ん？どうした？」

「…先輩はいつから森島先輩のことを名前で呼ぶようになったんですか？」

「あぁ、それは「コラー！そこサボらない！」はい！すみません！この話は後でな。」

すみません！と言いつつ仕事に戻る。

奥の席では美也ちゃんや塚原先輩がこちらを見て笑っている。

そこのテーブルには現在クッキーやら紅茶やらが大量に置かれている。

大繁盛のお礼に、と綾辻さんがサービスで出してくれた。

確かに関係ない先輩や七咲に働かせて自分が働かない訳にはいかない、と自分に言い聞かせ急ピッチで体を動かす。

この大繁盛は文化祭が終了するまで続いた。

「先輩、七咲、今日はありがとうございました。お礼と言っちゃなんですけど、これ持って行ってください。」

文化祭も終わりを迎え後は片付け、といったところで手伝って貰った二人にケーキやら紅茶のパックやら売れのこ…バイト代を渡す。

「あ～ありがとう！私も楽しかったわ！」

「それなら良かったです。」

「それじゃあ私は先に帰るね～！行こっ！ひびき！」

「それじゃあね。巽君に七咲。それと美也ちゃんと中田さん。」

そういって先輩二人は一足先に帰っていった。

「みゃー達もクラスの片付けしないと！行こっ！紗江ちゃん！逢ちゃん！」

「あっ…うん。えっと…失礼します。」

「先輩、今日は先輩と働けて楽しかったです。あとさっきの話はまた今度お願いします。では失礼します。」

「おう。今日はありがとな。じゃあな。」

そうして後輩三人も帰っていった。

さて、俺も片付けするか～なんて身体を伸ばしながら振り返ると、後ろにはなぜかクラス中の男子が集まっている。

「巽君。覚悟は出来ているかい？僕は出来てる。」

「はい！？…えっと…出来てないって言ったら許してくれ「ダメ。」…ないですか…」

先日もそうだが、俺はなんでこんな理不尽を受けなければいけないんだろうな～、という考えが今日の最後の記憶となった。

22話（後書き）

ヒロインの名前間違えてた！

マジですいませんでした！

23話（前書き）

バイト編

23話

十月に入るとこれまでの暑さが嘘のようにさっと引いていった。

文化祭までは夏服で登校する生徒も大勢いたが、今では殆どの生徒がガッチリ着込んで登校している。

また寒くなるとどうしても温かいものが恋しくなる訳で、常に温かいものが食べれる食堂の人気はさらに上がる。

そうなれば足りなくなる物といえば食事を採るスペースな訳で、またそれが今現在俺達が苦労していることだった。

「どうすっか…」

「誰か知っている人がいればいいんだけど…」

中も外も席は埋まっていて、俺達は湯気の立つ昼飯を持ったまま佇んでいた。

「あっ！あれ梨穂子じゃない？」

「あぁ、隣にいるのは伊藤さんかな。席二人分空いているみたいだし、ちょっと頼んでみるか。」

そういって俺達はテラスの端っこの四人掛けテーブルに座った梨穂子達に近付いていく。

「あっ、桜井。あんたの旦那達がこっち来てるよ。」

「えっ？なんだ～純一とリョーか～。別に旦那じゃないですよ～。」
なにやら二人して横に並んで熱心に見ていた雑誌から頭を上げ、こちらに気付いてくれた。
「いや、旦那が二人いたらマズいだろ。それよりここ座っても良いか？どこも空いてなくて。」
すでに昼飯をテーブルに置きつつ、俺は梨穂子達に許可を取った。
「うん。いいよ。この頃凄い混んでるもんね～。」
「確かに凄いね。それより梨穂子達は何見てたの？」
梨穂子達は俺達が来る前から、食事そっちのけで見ていた。
「あぁ、これはバイトの情報誌。何かいいのないかな～って二人で探してたところなの。」
「へぇ～。伊藤さんバイト始めるんだ。どんなバイトやろうとしてるの？」
純一が丼に入った温泉卵を割りながら伊藤さんに訊ねた。
「とりあえず力仕事じゃない奴にしようとはしてるんだけど～。あとは決めてないんだよね。」
「…梨穂子もバイトするのか？」

どうやら二人してバイトを始めようとしているらしいのだが、確認を込めて梨穂子に聞いてみる。

「うん！出来れば香苗ちゃんと一緒にしようと思ってるんですよ～！」

ニッコリ満点の笑顔を見せながら俺達に言ってきた。

それに対して俺達の表情は暗い。

「…伊藤さん…バイト探すの大変そうだね。」

「あはは～…桜井にも出来そうなのだからね～。」

「それだけでかなり選択肢が狭まるな…」

俺、純一、は伊藤さんの心中を察して少し可哀想に思ってしまった。

ただ当の本人は頭にハテナを浮かべていたが…

「御馳走様でしたっと。それで何のバイトするか決まったの？」

食事を終え、その間にずっと情報誌を見ていた二人に聞いてみた。

「うーん…何個か候補はあるんだけど…決まってはないかな。」

「さっきからこれが良い！って何個も言っているのに、香苗ちゃんがダメ、って言うんだもん。」

も～！とまるで伊藤さんがワガママしているみたいに言う梨穂子。

「梨穂子がやりたいバイトって？」

「えーっとね、ウェイトレスとかホールの仕事！」

「それは伊藤さんが正しいな。」

自分の性質（ドジ）を考えてないんだろうな…

梨穂子がえ～！と不服を言いたそうなのを伊藤さんは苦笑いで見ている。

純一は純一で、梨穂子のウェイトレスか…なんてお得意の妄想を繰り広げているし…

「梨穂子は愛想は良いんだけど、接客業は合わないだろうし…飲食店ならキッチンやればいいんじゃないか？」

「それだと混んだとき大変そうじゃない？」

「…確かに…」

主に梨穂子のドジが。

「じゃあ交通量の調査とかはないの？」

とここで妄想の世界から帰ってきた純一が一つ提案する。

「交通量？それなら短期のバイトのところに…あぁ、あったあった。」

どれどれ…と雑誌を覗き込む面々。

うん、高校生ＯＫで複数人同時募集中か。

「これいいんじゃないか？短期だけど、一回が長いからまぁまぁの金になるだろうし。」

「うん。これなら私達にも出来るし。」

「香苗ちゃんと一緒に出来るかもしれないしね。」

二人とも満足そうに頷いている。

「じゃあ今日電話してみよっか。」

「さんせ～！二人で受かるといいね～！」

なんて会話があの後続いたが、後日話を聞いてみると二人とも無事に受かったそうだ。

純一もよく思い付いたな、なんて思ってたら

「いや～、深夜見てたアニメで交通量のバイトしてるシーンがあったから…」

なんて言っていた。
…まぁ役に立ったからいいか。

「お～い、梨穂子。」
俺は休み時間ロッカーに教科書を取りに行くと、たまたま隣のクラスの前で梨穂子を見かけたので話しかけた。
「リョー、どしたの？」
俺の声に気付いてテクテクと近付いてくる。
「いや、バイトどうだったのか聞きたくてな。」
「えっとね～…バイト初めてだったけど凄く面白かったよ！」
「面白かった？そりゃ良かったな。」
「うん。香苗ちゃんといっぱい話せたし、カッコいいスポーツカーも見れたし！」
「…」

「それに夢中になって、ボタン押し忘れたりしちゃったんだけどね。」

てへへ～と照れくさそうに頭を掻きながら梨穂子は話す。

「…梨穂子さん？」

「ん？なに～？」

「僕はバイトの話を聞いたと思うんですけど…」

「あははっ！リョーに僕って似合わな～い！」

「突っ込む所そこじゃないから！」

ついついビシッと突っ込みを入れたくなるのは梨穂子の持ち味（ボケ体質）だろう。

「へっ？じゃあなに？」

「…俺は仕事の内容が聞きたいわけで…」

梨穂子に回りくどいこと言った自分に反省しつつ、俺は溜め息混じりに質問し直した。

「はいはい。それはですね～…カチカチしてたよ？」

「抽象的すぎるわ！てか自分で言いながら頭傾げるな！」

ついついビシッと突っ込みを…（以下略）

「う～ん…じゃあ車の数をカチカチスイッチで数えてた！」
「…はい…分かりました…」
もう元気も出ねーよ…
「そういえばなんで急にバイト始めようとしたんだ？何か欲しいものでもあるのか？」
根本的な事を聞くの忘れてたな～。
「うん！買いたい物は決まってないけど、お金使う予定があるの～！」
「はい？使う予定あるのに買いたい物は決まってないのか？」
「そうなんですよ～。」
使う予定がある…ということは日付が関係しているんだろ。
そして梨穂子が考えそうな事か…なるほどな。
「はいはい、そういうことか。まぁ気合い入れて頑張んなよ。」
「やっぱりリョーには分かっちゃうか。」
「まぁ付き合い長いしな～。面白い結果期待してるからな。」
「任せてください！ドンと来い！ですよ～！」

胸を軽く叩きながら自慢気に話す梨穂子。

「それじゃもう授業始まるから行くわ。バイト頑張れよ。」

じゃ～ね～！と手を振って自分の教室に戻る梨穂子を見送って、俺も教室へと入っていった。

そういえば純一の誕生日って十二月だもんな…。

今からバイト始めればかなり良い物を買えるだろう。

よし！俺も今のうちから貯めときますか！

「お～い！リョー！」

俺は突然の呼び声に反応して、そちらを向く。

「よっ。どうした梨穂子？」

俺は片手を上げつつ、こちらへ向かってくる梨穂子を迎える。

「梨穂ちゃん。どうしたの？」

その流れで美也ちゃんも梨穂子に用を聞く。
今日も食堂の席を確保できなかった俺達二人は、今回は後輩三人組、美也ちゃん、七咲、中田さんのテーブルに相席させてもらった。
主に嫌がる（フリだと信じたい）美也ちゃんに頼み込んで。
「えへへ～…はい！お誕生日おめでとう！」
「へっ？」
突然梨穂子が渡してきた小切手の入ってそうな横長の封筒を受け取るも、俺は最初何のことかさっぱり分からなかった。
「あれ？確かリョーの誕生日今日だったよね？十一月二十二日。」
少し不安げな表情を見せながら聞いてくる梨穂子。
また自分の勘違いスキルが発揮されたのかとでも思ったのだろう。
「あっ…いや、確かに今日俺の誕生日…だな。」
こんな風に動揺してしまったのは、別に自分の誕生日を忘れていたからだけではなく…
「よかった～！また間違えちゃったのかと思ったよ～！」
「梨穂ちゃん、前も間違えてたもんね～！にししし～！」
「巽先輩。お誕生日なら言ってくれれば良かったのに…」

「巽先輩…おめでとうございます…」

七咲は少し怒りつつ、中多さんは恥ずかしがりつつ誕生日を祝ってくれた。

「まぁ特に言うことでもないかな、って思ったからな。悪かった七咲、それとありがとう中多さん。それと…梨穂子、ちょっといいか？」

俺は食事も途中に梨穂子を引っ張りながら少しテーブルから離れる。

「なぁ…これ何かは分からないけどバイト代使っちゃって大丈夫なのか？」

周りに聞かれないように小さな声で話す。

梨穂子もそれに合わせて話してくれた。

「へっ？どうして？」

「いや、純一の誕生日のために先月からバイト始めたんだろ？」

「えっ！？違うよ～！リョーと純一の誕生日プレゼント二つのためだよ！まぁ他にも買いたい物があるけど…」

「あ…ありがとな。なんか気を使わせちまってわりぃ。」

「いえいえ～いつもお世話になってますから～！それより早く開けてみてよ！」

早く早く！と早速プレゼントを見てほしいと催促してくる。

「あぁ…それじゃ開けさせてもらいますわ。」

俺は破かないよう丁寧にノリのついた部分を剥がし、中の物を取り出す。

「ん？これって…『ボク』のチケットじゃねーか！しかもSチケットかよ！」

梨穂子のプレゼントとは、俺が敬愛してやまない音楽グループ『ボク』の最前列のライブチケットだった。

「ちょっ…こんな高価でレア物のチケット受け取れねーよ！ファンなら誰もが欲しがるぞ！」

「それでもリョー嬉しいでしょ？だったらリョーに使ってほしいな。」

返そうとするチケットを持った俺の手を突き返し言う。

「せっかくるっこ先輩…あっ、るっこ先輩って茶道部の先輩なんだけど、先輩に頼んで取ってもらったんだし…だから使って！」

「梨穂子…それじゃありがたく頂くわ。すげー嬉しい。」

俺はチケットをしっかり握り直し、梨穂子に感謝の言葉を述べた。

「ん…これ二枚あるじゃん。」

握り直した所で、俺はチケットが二枚あることに気付く。

「あ～それはね。るっこ先輩が「こういうのは二人分取っておくものなんだ！」…って熱弁されちゃって…」

るっこ先輩の物真似？をしながら説明する。

正直るっこ先輩が正確キツそうだってことしか分からなかったが…。

「じゃあ……。」

「お待たせ。…ってどうした純一？なんか落ち込んでるけど。」

「お兄ちゃん、タッツーの誕生日忘れてたらしくて、逢ちゃんに怒られちゃったのだ～。」

「別に怒ってませんよ。」

「いや…顔がめっちゃ…いや、なんでもない！それより純一！別に誕生日忘れたくらい気にすんな！たかが誕生日じゃねーか！」

七咲に触れるべからず。

「怜…いや、それじゃ僕の気が済まない！怜明日バイト無いよね！

明日怜の家でパーティーしよう！」

「へっ？別にいいっ「そうですね。そうしましょうか。」いや、俺のよて「わ～い！パーティーパーティー！」お～い俺の話しきい「あの～、私も行って大丈夫でしょうか？」…どうぞ、好きにしてください…」

そんな俺のセリフなんて聞いちゃいないのは分かっている。

なんせすでに七咲は料理のメニューについて純一と話しあっているからな。

この後、昼休みが終わるまで、主賓？の俺を無視したまま打ち合わせは続いた。

終わり五分くらいは梨穂子とライブ行くのをずっと羨ましがられただけな気もするが…

楽しみだな！

23話（後書き）

また名前間違えちまった…

２４話（前書き）

やっぱりこれはやっときたかった…

24話

「…それでさ〜！その時の流し目がたまんなくゾクッとさせるんだよね〜！」

「純一…教室でわざわざ自分の性癖語るなよ…」

今日も朝から純一はいつもの純一だった。

誰かに話したくて仕方なかったのか、教室に入るとすぐに俺の席まで駆け寄ってきて、いきなり昨日のドラマのワンシーン（に出ていた女優）について熱弁してきた。

それが昼休みである今現在まで続いていた。

休み時間の度にその女優の演技を評論家のように話し、休み時間終わりには結局「とにかく綺麗で可愛いんだよ！」の一言で終わる、というサイクルをすでに四回も続けている。

「そういやその女優ってどんな外見なん？」

まぁ俺の家には純一の熱弁するドラマが映るテレビが無い。

そのため女優の名前を言われても姿形が全く分からない。

「そうだね…小柄で髪はショート…目つきはキッとしてるんだけどなんか優しさを感じさせるんだよ。それで…」

俺の質問に純一のテンションは更にエスカレートしてしまった。

…ミスったな〜……

結局昼休みが終わるまで続いた純一の話は尽きず、飯もまともに食べられなかった。

…別にいつもマトモなもん食べてないけどな！

「さて！そろそろ帰ろうかな！」

なんだか今日は凄く喋った気がする。

スッキリした気分を味わいながら下駄箱へと向かう。

今日一日中喋っていた怜は、ホームルームが終わるとすぐに帰ってしまった。

梅原も部活に行ってしまったため、今日は一人で帰ることにした。

靴に履き替えてさぁ帰ろ…う？

「あっ！そういえば…」

（まいったな、体育館シューズを置き忘れるなんて…見つかったからよかったもののこれからは気を付けよう。）

僕は五時間目の体育の授業で使ったシューズを体育館まで取りに戻った。

今日は部活が行われてないのか、体育館とその周りには人の姿がない。

ミャー…

そんな中聞こえた僕は、少し過敏に反応してしまった。

「あれ？猫だ……お前、どこから入ってきたんだ？」

ミャー…チリンリン…

「あ、おい！」

黒猫は僕の質問に答えず、サッと身を翻し校舎裏へと鈴の音を鳴らしながら逃げていった。

（何だかちょっと気になるなぁ…よし、追いかけてみるか。）

僕は黒猫に何か後ろ髪を引かれる思いを感じ、鈴の音を頼りに校舎裏へと走っていった。

（確かこの辺に…）

「あ、あれ？どこ行ったんだろう。」

（もしかして階段の下に隠れたのかな？それ以外に隠れる場所ないしな…ちょっと覗いてみようかな？）

僕は校舎裏にある部室棟に繋がる階段の下をチラッと覗く。

しかし猫の姿は見つからず、僕は意地になって猫を本気で探すことにした。

汚れる事も気にせず、四つん這いになりながら階段周辺を探す。

（…あれっ、いないぞ…おかしいなぁ…）

「あの…」

「えっ？」

急に上から声が聞こえたので首を上げる。

上から聞こえたのも当然で、階段の中心ほどにある小さな踊場に一人の女の子の姿があった。

「あっ…あぁっ！くっ、黒っ！？」

「何してるんですか、先輩？」

「な、七咲！何というか、決して階段の下から見ようとかそういう

事じゃなくて…」

「…まぁ先輩がそういうひとだってことは知ってましたけど…」

七咲は階段をゆっくり降りながら呆れている。

何だか足音がコツコツと嫌に響く。

「ち、違うってば！僕は猫を探してて…」

「猫…ですか。」

「そう！何だか気になる黒猫がいたから…」

「それで階段の下を探していた、と…」

階段を降りきって、こちらを冷ややかな目で見下されている。

…何かゾクッとするな…

「…あの、先輩…いつまでその格好してるんですか？」

見下されるのも当然で、僕は今までの会話をずっと四つん這いの状態でしていた。

恥ずかしさが急にこみ上げてきて、僕は急いで立ち上がる。

恥ずかしさを紛らわすように、制服の膝付近に付いた汚れをパッパッと払う。

「ふふっ…てっきり先輩が罪を認めて謝ってるのかと思いました。」
確かに端から見たら、女の子に土下座する男に見えただろう。
「い、いや！そんなことないからね！」
「じゃあ何が黒かったんですか？」
「それは七咲の…じゃなくて…」
「何が違うんですか？」
「だ、だから…階段の下から覗こうとしたんじゃなくて…」
頭の中がパニックで何て言っていいか分からない。
「…」
しどろもどろの回答では七咲も許してはくれないのか、睨むように僕を見てくる。
「な、七咲、信じてくれよ」
「…はぁ…仕方ないですね」
僕の願いが通じたのか、七咲の表情が和らいでいく。
「よ、良かった…信じて…？」
許してもらった…と安堵した所で、急に七咲が少し間合いを詰めた。

「ふふっ、先輩。」

「えっ？」

「えいっ！」

掛け声と共に、七咲は自分のスカートを捲り上げた

「うわぁっ！く、黒っ！？」

僕は七咲の…から目を逸らそうと、急いで顔を上げる。

ついチラッと見えた七咲の…の色を口走ってしまった。

「先輩。それで何が黒かったんですか？」

「な、七咲…これはどういう…」

「橘先輩…覗くよりもこっちの方がよく見えますよ。」

声色で僕をからかっているのは分かるのだが…

「い、いやっ、でも…それはっ！」

（そ、そんな事言われても、女の子の下着を間近で見るなんて…で、でも…こんなチャンスは二度とないかもしれないし…み、見るべきか…見ないべきか！僕は一体どうすれば！？）

頭の中は更にパニックになっていく。

「あの…先輩？冗談じゃなくよく見て下さい…」

（いや、それは…でも…こ、後輩の頼みを聞くのは先輩として当然だよな…よし！よく見てみよう！）

僕は意を決して、視線を下げていく。

「うっ…」

（こ、こうして自分でめくっているのを見ると、何だかいやらしく…あれ？）

「え…あっ！み、水着なのか！？」

「やっと気付きましたか…」

七咲はスカートをめくったまま溜め息を吐く。

「あっ！確か七咲の部活って…」

「はい。水泳部です。」

七咲がパッと手を離し、スカートの裾は重力に引かれて元の位置に戻っていった。

「あっ…」

七咲の水着に釘付けだった僕は、見えなくなっていく絶景に声を漏らしてしまった。

「ふふっ…先輩、何で口惜しそうな声出してるんですか？」

「えっ…いや！別に何でもないよ！」

「ふふっ…先輩。」

「な、何？」

「先輩の釘付けになってるときの顔、結構かわいかったですよ。」

「えっ！」

「それじゃ私はこれで失礼します。先輩もそんな所で覗きしてないで、早く帰った方が良いと思いますよ。」

そういって七咲は校舎の中に入っていった。

校舎裏に静けさが戻る。

「…だから覗きじゃないって…」

すでにいない七咲に向かって小さく反論する。

（でも突然どうしたんだろう…）

「…まさか黒猫を追いかけてたら、水着にたどり着くとは…」

僕は立ち尽くしながらも、先程の光景を反芻する。

（…何だか水着なのに凄くいやらしかったな…それに七咲の太もも…柔らかそうだったな～！…頼めばまた見せてくれるかな…あ～！この思いを誰かに伝えたい！）

それから僕は何度も脳内再生、巻き戻しを繰り返した後、今度こそ下校しようと校門を目指し歩き始めた。

「でっ。なんでお前は俺んちに来てんだよ。」

「いや～！どうしても誰かに伝えたいことがあって～！」

日も落ち始めた時間、俺は今日のすり減らされた神経を癒すため、音楽を聞いてリラックスしていた時に、ドアをノックするような音が聞こえて玄関のドアを開けてみると、そこにはいまだ制服姿の純一がいた。

イヤホンをしながらも聞こえるほどの勢いで、ドアをガンガン叩いていたみたいだ。

「…あんだけ語ったのにまだ語り尽くして無いのかよ…」

「それはそれ！これはこれだよ！とにかく上がるからね！」

そう言うと純一は了承も受けず、靴を脱ぎ始める。

「はぁ…まぁいいけど…」

純一の意味不明な行動もいつものことなので、俺は普段通り家に上げた…後にこれがミスだったことに気付く。

「それでどうしたんだよ。学校での話題とは違うみたいだが…」

「そうなんだよ！よく分かったね！さすが怜！」

「いや…純一に誉められてもな…」

「それでね！実は僕…気付いちゃったんだよ…」

俺の話なんかしったこっちゃないといった感じで、純一は自分の話を続ける。

「何か嫌な予感しかしねーけど…何だ？」

「それはね…制服と水着の組み合わせは究極だということだよ！」

…はっ？

「それと…女の子の太ももは至高だということもね！怜もそう思わないかい？」

「…俺はまずお前と同じ人間だと思いたくないわ…」

「えっ？なんでかってそれはねっ！まず水着を着ていることで「いや、聞いてないから！」、また水着を着ている安心感からか、スカートに対する警戒心が薄れるんだよ！「…いや、俺の話を…」されていないありのままの姿を見ることが出来るんだよ！またその時に見える太もも「…とりあえず聞いてやるか…」だよ！それでいて…」

こうして俺は純一の妄想トークに付き合った…っていっても、純一の一人舞台で、俺はひたすら聞き役に徹していただけだが…。

この話は三時間ほど続き、俺が解放されるころにはすでに9時近くになっていた。

その間ずっと制服、水着、太ももの話題だけで話し尽くせるのは、純一以外いないんじゃないか、と思えるほど話は尽きなかった。

純一の腹が鳴らなかったら、寝ないで明日の朝日を拝んでいたかもしれない。

ていうか結局何だったんだろうな…。

なんで急にそんなこと思ったのか聞いても、

「それは…とても僕の口からは言えないよ！」

なんてなんか恥ずかしがってた。

三種の神器（制服、水着、太もも）の話を大層大袈裟にしていた奴が何を言っているんだ。

とにかく今日は疲れた…朝から晩まで、純一の凡人には理解できない高次元（低次元）の話をずっと聞いていたのだから当然だろう。

明日はバイトだから徹夜で音楽聞けないしな～…なんて考えつつも、俺は擦り切れたんじゃないかと思われる心を癒すため、音楽の世界に入り込んでいった。

25話（前書き）

これもやっときたかった…

25話

チャイムが鳴ってからすでに十分が経過している。

きっとB組の奴らは、未だ終わらない担任の連絡事項に嫌気がさしているだろう。

そんな中、俺はB組の前の廊下の壁に寄りかかっている。

B組とは対照的に、A組はチャイムが鳴ると同時にSHRを終えていた。

壁に寄りかかること十五分で、ようやくB組のドアが開く。

出てくる生徒が、心無しかイライラした表情を見せているのは、気のせいではないだろう。

そんな考えを浮かべていると、出てくる生徒の流れの中に、目的の人物を見つけた。

「梨穂子〜。ちょっといいか？」

「へっ？あ〜リョー。どうしたの？」

梨穂子は近くにいたクラスメートに別れを告げて、こちらに近付いてきた。

「昨日貸した数学の教科書、明日までの宿題出てっから取りに来たんだよ。」

いつものように?教科書を忘れて、純一に頼りに来た梨穂子に俺が貸したやつだ。

純一も数学の授業があるのに忘れてきていたためだ。

「あ〜!忘れてた!ごめんね!すぐ返すから!」

そういって鞄を床に置き、しゃがみ込んで中を探り始めた。

「まぁ梨穂子のことだからそんなことだろうとは思ってたよ。昨日は俺も用があったから取りに来れなかったけど、ん?…さては家か…」

ガサガサと鞄の中を探していた梨穂子が、こちらを見上げて苦笑いしている。

この光景も何度見たか…

「ごめん!机の上に置きっぱなしだった〜…」

「まぁ梨穂子だし気にしねーよ。梨穂子の家によって帰れば良いだけだし。」

「うん!じゃあ一緒に…って今日部活あったんだった!」

立ち上がり下駄箱に向かって歩こうとしたところ、踏み出した足をピタッと止めて言う。

「何時頃終わりそうなんだ?」

「う～ん…今度のお茶会の打ち合わせと来年度の事についての話し合いだから～…たぶん一時間くらいで終わると思うよ。」

探偵のように考え込むポーズをしてから答える。

これも梨穂子の癖の一つだ。

「一時間か…じゃあ図書館にいるから「じゃあリョーも来ればいいんだよ！」…打ち合わせなんだから部外者いない方がいいだろ。」

「大丈夫大丈夫！打ち合わせって言っても、お菓子食べながらやるようなものだから！」

「…それは部活としていいのか？…まぁそれならお邪魔するか。久しぶりに夕月先輩や飛羽先輩に逢いたくなったし。」

「うん。それじゃ行こっか。」

そういって梨穂子は俺の右手を掴んで、部室に向かって歩き出す。

急に手を握られドキッとしたが、先を行く梨穂子には顔は見えないため問題ないだろ。

（…たく、普段しないこと急にすんなよ。）

俺達はそのまま部室へと歩を進めた。
…もちろん入る前に手を離した。
「失礼しま～す。」
部室にはいつも通り夕月先輩と飛羽先輩が、コタツに入って何か話していた。
俺の挨拶で入ってきたのに気付いたらしく、こちらを振り返る姿が見える。。
「おう、梨穂っち。今日は愛人連れて来やがって。見せつけるね～！」
「相変わらずですね。夕月先輩。お久しぶりです。飛羽先輩。」
「…久しぶり。元気にしてたか？」
飛羽先輩も相変わらず変な間を作って、囁くように話す。
「まぁ茶道部に寄るくらいは元気ですよ。」
「おや、あんた言うようになったね。」
「…男子三日あわざるば刮目して見よ。」
「まぁただ梨穂子待つのに暇だから来ただけなんですけどね。」

「梨穂っちを？さては本当に愛人に！」

「違いますよ～。リョーに借りた教科書家に忘れちゃったんで、帰りに取りに寄ってもらうんです。」

「まぁそういうことなんで、俺のこと無視してミーティングでも何でもしてください。」

どうぞ、と手を出しながら、気にせずミーティングをしてくださいと促した。

「なんだそんなことかい。それじゃパッパと終わらせてやるか。それじゃ梨穂っち。ちょっとこっち来てくれ。」

は～い、と梨穂子が返事をしつつ、部室の隅の方に移動する。

どうやら俺に気遣って、コタツに入っているよう離れてくれたのだろう。

俺はそれが好意であることを信じ、畳に上がり先程夕月先輩が入っていた所からコタツの中へ足を入れた。

先程まで冷たい風に当てられていた足首にいきなり熱気に当てられたからか、ジーンと足全体が痺れるような感覚を覚えた。

俺は家から持ってきているペットボトル（校内の冷水器から入れた水が入っている）を一口飲み、ボーっと茶道部を眺める。

茶道部には勿論茶道の道具らしきものも置いてあるが、所々に将棋盤や百人一首など遊具も置いてある。

そんなんでいいのか…、と思いつつ正面を向く。

「…どうした？」

「いや…ミーティング参加しなくていいんですか？」

そして部活中だというのに、サボっている飛羽先輩と眼があった。

「…大丈夫…気にしなくていい…」

「はぁ、別に良いんならいいんですけど…」

シンッと急に周りが静まり返った気がする。

飛羽先輩と二人きりになっているわけだが、何を話して良いかわからず、つい無言になってしまった。

（き…気まずい…）

「えー、茶道部で将棋流行っているんですか？」

そんな訳で俺は出来るだけ場の空気を和ませようと、ありふれた質問を将棋盤を指差しつつ訊ねる。

「…梨穂っちとこの頃よくやっている。」

「へぇー、梨穂子将棋出来るんですか？」

「…筋はいい。」

「そうなんですか。」

…会話終了…

（やべー、また無言になっちまった…どうする！？どうする！？）

ちょっとパニック気味になった俺は、頭の中によぎった事をノータイムで言った。

「えー…３四歩。」

（俺いきなり何言ってんだ！飛羽先輩も何か驚いてるし…てか呆れてんのか！？）

脳内で恥ずかしさを噛み砕きつつ、俺は冷静な様を保とうとする。

「…７六歩。」

「へっ？」

「…どうした？…次はそちらだぞ？」

（…続けるんですか！？）

「えー…じゃあ４四歩。」

「６八飛。」

「４二王。」…

「おーし。こっちは終わったぞー…って何頭抱えてんだ？」

「すいません！今ちょっと話しかけないでください！…銀打ち…ダメだ…」

「ん？こいつ何してんだ、愛歌？」

「よし！じゃあ3一桂打ちで！」

「…2四桂打ち…」

「へっ？あっ！…ダメだ…負けました…」

俺は飛羽先輩に頭を下げて負けを認める。

「リョー、何してたの？」

ふと横にいる梨穂子を見ると、頭を傾げている。

先程質問した夕月先輩は、何が行われていたかすでに分かったようだ。

「…目隠し将棋。」

使いすぎた頭を抱え込んでコタツに突っ伏している俺に変わって、

飛羽先輩が質問に答えてくれた。

「目隠し将棋？」

「梨穂っち、目隠し将棋ってのはね。片方、もしくは両者が盤上を見ないで指す将棋のことだよ。見る限り…今回は二人とも目隠しでやったみたいだね。」

「えっ！そんなこと出来るんですか！」

「普通出来ないよ。愛歌は将棋強いから分かるが…あんたも将棋得意なのかい？」

話しぶりからして、俺に聞いているのだろう。

俺はむくりと体を起こし、質問に答える。

「将棋は昔よくやってましたけど…別に得意ってほどじゃないですよ。」

「…なかなかの指し手だった。」

「へぇー、愛歌に認められるなんて、なかなかいないぞ。」

「リョースゴいね！」

どうやら俺の発言は飛羽先輩の一言にかき消されたようだ。

「…是非また対局したい。…明日も来ないか？」

「おっ！あんた愛歌に気に入られたみたいだね！梨穂っち、愛人取られちゃうぞ～！」

「まぁ先輩綺麗ですし、気に入られたのなら光栄です。でも明日はバイトあるんで、ちょっと来れそうにないですね。」

「…そうか。」

俺の返事を聞いて、飛羽先輩の表情がほんの少し暗くなった気がする…って言っても普段から少し暗い雰囲気を持っているので、正しいかは分からない。

「おー、ついに愛歌にも春が来たのか！ちくしょー！羨ましいぞ！」

こっちはこっちで勝手に盛り上がってるし…

「じゃあまた暇な時に来ますんで。梨穂子の用事も終わったみたいなんで、今日は失礼します。」

「…分かった。…またな。」

「おー！まるで別れを惜しむカップルのような雰囲気があるな！」

「先輩も少しは飛羽先輩見習って、落ち着きを持った方がいいですよ。」

そろそろ面倒くさく感じてきたので、一言夕月先輩に嫌みっぽく言っておく。

「それじゃあ失礼します。行こうぜ、梨穂子。」

「あっ、うん。それじゃ私も失礼しま～す。」

後ろで夕月先輩が何か言っているようだが、耳を傾けず部室から出て行く。

この分だと次来た時も、夕月先輩は変わらないだろう。

「いや～飛羽先輩って将棋強いんだな～。完膚無きまでにやられちまったよ。」

俺達は並んで校門を出て、梨穂子の家に向かって歩いている。

もうすっかり葉が落ちた街路樹が並ぶ坂道をゆっくりと歩く。

まだ四時半過ぎなのに日が落ち掛けているのは、冬になった証拠だろう。

「…うん。」

寒いからだろうか、梨穂子は急に元気が無くなった気がする…いや、なくなっている。

「どうした、梨穂子。なんか元気ないぞ？」

「別にそんなこと…それより今日楽しかった？」
「ん？…まぁ楽しかったな。久々に将棋したし、飛羽先輩や夕月先輩と話せたのも楽しかった。」
意図が分からない梨穂子の質問にとりあえず答える。
「…そうなんだ…」
答えに不満なのか、梨穂子の表情は優れない。
「どうした？気分でも悪いのか？」
俺は立ち止まって、梨穂子の顔を覗き込んだ。
「うん…実は心配だったの…。」
「心配？」
「…リョーが離れていっちゃうんじゃないかと思って…」
「へっ？なんで？」
今の会話にそんな内容がどこにあっただろう。
俺は分からず、思わず聞き返してしまう。
「…リョーに好きな人が出来たら、私よりもその人のことを気にするでしょ。そんなこと考えちゃって…」

「…まぁそうかもしんないな。」

「でしょー！でもそれでリョーが離れていっちゃうのが寂しくて…」

梨穂子はしょんぼりと頭を下げて、体を縮こめる。

全身で不安を表現しているかのように体を震わせながら、梨穂子は下を向く。

その梨穂子があまりにも可愛くて…守りたくて、俺は梨穂子の頭にポンと手を乗せる。

そしてそのまま左右に手を動かした。

「へっ！？」

梨穂子は急に頭を撫でられ、戸惑いを見せているが、俺は構わず頭を撫で続ける。

「ちょ、ちょっと～。リョー止めてよ～。」

俺の撫で方が雑だからか、ヘアースタイルをグシャグシャと崩す俺の行為を止める…といっても手で払いのけたりしない。

「…梨穂子はかわいいなぁ…」

「えっ…」

俺は絞り出すように口にした。

その発言に梨穂子も顔を赤らめる。

「…俺はどんなに離れても梨穂子の味方だから。なんか辛いことがあったらいつでも頼ってくれよ。」

「リョー…うん！分かった！」

開花したひまわりのようにパッと笑顔になる。

「常に一緒にはいれないけど…その役は純一に譲ればいいしな。」

「う、うん！そうなればいいな～！」

そういって梨穂子は先へと歩き出す。

赤くなっている顔を見られないようにしているのだろうが、耳まで赤くなっているためすぐに分かった。

「あれ～？どうしてそんな赤くなっているんだ、梨穂子？」

「そ、そんなことないよ～！」

「じゃあこっち向けよ！」

少し考え込んでから、梨穂子はくるっと反転し、俺の方を向く。

「リョーが純一とおんなじこと言うからだよ～！」

「同じこと？」

「…梨穂子はかわいいなぁ…って…」

「えっ…」

「そのこと思い出しちゃったの…赤くなっちゃうよ…」

どうやら純一と同レベルのことをしたらしい…

純一と…

それから純一とのノロケ話を聞きながら、梨穂子の家へと歩いた。

なんだかやたら歩く距離が長く感じたのは、きっと気のせいだろう。

25話（後書き）

純一君がいつの間にか攻略を始めてます。

２６話（前書き）

ラブリーです

26話

「あっヒロ君！ちょうど良いところに！」

「へっ？あぁ、はるか先輩ですか。こんにちは。」

俺が昼休みの間、屋上で寒さを感じつつものんびりしていると、後ろからはるか先輩に声をかけられた。

「うんうん。いい挨拶ね。グーよ！」

「それはどうも。それよりヒロ君って止めてくれませんか。理由も恥ずかしいですし、呼ばれなれてないんで反応できませんよ。」

なんでも「ヒーロー君、略してヒロ君ね！」らしい。

まずヒーローから離れてほしい。

「呼び名を変えてほしいの？…それはちょうど良いかも…」

「何がちょうど良いんですか？」

「本当に君はヒーローだね！私が困ってるのが分かるレーダーでも付いてるのかしら？」

「いや、そんなもん付いてないですよ。それより何か用が有ったみたいですけど…」

「あ～そうだった！え～、こほん。ヒロ君！私の彼氏になってほし

いの！」

…はい？

「あれがあの森島先輩の相手か…」

「釣り合ってないな…なんであんな奴なんかに…」

はるか先輩の告白を受けた次の日、俺のクラスである２－Ａには、休み時間毎に大勢の野次馬が出来ていた。

野次馬達の目的の人物は、はるか先輩の彼氏、俺のことである。

約三年に渡り、全ての男子の告白を断ってきた学園のアイドルが急に付き合いだすほどの男なんだろう…と俺を品定めに来ているわけだ。

俺を見て言う奴らの感想は、誹謗中傷や自画自賛だった。

「いや～大将！大人気だね～！このっ！」

視線は廊下ばかりからではなく、教室中から注がれていた。

今現在、肘で肩を小突いてくる梅原みたいな奴ばかりなら助かるのだが、殆どの奴らが遠くからこちらを見てコソコソ話している。

「…胃がキリキリする…是非変わってほしいわ…」

俺は数多くの視線を浴びて、精神的に参ってしまい、朝からずっと机にへばりつくように突っ伏していた。

顔を上げる度に、周りが俺の評価を口にしているような気さえした。

「…確かにこれはな…森島先輩の影響力の強さを感じるな…」

「はぁ…はるか先輩に付き合うのも疲れるな…」

「まぁ三日もすれば収まるだろ。とにかく今は耐えるしかないな。」

「…で三日経ったわけだが、むしろエスカレートしてないか、梅原？」

「…そうだな…俺の考えが甘かったみたいだ。」

はるか先輩から告白を受けて三日目になるのだが、野次馬の数はむしろ初日より増えていた。

噂は学校中に広がり、今では後輩らしき生徒まで俺を見物しにくる。

（…たくっ、面倒くせ～。）

最近では、イタズラ紛いのことをしてくる奴らまで現れた。

靴の中に画鋲入れるなんて、本当にあるんだな…

「じゃあ俺はとりあえずどっか出るわ…。早く視線から解放されたい…」

「おう…俺も付いてくか？」

「いや、今日は一人でいるさ。」

「そうか…じゃあお前が安心して帰ってこれるよう、俺は教室にいるな。」

「サンキュ…じゃあな。」

そうして俺は弁当箱片手に教室から離れていく。

こちらをチラチラ見る視線は多数存在したが、流石に俺の後を付いて来るような奴らはいなかった。

重たい足取りで階段を一歩ずつ登る。

一つ上の三年生の階もそのまま通り過ぎ、更に上に位置する屋上を

目指す。

（普段ですら人の少ない屋上に、雨が降っている時に来る奴はいないだろう。）

俺が屋上のドアを開けると、案の定誰もいない屋上が広がっていた。

俺はドア付近の屋根がある小さなスペースに、地面が濡れてないことを確認してから腰を下ろす。

冬の雨の中、一人寂しく食事…心身ともに寒い状況だ。

それでも居心地の良さを感じつつ、弁当を食べ始めた。

久々に感じる学校での安心感を堪能していると、急遽屋上のドアが開く。

そこから顔を出したのは、こちらを沈んだ表情で見ている七咲だった。

「お…おぅ、七咲。こんな所に何のようだ？」

「…もちろん先輩に用が有ってきました。」

（そうじゃなきゃ屋上なんか来ないよな…）

「じゃあどうやって屋上にいるのが分かったんだ？」

「教室から出ていく先輩の後を追ったからです。」

自虐的な笑みを見せ、七咲はあっさりと答える。

「そっか。それで何か用か？」

七咲は俺の座っている場所から、間に屋上のドアを挟むように座る。

今気付いたが、七咲も小さな弁当箱を持っている。

「…先輩、いつから森島先輩とお付き合いしているんですか？」

「ん～、まぁ四日前から…かな。」

「…森島先輩から告白されたらしいですけど…」

「あ～、そうだな。マジでいきなりだったから、最初は何のこっちゃって感じだったな～。」

「…そうなんですか。」

「まぁはるか先輩モテるからしょうがない、って感じでＯＫしたけど、今では少し後悔してるかな。」

「なっ！…先輩は森島先輩がモテるから付き合ったと？」

「へっ？」

「先輩…見損ないました！森島先輩の気持ちを裏切るようなことしないでください！」

こちらに身を乗り出すように、俺に激昂してくる。

「いや、そうじゃなくて！えーっと…はぁ～…ミスったな～。七咲、ちょっと話聞いてくんない？」

「…何ですか？」

とりあえず七咲が落ち着いてくれたのは幸いだ。

「これは他言無用でお願いしたいんだけど、実は…」

「私今日ラブレター貰ったの。」

「いきなり自慢されても…」

「今月入ってから毎日の用に貰ってて、断るのだけでも凄く大変なのよ～…」

「それに関しては頑張って下さいとしか言えないですね。」

「それをひびきちゃんに相談したら、「彼氏の一人でも作ればいいじゃない」ってアドバイスを貰ったわ。」

「塚原先輩きっと呆れながら答えてたと思いますよ。」

「でも私誰かとお付き合いする、って気分になれなくて…」

「じゃあ諦めるしか…」

「そこで、君の登場ってわけよ！」

「はい？」

「今日の放課後、告白のお断りに行くんだけど、彼氏役として一緒に来てほしいの！」

「はい！？…」

「その後はたぶん聞いた通り。彼氏を演じて、噂を広めたって感じ。」

「そう…なんですか…」

「はるか先輩が受験生なのに集中出来ない、とか泣き言言ってきたから、断れなくてな。それにはるか先輩、相手に彼氏がいるから断るんじゃなく、自分の意志をキチンと伝えて断る、って言ったから手を貸しちゃったんだよな～。」

俺は甘いな、何て苦笑を浮かべつつ、七咲に同意を求める。

「そうですね。…では本当に森島先輩と付き合っている訳ではないんですね？」

「あぁ、ただこれは他言無用で頼むわ。とりあえず先輩が卒業するまでは。」

「…分かりました。」

七咲は真摯に俺の発言を受け取って、返してくれた。

けして破らぬよう、まるで胸に刻み込むように、自分の胸付近の服をギュッと握り締めている。

「ありがとな。七咲は本当に良い子だな。」

俺は一度立ち上がって、七咲に近付いて、頭を撫でる。

（七咲の髪ってサラサラしてて、つい撫でたくなるんだよな～。）

クシャクシャと頭を撫でると、七咲はどんどん顔を赤くしていき、俯いてしまった。

「それじゃせっかくだし一緒に飯食うか。」

そういって俺は先程まで座っていた位置に再び座る。

「あっ…はい。そうしましょうか。」

二人して食事の準備を始める。

やはり七咲の弁当は色鮮やかで、食欲をそそる物だった。

「先輩…。」

「んっ？何か言った？」

「あのですね…森島先輩が卒業なさったらなんですけど、よろしかったら…へっ！？」ガチャ

七咲がなにやら話そうとしている最中、急に屋上の扉が開く。

扉によって七咲の姿は見えなくなり、代わりに出てきたのははるか先輩だった。

「あぁ～、こんなとこいた！探したのよ、ダーリンっ！さぁ一緒にお昼食べましょ！」

「えっ！ちょっ！」

はるか先輩は俺の腕を掴んで、校舎の中に引きずり込む。

俺は突然の行動に、自分の弁当箱を掴むことしか出来なかった。

「ダーリン！今日はどこで食べましょうか？」

「いや、いつも食べてるみたいな言い方…いや、今日は食堂で良いんじゃないですか？」

否定を唱えようとすると、はるか先輩はこちらを咎めるような目で見てきたので、すぐさま彼氏モードに切り替わる。

「そうね！そう「森島先輩。巽先輩から手を離して下さい。」」

階段を降りている俺達の後ろから怒気を含んだ声で七咲がはるか先輩に言い放つ。

「あれ？逢ちゃんも屋上にいたの？こら～！浮気しちゃダメだぞ！」

そういって俺の腕に抱きついてくる。

「いや、これはですね「巽先輩から事情はお聞きしました。ですのでとりあえず離れて下さい！」って七咲！」

話しに割り込んだ七咲は、そのまま俺のもう片方の腕を引っ張り、はるか先輩から俺を引き離した。

そしてそのままはるか先輩を睨みつける。

「逢ちゃん…も～、言っちゃダメじゃない！ダーリン！」

「そんな大声でダーリンって呼ばないで下さい…流石に恥ずかしいです…」

「というよりダーリンって何ですか！巽先輩！」

「えっ？彼氏なんだからダーリンでしょ？」

「「違いますよ！」」

話が怒涛の勢いで進んでいく…てかいろんな方向に流れていく。

「逢ちゃん可哀想に…先輩のひびきの所為で、小言が増えちゃったのね。」

「塚原先輩は関係ないです。」
「じゃあなんでそんなにかまうの～？」
「それは！」
そこで七咲の勢いがピタッと止まる。
それをはるか先輩は見逃さず追撃した。
「それは？」
「その…」
先程までの嵐が嘘のように静けさを帯びていく。
そんな静けさを壊したのははるか先輩だった。
「…なるほどね。分かったわ。ヒロ君、今現在をもちまして、恋人ごっこはおしまいね。」
七咲の様子を見て、何か思い至ったようで、はるか先輩は急に納得したように頷き話す。
「はい？」
「それじゃ、私もう一回、前に告白してくれた人にちゃんと説明してくるわ！逢ちゃん、頑張ってね～！」

全く話について行けない俺を置いて、はるか先輩は階段を降りていった。

四階と屋上の間の階段には、今俺と七咲しかいない。

「…七咲、何か応援されたぞ？」

「し、知らないです！」

「そっか。まぁこれで彼氏役しなくてよくなったからいっか。」

俺は身体を伸ばす。

「そうですね。…それで「今んとこ誰とも付き合う気無いのに、彼氏役やんのは正直しんどかったしな。」…そうですか。」

やっぱり嘘は良くないよな！

「はぁ～、気が抜けたら腹減ったわ。さぁ！戻って飯食うか、七咲！」

「クスッ。えぇ、先輩のお弁当の横で、美味しく食べさせてもらいます。」

「別にいいですよ～！俺の弁当も上手いし、七咲のに入ってたエビチリ食いたいな～なんて思ってないし！」

「そうですか。せっかく先輩に食べてもらいたくて作ってきたんですけど…それなら仕方ないですね。自分で食べます。」

「すいませんっした！私にお恵み下さい！」

「クスッ。早くしないと休み時間終わっちゃいますよ。行きましょう。」

「あっ！待てよ、七咲！」

屋上へと先に駆け上がっていく七咲。

最初はあんなに落ち込んでいたのに、今ではすっかり元気になっている。

俺はそんな七咲を見ることができ、ホッと安心をしてから、屋上へと登っていった。

次の日から、俺の立場ははるか先輩の彼氏から、はるか先輩に遊ばれていた男に変わり、今は同情の目を感じている。

はるか先輩…なんて言ったんですか…

26話（後書き）

はぁ…また内容詰めすぎた…。

メール小説だと字数制限あって面倒なんですよね～。

まぁいいわけですけどね！

27話（前書き）

いきなり新キャラ出てます。

話について行けなかったらすいません。

27話

「おっ！今回は結構働いたなぁ！」

俺は先程渡された給料明細を見ながら、自分自身に感心する。

11月は夏休み程ではないが、何回か連チャンで入っていたため、明細には0が五つ並ぶほど働いていた。

「この分なら結構使っても大丈夫だな。」

俺は満足げに頷き、給料袋を鞄に突っ込む。

（今更現金手渡しって…）

毎回の様に思うことを、今回も例外なく思考しつつ、俺は帰宅した。

家にたどり着くと、バイトなどにより疲れた体に鞭打って部屋の掃除を始める。

普段なら行わない事だが、客が来るとなれば話は別だ。

あらかた片づけ終わり、一息吐こうかな～なんて思ったところでちょうど玄関のベルが鳴った。

時間は夕方五時半、日が沈みかけている時間に、俺が迎えた客とは

「お疲れ～、リョー！」

と明らかに家を訪ねた際に言う言葉ではない事を言う奴だった。

「おぅ、梨穂子。まぁとりあえず上がりな。」

「おじゃまし～す！」

先程までの努力により、小綺麗になった部屋へと案内する。

「エクレア持ってきたよ～。一緒に食べよ～。」

「おっ！ナイスタイミング！実はちょうどバイト先の休憩室にあった紅茶のパック持って帰って来たんだよ。せっかくだしティータイムと洒落込みますか。」

「グッドタイミングだね！私砂糖いっぱいね！」

「一杯な。オーケーオーケー。」

今日梨穂子が来たのはもちろん俺とティータイムしにきた訳ではない。

なので紅茶を入れてテーブルまで持って行くと、すぐさま目的の話を始める…事はなく、俺も梨穂子もエクレアの魅力に負け、食べ終わった後も梨穂子のオススメスイーツについて話し合ってしまった。

その間わずか四十八分。たった四十八分。誰がなんと言おうと四十八分しか経っていない。

「じゃあそろそろ話を戻すか。」

「そうだね。これ以上話してたら食べたくなっちゃうもんね。」

「梨穂子、よだれ。」

俺は近くに置いてあったティッシュを箱ごと梨穂子に渡す。

ティッシュを使い、慌てて口元を拭う。

「えー…それで純一の誕生日プレゼントの話だが、まだ決まってないんだろ？」

「うん。だからリョーに助言してもらいたくて…たはは～。」

「まぁそれはいいんだけど、俺もまだ決めてないからな～。」

「えっ！？そうなんだ～。それじゃあ一緒に考えますか～。」

「…何安心してんだよ。俺は決まらなかったらテキトーにお宝本渡しときゃ良いから慌ててないんだよ。だから何も決まってないのは梨穂子だけだぞ。」

仲間を見つけたかのように安心する梨穂子に、現状を教えてやる。

「そんな～ズルいよ～！」

「じゃあ梨穂子もお宝本プレゼントすれば？」

「それは～…やだ…。」

（まぁそりゃそうだろうな。）

わざわさ好きな奴に、夜のおかずを配る女子はいないだろう。

「じゃあ探すしかないだろ、純一の欲しいものを。」

「純一の欲しいものか～。」

梨穂子は取り出したシャーペンを顎につけ、天井を見上げる。

「純一のことをよく見ている梨穂子さん。なんか当てはないんですか？」

「う～ん…お宝本？」

「じゃあそれで「わ～！ごめんなさい！冗談ですよ～！」…それじゃほかにはなんかある？」

「う～ん…リョーは何か思い付く？」

どうやら梨穂子は手詰まりのようだ。

何か良い案を出してほしいと、期待の眼差しを向けてくる。

「そうだな…まぁいつも通り手作りケーキとかじゃ駄目なのか？」

何か祝い事があるたびに梨穂子が焼いているケーキ…これは純一がべた褒めした時から定番になった。

「駄目じゃないけど～…今年は頑張りたい、っていうか…来年は受験だからそういう事してる暇がないかもしれないし…。」

「へいへい、分かったからそんな顔を赤くしないでくれ。それじゃあ何か良いもの見つけないとな～。」

「リョー…ありが「そうだ！リボン結んだ梨穂子を渡して、プレゼントってことにすれば…」却下～！」

…

「はぁ～…決まんないな…」

「そうだね～…疲れちゃったよ～…」

話し合う？こと三十分、プレゼントは方向性すら決まることなく、未だ宙ぶらりんのままだった。

「何かヒントでもあればいいんだけどな～…。」

「純一の好きなものか～…。」

「からあげ、ラーメン、ゲーム…どれも渡しただけじゃ、気持ちを伝えるのは難しそうだしな～。」

「う～ん…。」

梨穂子はテーブルに肘を突きながら、持っているシャーペンで頭を

グリグリ掻いている。
俺は少し沈黙する時間が増えた現状を和らげようと、何か音楽を流そうとCDプレーヤーを弄っている。
（ずっとプレゼントのことばっか考えてんのに、何も浮かばね～…ちょっと話題変えて雰囲気変えるか。）
「そういえばさ。つい最近、久しぶりに姉さんが来たんだよな。」
「えっ！？由梨お姉ちゃん？」
「そうそう。何か近くに来たついでに寄ったらしいんだけど、めちゃくちゃ酔っ払ってて、俺の部屋を荒らすだけ荒らして帰っていったよ。」
「あははっ！お姉ちゃんらしいね～！」
「全然笑えね～よ…こっちは暴れてんの止めようとしただけで、ボディーに一発決められてんだから…。」
「一発KOだね～。」
「一ラウンドKO負けだよ。」
俺のため息と同時に、梨穂子はパッと笑う。
「あははっ！由梨お姉ちゃんか～…最近会ってないな～。」
「梨穂子は姉さんと仲良かったもんな。」

昔は俺が純一と、梨穂子が姉さんと遊ぶなんてことも多々見受けられた。

「そうだね～。小学生の頃から可愛がってもらってたし。」

「あぁ、たしか梨穂子んちで料理の修行してたんだよな。」

「そうそう～！お姉ちゃん全然料理出来なかったんだよね～！いきなりお母さんに、弟子にして下さい！って土下座してるのを見たときは驚いたよ～！」

姉さんのような鋭い口調を真似て話す。

「今の旦那との初デートで、手作り弁当作りたかったから練習したんだってさ。それを俺や母さんにからかわれるのが嫌で、梨穂子のおばさんに頼んだらしいぞ。」

「そうだったんだ～。私には、花嫁修業の一環、としか教えてくれなかったんだよ。」

「まぁ結果的には間違ってないからなぁ。」

「確かにそうだね～。…そういえば一昨年の事覚えてる？」

梨穂子も何か思い出したのか、俺に訊ねる。

「一昨年って…クリスマスの事か？」

「そうそう！クリスマスの日に純一がデートするって聞いたから、

リョーに泣きつきに行って…」

「それで泣きつかれている所を姉さんに見られて、何故か俺がボコボコにされたんだよな…梨穂ちゃんを泣かす奴は私がぶっ飛ばす！とか言って…。」

俺は話しているうちに、痛みが蘇ってきたかのように感じ、疼く右の頬を撫でる。

「あの時止めるのに必死で、私泣いてたのも忘れちゃってたもんね〜！そのおかげですぐに立ち直れたの！ありがとうね、リョー！」

「ただの殴られ損にならなくて良かった…ぐらいしか言えないわ…」

満面の笑みを浮かべる梨穂子に対して、俺は過去の暴力に身体を震わせていた。

つい最近殴られたことも影響してか、リアルな痛みを感じている気がする。

「そういえば…」

殴られた事を思い出すと、遅れて姉さんに言われたことを思い出した。

「どうしたの？」

「いや…そういえば姉さんが、自分の気持ちを正直に吐き出しなさい！…って言ってたの思い出してな。」

他にも、悠のバカやろー！、とも言っていたっけな…

「たぶん悠さんと喧嘩したんだと思うよ。それでイライラしたから飲んで、そのまま殴りに来たんだろうな～。」

「殴りには来てないと思うけど～…悠さんって優しそうな人だし、本音をため込んでたのかな～？」

梨穂子にしては鋭い発言だ。

「まぁそんなもんだろうな。…でも俺も耳が痛くなったっていうか…そういうのも必要なのかもな～って思ったんだよな。」

俺は基本的に溜め込んで溜め込んで、重さに耐えられなくなるタイプだと自分で思っている。

自分の事情より相手の事を優先する事を信条としている節もある。

…だから欲しいものすら手に入れられないのも分かっている。

「えっ！？リョー好きな人いるの？」

「なんで今の話からそういう流れになんだよ…まぁ確かに好きな奴はいたけどな。」

ぶっきらぼうに俺は答える。

俺の答えに梨穂子は驚きを隠せないようで、動揺しているのが目に取れた。

「え～！だれだれ～！？」

テーブルから身を乗り出しながら聞いてくるところを見ると、よっぽど知りたいのだろう。

「別に今はいねーよ。俺の片思いで終わったから。」

「え～！教えてよ～！リョーのそういう話聞いたこと無いんだも～ん！」

不公平だ～！と今にも暴れかねないほど、梨穂子は興奮している。

「じゃあ梨穂子が純一を好きになった切欠を教えてくれたら教えてやろうかな。」

「え～！…それはね。えっと～「いや、話さなくていいから。」」

危うく言いかねない梨穂子を、俺はすぐに止める。

理由なんざ何回も聞いてんだから、こっちとしてはおもしろくも何ともない。

…まぁそれよりも話したくない、ってのが本音だが…

「じゃあ教えてよ～！気～に～な～る～！」

「子供か！…んじゃあ純一と付き合えたら教えてやるよ。それなら少しはやる気出るだろ？」

「う～ん…それならやる気出るかも…よ～し！後で後悔しても知ら

ないからね～！」

「おっ、なんか自信有り気じゃん。なんか進展したみたいだな。」

途端に梨穂子の様子が変わる。

そして囁くような小さな声で、そっと話し始めた。

「…しちゃったんですよ。キス…。」

チューリップのように、顔を真っ赤にしながらも嬉しさを押し殺せないためか、梨穂子は純一との進展具合を、甘ったるさを感じるほどのトーンで話す。

「そ…それは自信も付くだろうな。」

咄嗟の返事が遅れてしまったが、まぁ無難な返答はできただろう。

「やっぱりそう思っちゃってもいいのかな！？」

「いいんじゃねーの。純一もそこまで女誑しじゃねーと思うし。」

「そうだよね～！あ～なんか心配し過ぎちゃってた！」

「ん？なんか心配事でも有ったのか？」

「ううん！もう大丈夫！あ～安心したらおなか減っちゃった！今日はそろそろ帰るね！」

「お…おう。送ってくか？」

「ううん、大丈夫！それじゃね、リョー！」

鞄を手に持ちそのまま立ち上がると、未だ座ったまま勢いに付いていけていない俺に、梨穂子は手を振りながら帰っていった。

梨穂子が帰ったことで、部屋が急に静かに、広く感じるのはいつものことだ。

また柔らかく温かな雰囲気まで、梨穂子が持って帰ってしまったかのように不思議と無くなってしまう。

「なんだか今夜は寒いな…。」

こんな日はとっとと飯食って、風呂に入って寝るべきだろう。

俺はいつもより簡単に食事を済ませ、シャワーだけぱっと浴びた。

逆に体が冷えた気もしたが、すぐさま布団に潜り込んだので風邪を引いたりはしないだろう。

（好きな奴はいた…か。）

布団にくるまった俺は、先程梨穂子に吐いた嘘を思い出す。

（今更自分の気持ちをぶつけたって、絶対良いこと無いのは分かってんだけどな…）

俺はもう一度深く、掛け布団を体に巻き付けるように引き寄せた。

別に寒気を感じたからではなく、ただ温かさを求めた行動だった。

（あぁ…やっぱり…俺梨穂子の事が好きで好きで仕方ないみたいだ…）

布団が伝える暖かさに、先程までの梨穂子の温かさを重ねようとする自分がいる。

瞼の奥で、梨穂子の子供のような笑顔を思い浮かべる自分がいる。

布団の柔らかな感触を梨穂子の少しぽっちゃりした体と考える自分がいる。

こんな変態チックな妄想をしつつも、考えるのを止めることができない自分がいる。

（今日くらいは許してくれるだろ？梨穂子…純一…）

俺は梨穂子に包まれながら、夢の世界へと落ちていった。

夢さえも梨穂子が出てくることを信じながら…

こうして何も変わらない朝を迎えた。

27話（後書き）

姉ちゃん登場！

まぁ殆ど出ないんでスルーで（笑）

２８話（前書き）

話はクリスマスに向けて進んでいきます。

28話

この頃は冬真っ盛りと言った所で、今日のように太陽が燦々と光を照らそうとも、連日のように吐く息は白くなった。

その為か、登下校中二人の幼なじみから今年の誕生日に貰ったマフラーと手袋が手放せない。

どちらもピンクを基調とした可愛らしいデザインであり、実用性にも優れている。

こんな良い物をくれた二人には、冬の間ずっと感謝しきりである。

いや…一人にはずっと感謝しきりだ。

そんな事を考えていると、前方に幼なじみの一人の姿が見えた。

あれ、今日は美也ちゃんを入れた三人で登校してないみたい…。

彼も私が中学生の頃渡したマフラーを首に巻き、肩をすくめながら手をポケットに突っ込んで歩いている。

本当は手編みのマフラーを渡そうかと思ったのだけれど、友達に、そういうのは重いらしいよ、とアドバイスを受けたため、デパートで真剣に吟味したものをプレゼントした。

そういえば何が重いのか聞いてなかった…何なんだろう？

そんな事を考えていると、彼との距離がさっきより少し開けてしま

った。

私は小走りをして、彼の背中を追う。

運動も苦手で朝も弱い私が、こんな時間に走ることは遅刻ギリギリまで寝ていた時くらいだが、今日はなんだか調子が良く、すいすいと前に進めている気がする。

これも前からあなたが前から引っ張ってくれているからかな…なんて不思議な事を考えるのもあなたのおかげなのかもしれない。

短いリズムの呼吸とともに、白い息が私の口から吐き出される。

たった少しの距離を走るだけなのに、額には汗が滲み始め、顔が紅潮していく。

私は昨日の夜から考えていたことを、ちょうど一人で歩いている彼に、今伝えてしまおうと考えた。

昨日の夜、普段から聞いているラジオで、クリスマス特集というありふれたコーナーを聞いていた時だ。

投稿されたクリスマスについてのはがきが、次々と紹介されていく。

プレゼントを貰ったとか、一夜を共にしたとか幸せ一杯の内容をパーソナリティが、表現力豊かに話してくれるのを聞いて、私も頭の中で彼とのクリスマスをつい妄想してしまった。

そんな幸せ一杯のはがきの中に、一通少し趣が違うものがあった。

『私は去年のクリスマス、好きな彼と過ごすことは出来ませんでした。彼は幼なじみなのですが、彼にはどうやら好きな子がいたようで、私がクリスマスデートに誘うことに躊躇っていた間に、その子と約束を取り付けてしまったことを、彼自身の口から聞きました。幸せ一杯に話す彼の表情を見て、とても後悔の念が溢れ出ました。それ以降彼と逢うことに躊躇いを覚え、今では殆ど逢うことは無くなってしまいました。…』

私はこれも想像できてしまった…それも先程までのはがきよりもはっきりと。

このはがきの彼女は、最後はこのクリスマスのおかげで、積極性を手に入れ、今では新しくよい出会いをしたと話していたが…私はそんなに強くなれるのか不安で仕方なかった。

…そして私は今日、彼をクリスマスデートに誘う決心をした。

彼との距離はあと少し。

もう声を掛ければ届くであろう距離だ。

私は肩で息をしながら、一度大きく息を吸い込み、彼の名前を吐き出した。

私には毎朝起きると同時にカーテンを開けて、天気を確認する癖がある。

カーテンを開ける前から窓を打つ音が聞こえていたので、予想は出来ていたのだが、今日の天気はバケツをひっくり返した様な雨だった。

雨が降っている事を確認すると、私は小さくガッツポーズをしてから居間へと向かう。

さっきまで眠っていた頭が嘘のように冴え渡り、すでにお弁当の中身を考え始めている。

勿論毎朝ガッツポーズを行っている訳ではなく、また雨が大好きだからした…という訳でもない。

理由はこんな雨の日に、私の大好きな先輩はお弁当を作ることが少ないからだ。

先輩にお弁当を作るようになってから、既に半年が過ぎている…といっても毎日作っているわけではなく、偶々作りすぎてしまった日にお弁当を勝手に持って行っているだけだ。

そのため、先輩がお弁当を持ってきている時もあるし、お昼の間に見つからなくて、結局一人で食べなければいけないときもあった。

そんな関係が続いて四ヶ月程だろうか、偶々作りすぎてしまった日が多くなった事をお母さんに冷やかされ始めた頃にそのことに気付いた。

勿論例外はあるのだが、話を聞いてみると、朝雨が降っているのを見ると、やる気がドッと抜けるらしい。

それから私は雨が降る度にお弁当を作るようになった。

先輩に私のお弁当を食べてもらいたく続けた結果、先輩に雨女だな！なんて言われたり、余ってしまったお弁当を部活前に食べるようにしたため、普段以上に部活に精を出さなければいけなくなったりしたが、私にとっては幸せな日々だったと胸を張って言える。

そうして今日もお弁当を2つ持って学校へと向かう。

ドアを開けると横殴りの雨と冷気が、私の体に吹き付ける。

私より後に出る郁夫の事が気にかかったが、日直の私に付き合わせるのも悪いだろう。

私はそのまま一人で歩き出した。

下駄箱に着くまでに靴下がグチャグチャに濡れてしまったが、全く気にならない。

何故なら…朝から先輩に逢うことが出来たから。

先輩も日直だったらしく、次第に弱まっていく雨足を見ながら、こういう時に雨が降るなんてお互いついてないな、なんて言っていた

ので、私はそうですね、と嘘を吐いた。

私はせっかくの二人っきりを利用しない手はないと計算し、先輩とお昼を一緒にする約束を取る。

予想通り先輩はお弁当を作ってなかったので、私のお弁当を食べてもらう口実も出来た…なんて運がいいんだろう。

先輩と別れ、自分の教室を目指している途中にふと考えが浮かんだ。

（この調子なら、金曜日の予定を…クリスマスの予定を先輩と埋めることができるかもしれない。）

想像しただけで、顔が赤くなっていくのが分かるくらい、私は先輩とクリスマスに一緒に過ごしたい、と感じている。

（予定入ってるとか…ありそうだな。先輩はモテないモテないと嘆いているけど、事実一人にはモテているし、もし他に誰もいなくてもバイトとか入れてそうだ。）

お昼まであと四時間、それまでに私は先輩に伝える想いを考えなければいけない。

先輩の心を鷲掴みに出来るような想いをぶつけなければならない。

（よし！頑張ろう！）

私は気合いを再度入れて、とりあえず日直の仕事をこなしていった。

…待っててください、先輩。

朝起きた時にはあんなに立ちこめていた曇り空も、昼休みになった頃には太陽が燦々と輝いていた。

僕は四時間目がチャイムがなるよりも少し早く終わったことで、お昼をパッと済ましたまでは良かったのだが、その後ポッカリ時間が空いてしまった。

怜や梅原もどこかに行っているようで、食堂から戻ってきた後、教室を見渡してから再び教室を出る。

こんな風に時間を持て余した時に向かうところといえば、決まって屋上だった。

いや、正確に言えば屋上から入れる僕だけの秘密基地だ。

怜や梅原でさえ知らない、僕のお宝本などが置かれた空き倉庫で昼休みを有効に過ごそうと、入り口となっている屋上へと向かう。

今日はいつにも増して冷たい風が吹く屋上で、わざわざ過ごす奴は

いないだろう…そういう考えもあり、僕は頭の中ではすでにどの本を読むか、目星をつけ始めていた。

…それなので、秘密の入り口の近くに、女子生徒がいたのを見たときは、ほんの少しだがその生徒を恨んでしまった。

（なんでこんな日に…ちょうど入り口の真ん前で気分転換をしなくても良いじゃないか！）

彼女はショートカットの髪が、屋上に吹き付ける風によってバタバタと乱されているのだが、一切気にすることなく、こちらに背を向けて遠くを眺めていた。

少しスカートのばたつきに目を奪われてしまったが、それよりも今はお宝本の方が大切だ。

僕はあの女の子がこの風を受け続けることに絶えられなくなり、すぐにそこからいなくなるだろうと高をくくって、女の子から少し離れた位置に座り込んで、いつでも入り口を開けれるように鍵を準備する。

僕が後ろの方に座り込んだのも女の子は気付かないようで、遠くを眺め続けている。

それから五分ぐらい経っただろうか、女の子はたまに頭を下げるだけで、殆ど動かない。

僕はその間ずっとその子のことをボーっと見ていた。

小柄でショートカットの女の子…僕はふと七咲のことを思い出して

しまった。

七咲も最近溜め息ばかり吐いて考え事をしていることは、七咲を良く見ている僕にはよく分かる。

そして何のことについて悩んでいるかも…

女の子はぶるっと肩を震わす。

僕が来るより前から、冷たい風を浴びていたのだから、体が冷えてきたのだろう。

それでも彼女はそのまま遠くを見続ける。

もしかしたら泣いていたりするのかもしれないけど、風の音にかき消されているのか、そんな音は聞こえなかった。

彼女は僕と一緒に帰るときは、とても楽しそうにしていると思う。

それでも時折見せる悩んだ表情に、僕はドキッとしながらも心配をせずにはいられなかった。

何度それを訊ねても、彼女の答えは変わらない。

（大丈夫です。これは私自身の問題ですから…か。）

水泳の成績が落ちた時も、数学の課題が出来ないときも、訊ねれば答えてくれたのに、今回ばかりは何度聞いても話してくれない。

それでも僕は、彼女が何について悩んでいるかも分かっている。

女の子は遠くを見ていた目線を、真上に上げる。
彼女にも、何か人には言えない悩みがあるのだろうな…。
僕はふと思い立ち、立ち上がると並ぶように女の子の隣で遠くを眺め始めた。
といっても、間に3メートルくらい距離をとった場所から眺める。
彼女はそれで僕の事に気付いたようだが、気にせず遠くを眺める。
僕も彼女の方を意識的に見ないで、遠くを眺める。
（こうやって横に誰かいるだけでも意外と楽になれるんだよね…）
一昨年のクリスマスを境に塞ぎ込んだ僕を、支えてくれたのは梅原や薫、梨穂子とか沢山いてくれたが、一番大きかったのはやっぱり怜だと思っている。
一見興味なさそうにただただ近くにいて、話を聞いてくれた。
そして聞かれたことには、素直に直球で返してくれた。
…悩みを無闇に聞いてこない優しさに感謝しきりだった気がする。
そしてそれはきっと七咲にも当てはまるんじゃないかと思う。
（よし！折角だし、創設祭にでも誘ってみようかな！）

僕はグラウンドに準備されている、輝日東創設祭のツリーや舞台を見下ろしながら考える。

きっと七咲にも、僕みたいに誰か横についていて欲しいときだってあるだろう。

僕はそうして昼休みが終わるまで、僕達は屋上に居続けた。

七咲との創設祭に、心を浮かせつつ。

（この後彼女を誘って、相談でも何でも受けよう。）

僕はチャイムが鳴っても、その場を動かない女の子を置いて、先に教室へと戻ることにした。

…こういう風に距離を置くのも、大事なことなんだと

彼女にも、何か良いことがあることを祈りながら。

２８話（後書き）

今回はまぁ…最終回への布石みたいになってますね。

それぞれがどうなるかは次…くらいに分かるんじゃないですかね。

因みに誰が誰にいくか今の時点で分かりますか？

出来るだけ分かりやすく、かつ分かりにくく書いてるつもりなんで…

よかったら感想なりなんなりで、予想をお聞かせください！

２９話（前書き）

急遽アマガミの時代にそぐわない物を出してます（汗）

構成力の無さが生んだ代物ですので、出来ればスルーでお願いします…

29話

「じゃあ正月は帰ってくるのね？」

「そうだよ。夜行バスのチケットは、もう取ってあるから心配ないって。」

「…たく、なんで年末にバイトなんか入れてんのよ！折角一緒に車で連れてってあげようか、って容姿端麗、頭脳明晰の姉が優しさ見せてあげたってのに…」

「去年はその優しさの代償に、高速代と親戚への土産代を要求されてっからな。」

「それは私と悠のラブラブっぷりを見せて上げたんだから、見物料くらい取るわよ。」

「惚気は余所でやってくれ…」

「じゃあ今回は私達だけ先に帰るからね。ちゃんとアンタも帰ってきなさいよ。」

「へいへい。じゃあね。…たく、面倒くさいな～。」

俺は先程まで耳に当てられていた携帯を、机の上に置かれている充電器に突き立てた。

つい最近、誕生日として姉ちゃんから貰った黒くて細い携帯電話だ

何でも家にすら電話を引いてない俺との連絡手段が無く、何度もイライラした事があったため、姉が買ってくれるらしかった。

最初は月々の携帯代すら出してくれるという姉に、少しの感謝と大量の不安を抱えていたが、その予感は的中し、携帯を持ってから姉からの愚痴電話が週に一回は掛かってくるようになってしまった。

また月々の携帯代も五千円を超えた時点で、今までの携帯代含め請求する、とまで言われているため、最低限数回電話する位しか出来ない…というか料金の基準が分からないため出来なかった。

電話番号も最初は、受けた方も通話料が発生すると思っていたため、姉との電話すら、ビクビクしながら行っていて、結局親しい数人に教えたっきりだ。

よって携帯という新しいアイテムを手に入れた俺は、むしろ負担が増えただけで有効的に利用できていない…という訳でもなかった。

姉ちゃんとの電話を終え、風呂でも入るかと、お湯を溜め始めた時、再び携帯が鳴る。

流れるメロディーは俺の好きな曲、『ボク』の人気シングルの曲だ。

俺は先程まで話していたター〇ネーターの着メロに指定されている人ではないことに安堵し、充電器を繋いだまま、電話に出た。

「はい、巽です。」

未だに携帯電話の出方が分からず、このように他人行儀になってしまうのは仕方ないだろう。

「もしもし。今大丈夫？」

「あぁ、梨穂子か。なんか用か？」

薄っぺらい機械から、先ほどの電話では味わえなかった安心感のある声が聞こえてくる。

本当に同じ生物なのか疑いたくなるくらいだ。

「いや～、明日の事で少し聞きたいことがありまして～。」

明日はクリスマスイブ…梨穂子と純一が、出かける約束をした特別な日だ。

一週間くらい前に約束を取り付けたらしく、約束を取り付けたその日のうちに、俺に結果を笑顔で教えてくれた。

それから毎日のように、家の子機を使ってこういった相談の電話を入れてくる。

着ていく服は…とか、どこに行くか…などはもちろん、どんな話をするか、どんな顔すればいいか、なんて聞いてくるので、内心うんざりしつつもここ最近の楽しみになっていた。

俺の意見を聞く度に、電話越しでも頭を傾げているのが分かるほど考え込み、そうして何回も話し合ってゆっくりと一歩一歩、当日のデートプランは完成していく。

…完成していく度に、俺のやれることが減っていくようで、少し思

うところがあるのは心の奥底へと沈めておく。

「へいへい。じゃあ今日はどんなお悩みでしょうか、お姫様？」

「え～っとね～…」

「…こうすれば問題ないだろ。」

「そっか～！そうだね！」

すでに通話時間が三十分は経過している。

梨穂子嬢の本日のお悩みは、明日の朝どうやって過ごせばいいか、というものだった。

他人が聞けば、そんなの勝手にしろ！と言われそうな悩みだが、本人は至って真剣だし、その性格を知り尽くしている俺も真剣に考えて答える。

「リョーごめんね。毎晩電話しちゃって。…迷惑だよね？」

「申し訳ないと思うなら、明日のデート成功させて、俺に堂々とカップル宣言してくれ。そうすりゃ俺の苦労も報われたってもんだから。」

「リョー…ありがとね！頑張って付き合って、それでリョーの好きな人聞きに行くからね！」

それはその場しのぎに俺が言った約束。

明日のデートに比べたら、全くのちっぽけで、どうでもいい約束。

「はいはい、好きだった人なら教えてやるから頑張れや。」

絶対こんなこと言ったら梨穂子は困るだろうな…まぁ生殺しの状態で何年も無邪気に近付いてきた梨穂子と、距離を置くキッカケの一つにはなるだろうしいいだろ。

「ほら、明日はイブだぞ。早く寝なくて良いのかよ？」

短針は十一時を指している…毎日続いていた至福の時間が今日も終わり、…そして無くなる。

イブに近づくにつれ、テンションが徐々に上がっていった純一を見ている俺は、プランが成功する、…そして純一に気を使って俺に近付かなくなる梨穂子との未来が見えている気がする。

だからこそ俺はこの時間を切り捨てる。

それが一番みんなが楽しいと思える結末だと心から思えるから。

「う～ん…今日はもう少し話してたいな～。」

そんな俺の決意もどこ吹く風の言葉が、電話から聞こえた。

（…やめてくれ…）

「…ったく、今日はこの辺にしといて、明日に備えた方が良いと想うぞ。寝坊したとか梨穂子っぽすぎて笑えねーし。」

「そうなんだけど～、なんかこの電話切ったら、またリョーに会えなくなっちゃう気がしちゃって…何でだろうね？リョーは私の味方なのに。」

…本当に妙な所で鋭いな。

「だから…今からさ、好きに話さない？リョーと何か話したくて。…だめ？」

（…やめてくれ…）

「いやいや、だから～…「お願い！この通り！」…見えないから分からんけど分かった。１０分だけだからな。」

（…そっちから来られたら…逃げられねーよ…）

こうやって妥協しちまう自分がいる。

（誰かと付き合えば変われんのかな…。それなら…）

結局電話は２５分は続いた。

「おっ！今日はコロッケか！揚げ物なんて久し振りだな～。」

「そうですか。喜んでもらえて嬉しいです。」

あれは一週間くらい前の昼休み、たしか大雨が降った日だったな。

昼飯をたまたま作らなかった俺に、七咲が手作り弁当を恵んでくれた日…。

「マジで七咲には感謝しても仕切れねーわ。月に数回は我が家の食費を助けてくれてるし…」

「食費だけですか？」

「いや！そんなことないぞ！後は～…そう！こうやって話し相手になってくれる事とか！」

「…まぁいいでしょう。私も先輩と話せて嬉しいですし。」

そういえばやたらと七咲の機嫌がよかった気がする。

いつもなら聞き分けの出来ない子供みたいに、拗ねて俺を困らせていたし…。

「もうすぐ冬休みだな。七咲は親の実家に帰ったりするのか？」

「いえ、年明けはこっちで過ごすつもりです。水泳部の練習も無いので、ゆっくり骨休めしようと思います。先輩は？」

「俺は三十日に夜行バスで実家に帰る予定…つってもまだ予約すら取ってないから、未定なんだけどな。」

「そうですか…それはよかったです。」

「へっ？」

「あっ…何でもないです。それじゃあクリスマスはこちらで過ごすんですね。創設祭に出たりするんですか？」

「う～ん…バイト入れっかもしんないけど…まぁ顔出せたら行くだろうな。」

「…つまりこちらもまだ未定なんですね。」

やけに真剣に聞いてくるな～、とはこの時ひしひしと感じていた。

「…しゃーないだろ…クリスマス一緒に過ごす相手なんていねーんだから…。て七咲！なにガッツポーズしてんだよ！そんなに先輩の不幸が嬉しいか！」

「いえっ！その～…はい…正直に打ち明けると嬉しいです。」

「…とうとう七咲も、『他人の不幸は蜜の味』なんて考えになっち

ゃったのか…お兄ちゃん哀しいぞ！」

そういや俺も普段と違って、なんかやたらとテンションが高かった気がする。

…この時点で俺の前にちょこんと座る七咲に、俺は呑まれていたのかもしれない。

「…先輩、少しいいですか？」

「はいはい！人生の負け犬こと巽怜、誠心誠意真心込めて聞かせていただきます！」

「…先輩、真面目に聞く気があるんですか？」

「うっ…なんか真面目な話だったんか…。うしっ！どっからでもかかってこい！」

「…」

「ん？七咲どうした？」

「…もう、先輩はデリカシーが無いです！」

「なぜにいきなり罵倒！？」

相変わらず茶化すような言動の俺に対して、七咲はまるでいつか見た、水泳の飛び込み台の上で発揮されるような集中力を、そして気迫を見せている。

「うう…後輩にこんなハートブレイクされている自分が恥ずかしい…今日は徹夜で音楽聞いて癒されよう、そうしよう。」

「その役目…私じゃダメですか…」

「…へっ？」

「先輩のことを癒す役目…それは私じゃ出来ませんか？」

「ちょっ！急にどうした！？」

「それだけじゃありません。先輩のお弁当を作ること…先輩の目覚まし代わりに電話すること…先輩の傍にいること…全部私にさせてくれないですか？」

「おいおい…それじゃまるで告は「私、先輩の事が大好きです。水泳クラブの時からずっと…想いが色褪せるどころか、どんどん色鮮やかになっていくんです…。もう我慢できません！先輩の事全て知りたいんです！…私を先輩の近くに置いてくれませんか…？」……。」

「よし、そろそろ寝るか。」

合計でたっぷり一時間半は話した電話を切った後、俺は沸かしておいた風呂にすぐさま入り、足先から冷え切っている身体を急速に温めた。

相変わらずヒリヒリとした感覚が襲ってくるが、これこそが風呂の醍醐味だろうと、毎日あえて身体を流したらすぐに湯船に飛び込んでいる。

そうしてこれまたたっぷり二十分強入った後（俺の常日頃の平均入浴時間より十分は長い）、いつもやっている訳ではない柔軟体操を、今日は軽く行ってから布団に入った。

明日はクリスマスイブ。

梨穂子が純一とデートする1日。

純一と梨穂子が結ばれるであろう日。

七咲が俺と過ごすことを望んだ日。

そして俺がバイトを入れた日。

こうして夜は更けていく。

いつも通りのスピードで、だけど今日はゆっくりと進んでいく。

朝起きて飯食ったり、歯を磨いたり、なんやかんや身嗜みを整える。

昼から六時まで、ケーキの押し売りバイトをする。

その後は…家に帰ってゴロゴロかな。

これが明日の大まかな予定。

俺は七咲の告白を断った。

ふざけて、茶化すような回答ではなく、それこそ誠心誠意真心込めて。

あの日以来七咲の姿は見ていない。

俺の一言一言に怯え、深く傷付いただろうあの時からずっと…。

いまでも七咲の小さな身体が、俺の返事を受けて、更に縮こまっていく姿が目に焼き付いている。

溜め込んで張り詰めて…たっぷりと膨らんだそれに、俺が針を刺して台無しにしたかのような感覚…。

俺の一言で、他人が…俺にとって大事な親友が傷付く…これはいつもの俺なら許容できないことだ。

七咲の為を思うなら、きっと付き合えば、七咲もあんな風にはならなかっただろう。

それに…たぶん七咲となら、今の生活を更に充実に…色鮮やかになるだろうと、確信めいた臆測もある。

それでも…俺は断った。

身体をブルッと震わせる。

今日は一段と寒い夜だ。

明日は雪が降ったりするのかもしれない。

…結局布団に入ってから眠るまで、ほんの二時間掛かってしまった。

２９話（後書き）

感想随時お待ちしております！

３０話（前書き）

クリスマスイヴ編〜

30話

どんよりとした雲が、空を覆い尽くすように広がっている今日はクリスマスイブ。

冷たい風が吹き、誰しもが外に出ることを躊躇うような気候だが、今日はそんなことお構い無し、といった様子で、イルミネーションが用意されている広場一帯には多くの人が…カップルが見受けられた。

むしろ寒いことが好都合だとばかりに、腕を組んだり、腰を抱いたりとイチャイチャしている。

そんな中、俺は一人でそのあと少しでライトアップされるであろう広場にいる。

上下に赤の服、帽子も赤、極めつけに白い付けひげをしたこの格好は、誰がどうみてもサンタクロースの格好であった。

昼の一時からのバイト…それがクリスマスケーキの押し売りバイトだった。

俺の横には、女の子の代わりに箱詰めケーキが何個か置いてある。

ノルマとして今日中にあと七つ売らなければいけない。

売り切れればボーナスとして、バイト代に上乗せが、売り切れなければ自腹で余りを購入しなければいけない…なんとも理不尽なシステムだ。

そのため俺はさっきから必死に、カップルや家族連れに媚びを売っている。

バイト終わりの目安となっている八時まであと三時間とちょっと…今のペースで売れれば、問題無く売り切れるだろう。

それに…俺には売り切っちまうための秘策がある。

もうすぐ五時、そろそろ人が集まりだす頃だろう。

そこで俺はケーキの箱が入ったダンボールを抱え、場所を移動する。

人がごった返す広場から少し離れ、たどり着いたのはよく見慣れた風景…輝日東高校の通学路だ。

輝日東高校で本日創設祭が予定されている。

創設祭には部活に所属している人たちや創設祭の委員、その他の有志の集まりで開催されている。

…一応クラス毎に参加可能だが、熱血クラスである俺のクラスは不参加を早々に決めていた。

創設祭の影響もあってか、通学路には生徒や父兄、またＯＢの方々でこちらも負けじとごった返しになっていた。

売り切るには十分な条件であることに安堵し、早速売り込みを開始した。

「メリークリスマス！只今出張販売サービスを行っております！多種多様のケーキ６ピースで千円！消費税込みで千円です！これから創設祭へ向かうお客様、友達と、後輩と、彼氏彼女とこちらのケーキを堪能して甘い一時を…あれ？」

ケーキの箱を両手にぶら下げ、一人大声で呼び込みをしていると、ふと見知った顔が俺の視界に過ぎった気がした。

「お～い！ちょっと「すみません～。ケーキ買いたいんですけど～。」あっ、はい、一箱千円です。」

俺はその影を呼び止めようと一歩踏み出した所で、お客さんに止められてしまった。

「どんな種類のケーキが入ってるんですか？できればチョコレートのケーキがあると嬉しいんだけど「はい！こちらにはショートケーキ、チョコレートケーキ、チーズケーキといった定番のケーキをご用意していますのでご安心下さい！」」

早く追いかけたいと思う心理からか、つい早口に素早く受け答えしてしまう。

そんな俺を気にせず、お客さんはゆったりと箱の中身を見て、買うかどうか迷っている。

「綺麗に包装してくれたりはしてくれるの？「はい、包装は別料金になりますが、ご用意しております！」」

包装といっても、箱にリボンやらなんやらを、ちょこちょこ施すだけ…それでも一つ包装するのに二分弱くらい掛かってしまう。

「じゃあ包装したのを五つ頂戴。えーっと…はい六千円ね。」

「…はい、ありがとうございま～す！」

ついつい本心が出たが、お客さんに罪はない…そうして包装取り掛かる。

結局包装し終えた頃には、辺りの人物は一変していて、目標は確認できなかった。

「さっき…純一に良く似てた奴がいたような…。」

遠目からでも意気揚々と歩く馬鹿面の横顔が、チラッと見えた気がした。

ヒューと流れるような冷たい風が吹き付ける。

私服の上にサンタクロースの服を着ているのだが、それでも身体は否応無しに震える。

「でも…たしか今日は創設祭に行く予定なんか無かったはずだし…。」

ハッキリと見たわけではない、それでもあれは純一だったんではないかという不安は溶けていく所か、増大していく一方だ。

俺の頭の中は先程見た気がした純一の事で…いや、その純一と約束を取り付けていたアイツの事で支配されていた。

「あと二つ…か。」

ダンボールの中を見やる…二十個以上あったケーキもあと二つで完売だ。

「…お買い上げありがとうございます…。」

町はイルミネーションで光り輝いている。

イルミネーションの取り付けられた街路樹の周りには、カップルで、家族連れで、俺と同じくサンタクロースの格好をしたバイトで溢れかえっていた。

水色のマフラー、黒のコートを身にまとい、両手に一つずつ箱を持って歩いている。

あれからバイト先にケーキが全部売り切れた事、急用ができた事を告げ、現在俺は一人イルミネーション輝く街道を歩いている。

時刻は六時過ぎ…待ち合わせはたしか五時だから、俺の不安が杞憂なら梨穂子の姿はないだろう。

待ち合わせ場所はイルミネーションが煌びやかに設置された駅前の広場とは違い、少し離れた、イルミネーションが細々と設置された

広場。

そんな華やかというより、ムードのある広場に…梨穂子が『一人』で立っていた。

腕時計や広場に設置された時計を何度もチェックし、誰かが近付いてくる度に敏感に反応してはうなだれている。

ピンクの手袋とマフラーを付け、白のパーカーの上に藍のコート、下はオレンジのスカート…殆どが俺と純一が過去にプレゼントした服を着ていた。

それだけ大事に想ってくれているのは嬉しいが、今日ぐらい俺からの物は着ていかない方が良いって言ったのにな…。

「梨穂子…。」

振り絞って声を出すが、蚊ほどの声しか出なかった…それでも俯いている梨穂子は、パッと笑顔になりながらこちらに向けて首を上げた。

「遅いよ〜！純い…リョー？」

「…よう。」

俺を確認して、徐々に消えていく笑顔に、ズキッと胸を刺す傷みを感じずにはいられなかった。

「…どうしたの？心配になって見に来ちゃった？大丈夫だよ〜！ちょっと純一遅刻してるみたいだけど、もう家を出たみたいだから、

すぐに来ると思うし…。」

明らかに梨穂子のトーンが落ちていくのが分かる。

梨穂子の笑顔もいつものヒマワリのようなパッとした笑顔ではなく、普段の笑顔に似せて貼り付けたような笑顔だった。

「…純一ならさっき見かけたぞ…。」

そんな梨穂子を見ているのは辛いが、俺は更に梨穂子を傷つける言葉を紡いだ。

「えっ？」

「…制服姿で創設祭に向かう純一を通学路で見かけた…たしか三十分くらい前かな。」

「えっ？えっ？」

「…たぶん純一は…ここには来ない…。」

酷く冷たくなってしまった声が辺りに…頭の中に響きわたる。

…遠くから楽しげな音楽が聞こえてくる。

音楽だけじゃなく、声、熱気、足音でさえ楽しげに聞こえてくる。

町中が今日という日を祝っている中、明らかに場違いな重たい雰囲気が辺りを覆う。

…町中からの祝福の音が、こんなにも無味無臭な物に感じてしまう。
フィルターを通して伝わる空気は、すでに冷たさすら感じさせない。
梨穂子の今の心境が読めない…何を浮かべ、何を想い、何を導き出し、それをどう整理させようとしているのか…。

「…帰るか。」

俺は梨穂子の返事を待たず、ピンクの手を強引に掴む。
純一が梨穂子にプレゼントした手袋を、俺と梨穂子の手のひらで挟み込む。
…梨穂子はどっちと手を繋いでいると感じているんだろうか…。

「ほら、紅茶だ。砂糖はいっぱい、でいいんだろ？」
先日貰ってきた紅茶のパックが丁度一つだけ余っていたので、それを淹れてやる。
結局俺の家に連れてきてしまった。

梨穂子の家に送ろうと歩いていたのだが、家に近付くなり、俺の手を引っ張って無言の拒否を示した。

それでも純一の家に限りなく近い俺の家に連れてきたのは、絶対ミスだっただろう。

暖房器具もなく、あるのは仄かな香りと湯気を立ち込めさせるカップと、緑茶の入った湯飲みだけだ。

何も反応しない梨穂子を気にかけつつも、テーブルの上に先程購入したケーキを1ピースずつ、俺はチョコレートケーキ、梨穂子にはショートケーキを用意する。

今の梨穂子にチョコレートケーキなんて渡したら、せっかくの白のパーカーにベットリ付けてしまいそうだったから、勝手にチョイスしておいた。

部屋に漂う空気は、鉛のように重いのだが、今は音楽をかける雰囲気ではない、とあえてＣＤデッキには手をかけなかった。

時刻はすでに八時を過ぎていて、何も食べていないのなら、腹が鳴ってもおかしくない時間だが…差し出されたケーキに一切手を着けない梨穂子。

家に着くやいなや、ずっとテーブルの前に座って、うなだれている。

癖のある茶髪が、だらんと前に垂れ下がっているので、俺の位置からは梨穂子の表情は読み取れない。

ブルッと梨穂子の身体が寒さを感じたのをキッカケに、俺は立ち上

がってカーテンを閉めにいく。

「あっ…。」

そんな時だった、無音の部屋に、久しぶりに音が響いたのは。

カーテンを閉めようと立ち上がり、窓の奥に広がっていた景色…雪がちらついていた。

ふわふわと漂い、時折吹く風に流されていく…小さく儚い存在。

地面に触れればさっと消えるか弱き存在。

（か弱い…か。）

雪を見て思い出すのは、目の前にいる梨穂子ではなく、先日俺に告白してきた後輩。

結果的に俺の言葉に振り回され、俺の言葉に簡単に傷付き、俺の言葉を聞いて姿を消した。

「逢ちゃんだよね…。」

「えっ？」

梨穂子はこれまた普段と違って、勘の鋭いことを…

「きっと純一が会いに行ったのは逢ちゃんだろうなって…そう思ったの。」

もちろんそんなことはなく、あくまで純一のことについて考えていたみたいだ。

「…なんで？」

「なんでって…最近の純一を見てたらわかるよ～…逢ちゃんのことばっかり見てた…。」

あはは、と乾いた笑い声が聞こえ、すぐに収まる。

「…気付かなかったな。でも七咲か…。」

「一週間くらい前かな。たまたま逢ちゃんを見かけて、その時凄い驚いちゃった…逢ちゃんってこんなに小さかったっけ？って。」

先程に比べ、随分饒舌に話すようになった梨穂子…でもやはり感情の起伏が乏しく感じる。

「こう…なんていうのかな…母性本能くすぐられたっていうか～、守ってあげたくなっちゃうくらい、小さくなってたの。」

一週間前…俺があの時見た七咲は、大胆不敵な笑みを浮かべて、いつも以上に世話焼きで、…それでいつも以上に小さくなってたな。

「そりゃ純一も気になっちゃうよ～。いつもしっかりしてる逢ちゃんが、そんな風になってるんだから。」

そう言いつつ、目の前に置かれたケーキを一口パクリと食べる。

いつもなら感想の三つや四つが続けざまに出るところだが、今回は

フォークを口にくわえたままうなだれてしまった。

「でも…なんでこのタイミングであんな風になっちゃったの…せっかく純一がこっちを向いてくれたのに…」

くしゅっと鼻をすする梨穂子。

フォークをくわえたまま、とうとう涙腺が崩壊してしまったようだ。

梨穂子の泣いたのいつ以来に見ただろう…パッと思い出せないほど、意外と俺の幼なじみは強かったらしい。

「ごめん。」

「ふぇっ？」

そんな梨穂子を見ていると、どうしても謝りたくなってしまった…

今回の一連の流れは、全て俺の所為だと思った…。

「俺、七咲の告白を断ったんだ。だいたい一週間くらい前に…。」

「えっ…。」

梨穂子は声が出せなくなったみたいだ。

なんせ一連の流れのキッカケは、いつも味方していた俺なのだから。

時刻は九時前…しんしんと雪が降り積もる夜に…

俺は罰を望むように話し出した。

３０話（後書き）

結局こんな感じになりました…

残すところあと４話程です！

今後もよろしくお願いします！

31話（前書き）

クリスマスイヴ編　その2です

31話

「俺は七咲とは付き合わない。」

あくまで真剣に、ハッキリと口にした。

矢継ぎ早に俺への想いを告げてくれた七咲に対して、ハッキリとした拒絶を唱えた。

「なんで…ですか…？」

スカートをギュッと握り締めて、俺の答えの理由を聞いてくる。

身体全体を震わせながらも、俺の言葉を待っている。

「俺、好きな奴がいるんだ。いまだくすぶってんだよ。だから七咲とは付き合えない。」

答えは単純だ…ただ今は梨穂子という磁石から離れられないというだけ。

「…その人って…やっぱり「たぶんそうだよ。七咲の勘は間違いないだろうな。」…そうですか。」

七咲の口からこぼれ出そうな単語を、食い気味の返答で押さえ込む。

好きな人の好きな人…中学生の頃の俺でも分かるのなら、高校生の七咲になら分からないはずもない。

「まぁそういうことなんだ。だから七咲の気持ちには答えられな「それならなんで…」えっ？」

「それならなんで応援するんですか！好きな人が他の人に取られそうなのに、どうして黙って見ているんですか！」

…やっぱり七咲は正答が分かっていたみたいだ。

普通に考えてみれば、俺の行動は矛盾に満ちていることが分かる。

誰しもが思う疑問…その例外に漏れず、七咲は一般論を口にした。

けして間違えではないその考えを…。

…ただ、言う相手が非常識な事を認識してないことが、唯一の間違いだった。

「絶対あいつらがくっ付いた方が幸せだからだよ。周りも含めた幸せになるんだ。」

「えっ？」

「俺がくっ付いちまうと、少なくともアイツとの関係がギクシャクしちまうんだよ…アイツって。」

曖昧な表現しかしない俺…それでも七咲なら分かってくれるだろうと信じて話す。

「それに…アイツがアイツを想う年月を無駄にしてやりたくないんだ。だからアイツを応援する。くっ付いて欲しいから、アイツを助

けるんだ。」

そういって七咲から貰った手作り弁当を一口頬張る…うん、やっぱり旨いな。

今朝の雨で、俺達が座っている所以外は、いまだ湿っている屋上。

そういえば、と前に森島先輩との騒ぎの時も、ここで一緒に昼飯を食べたことをふと思い出した。

…その頃から、想っててくれたりしたのかな…。

「だから、俺は自分が納得できるまで、絶対に誰とも付き合わない。…どんなに親しい奴とでも。」

「そんなことがあったんだ…。」

「はい。丁度十日前のお昼休みの事です。」

雪がチラつく屋上で、僕達は二人手すりにもたれかかって、雪に負けじと火をたぎらすキャンプファイアーを見ていた。

水泳部として創設祭に参加していた七咲が、校舎の鍵を先輩から借り受けて、今誰も生徒がいない校舎の屋上にいる。

「だから七咲はこの頃元気なかったのか…。」

今七咲から聞いた話が本当なら、七咲は小学生の頃からの好きな人…怜に振られたことになる。

ずっと想い続けた人に振られる…期間は短いとはいえ、僕にもその感覚は共感できるものがある。

中学三年の頃、あの子は約束の場所に来ることはなかった。

…いまだ癒えない傷が僕の奥底を占拠している。

「それから意図的に先輩を避けるようになりました。…先輩のことだから、絶対私を慰めようとしてくれるのが分かってましたから。」

吐く息が白く、身体全体で寒気を感じるが、七咲は微動だにしない。

その姿が、この前屋上で黄昏ていた女の子の姿とダブる。

七咲の表情からは、特に何も伺えない…いや、身体中からどんよりとした何かが伺えるので、未だに立ち直れてはないみたいだ。

校庭から賑やかな声が聞こえてくる。

キャンプファイアーでみんな盛り上がってるんだな～、と喧騒から少し離れた屋上から二人きりで眺めている。

こうして横でただただ話を聞くのも悪くない…けどどうしてか、つい昔のことを話したくなった。

「僕にもあったんだよね…ずっと好きだった女の子に振られたこと。」

そうして僕は、頭の中を、中学三年の頃にタイムスリップさせる。

七咲からすれば、大したことないかもしれない…それでも、少しでも七咲の気が紛れればいい。

きっとそんなことを思ったからだろう。

ポツリポツリ話し始める僕を、七咲は真剣な眼差しで見ている。

…

「それが丁度二年前の今日、僕が受けた傷だよ。」

ポツリポツリと話したからか、結構な時間が経ち、すでにキャンプファイアーも終わっている。

「そんな時に支えてくれたのが、怜だったんだよ。怜がいなかったら、僕はきっと押し入れに閉じこもって外の世界に出ていけなかったかもしれない。」

話し終わっても七咲は何も喋らない。

なので更に僕は話を続ける。

「別に何をしてくれたって訳でもないんだけど…ずっと側にいてくれた。ずっと変わらない態度で接してくれた。そういう事があったから、僕は七咲が怜を憧れる理由も、好きになる理由も分かると想うんだ。なんてったって僕の目標でもあるからね！」

言っといてなんだが、かなり傲慢な事言っている気がする…七咲怒ってないかな…。

「それで…七咲を今日誘ったんだよ。きっと七咲は昨日突然言われて驚いただろうけど…きっと怜なら元気のない七咲を放って置かないだろうからさ。」

「…だからって急に肩を掴んで、明日創設祭行こう！なんて言われても困りますよ…。しかも廊下で…恥ずかしかったんですから。」

「ははっ。確かにそうだろうね。」

「もう…他人事みたいに言わないで下さい…。」

屋上に二人の笑い声が木霊する。

ようやく七咲も笑顔を見せてくれた。

少しは立ち直ってくれたのかな…。

雪が小振りになってきた…明日には全部溶けて無くなるだろう。

創設祭に参加していた生徒も、家路へと向かい始めている。

「それじゃあ七咲、僕達もそろそろ帰ろうか。」

そうですね、返事が来るのを待ってから、僕達は二人で屋上から去っていく。

「橘先輩。」

階段を降りている最中、ふと七咲に呼び止められた。

先程まで隣を歩いていた七咲は、いつの間にか立ち止まり、階段の踊場から僕を見下ろしていた。

今いる七咲に何か違和感を感じる。

「どうしたの、七咲？」

それはもう先程までの暗いオーラが嘘のようで、

「やっぱり私、先輩のこと諦められません。これからも頑張ってみます。」

普段見られないような、飛びきりの笑顔を見せていた。

「じゃあ僕は七咲を頑張って応援するよ！フレー！フレー！な・な・さ・き！」

校舎内に響き渡る僕の声…ちょっと恥ずかしかったな。

「ちょ、ちょっと橘先輩！やめて下さい！恥ずかしいです！」

それは七咲も同じみたいだから、まぁいいか。

「ははっ。でも大変だよ。怜をそこまでメロメロにさせた女の子が相手なんだ。…そういえば、怜の好きな人って誰なんだろう？七咲は知ってるんだよな。」

「…それについては、確かに先輩の協力次第で突破口は出来そうですけど～…本当に気付いてないんですか？」

「何を？」

「…はぁ～…先輩も大変なんですね。少し気持ちが分かりました。」

「どういうことだよ、七咲！僕にも分かるように説明してくれ！」

「橘先輩、大きな声を出してると、見回りの方が来ちゃいますよ。早く帰りましょう。」

そうして七咲は階段を一段飛ばしで降りていく。

「あ～！七咲、待ってくれよ！置いていくなんて酷いぞ！」

あっという間に、僕を置いて階段を降りていった七咲に追いつくよう、僕も階段を一段飛ばしで降りていく。

カンカンと階段の駆け下りる足音が木霊する校舎で、僕達はまた一つ階段を上れた気がする一日だった。

…何か忘れている気がするな〜。とりあえず家に着いてから考えよう
うっと！

「まぁ話の流れはこんな感じ。」

俺は梨穂子に七咲を振った流れを説明した。

…もちろん振った理由については、全く触れないように話したが…。

「それから俺は七咲に会ってないから…たぶん避けられてたんだろうけど、七咲の様子は全然知らなかったんだよ。…ごめんな、梨穂子…。」

頭を深々と下げながら、梨穂子に謝罪する。

どんなに叱責されても耐えるつもりだ。

二度と顔を見たくない！なんて言われても…頑張って合わさないようにする…そんな覚悟だ。

梨穂子は何も喋らない。

またも部屋に無音が訪れる。

その時、ふと梨穂子が身体を動かす雰囲気を察した。

「えいっ！」

梨穂子の掛け声の数瞬後、ピシッとなかなかに軽快な音が俺の頭部から奏でられた。

「へっ？」

頭を上げると、梨穂子が少し怒った表情を見せていた…いや、頬を膨らませたって可愛いだけだから。

「私、リョーの何でもかんでも自分の所為にしちゃうのは悪い癖だと思う～！今日のことは絶対リョーの所為じゃないよ！」

そして今度は額にデコピンをする。

「いてっ！…でも七咲が元気なくしたのって、絶対俺の所為だろ？」

「それはそうかもしれないけど～…、それでもそこからふらふら逢ちゃんについて行っちゃった純一が悪いの！」

梨穂子は俺を叱りながら、ショートケーキを漠々と食べている。

「あ～もう！思い出したらお腹空いてきちゃったよ～。リョー、お代わりない？」

そういって空になった皿を俺に手渡す梨穂子。

なんだかいつもの梨穂子に戻ってきた…様に見えるが、たぶん俺を心配させないように無理やりテンションを上げているのだろう。

やっぱり俺の幼なじみは強かったみたいだ。

「へいへい。何か希望はあるか？」

俺もその流れに乗っかろう。

ひとまず皿を受け取り、冷蔵庫へと向かう。

「じゃあフルーツタルト！ブルーベリーの乗ったやつ！」

「オッケー。ついでになんか呑むか？紅茶はもう無いけどな。」

「ううん、大丈夫。うわ～、美味しそう～！いただきま～す！」

先程までの重さが嘘のように、部屋には明るい雰囲気が出来ている…いや、作られている。

俺と梨穂子…それと純一とたぶん七咲、四人で作り上げた今までの重さを、俺と梨穂子で書き換えている。

こんな雰囲気を明日まで引きずらないように…。

「そういえば、リョーの好きな人って誰なの？気になって夜も眠れないよ～。」

俺は七咲を振った理由を話していない。
だからこれはただの好奇心なんだろう。
「その発言をしてから既に何日も経っているのに、随分と健康的な顔をしてんだな。案外今日も寝坊するほど寝てたりして。」
答えをはぐらかしながら、梨穂子を茶化すような返答をする。
…流石に無理があったか？
「…あはは。」
「えっ！？マジかよ！そりゃ純一でも怒るって。だから昨日夜更かししないで早く寝ろって言っただろ。」
「いや～、私にも乙女心というものがありまして～、デートの前日に落ち着いて寝るなんて出来ないんですよ～。」
梨穂子は両手を背中で組んで、気まずそうに笑う。
「梨穂子に乙女心か…。」
「なによ～！」
「いや、確かに梨穂子みたく乙女心満載な女の子なら、デートに他の男からもらった服を着ていくだろうな～って思ってよ。」
「え～！だってこれ可愛いんだもん！」

「まぁ確かに似合ってると思うよ。…俺が買っといて何だけどさ。」

「わ～い！リョーに誉められた～！」

「いや、そこは俺のセンスが…まぁいいや。それよりもうすぐ十時になるぞ。時間大丈夫か？」

ふと時計を見ると、あと五分ほどで長針がてっぺんを指す時間になっていたので、梨穂子にそれを告げる。

「う～ん、そうだね。そろそろ帰ろうかな。あんまり遅くなってもお母さん心配しちゃうし。」

「よし、んじゃ送るから早く帰る準備する！ほら、コート着て！」

勢い良く立ち上がり、梨穂子にテキパキと指示を出す。

慌てて準備をする梨穂子を横目で見つつ、冷蔵庫から手を着けていないケーキの入った箱を取り出す。

手土産に梨穂子に持たせてやった方が、きっとケーキも美味しく食べてもらえて満足だろう。

そうして俺達は二人肩を並べて、雪振る町を歩いていった。

31話（後書き）

ここで梨穂子さんを奪っちまう展開も考えていましたが、敢えてこんな感じにしました。

書いていた時は後先考えずにこの話にしてたな～…だから次の話をいちいち前の話に沿って考えなきゃいけないんですよね。

32話（前書き）

クリスマスイヴの次の日…クリスマス編です。

32話

クリスマスイブの次の日…様はクリスマスの今日、惰眠を貪っていた俺は、けたたましい携帯のバイブレーションの音で目を覚ました。

「…ふぁ～…誰だよ、こんな朝っぱらから…はい、巽です。」

時刻は八時丁度といったところ、とりあえず寝起きの電話だったが、いつも通り他人行儀に電話に出る。

「もしも～し。起きた～？」

朝っぱらから妙に明るい声が聞こえる。

とても聞き慣れた、俺の大好きな声だ。

「なんだ梨穂子か…まだ寝てるんで、三時間後くらいにまた電話してくれ。それじゃ「おはよー！リョー！…これで起きた？」…おはようさん。」

今一度寝ようとする俺を、梨穂子は意外とある声量をフルパワーに使用し、俺を起こしにかかった…耳がキーンってなってるし…。

「それでなんか用か？」

なんも用がないのに電話してるんなら、このまま電話を切ってやる、とけして出来ないだろう事を思いながら聞く。

「リョー、今日暇？バイト有ったりする？」

「いや、今日は無いけど…どうしたいきなり。デートの誘いか？」
寝起きで頭が上手く回ってないのか、これが地の性格なのかは分からないが、なんかチャラい反応してる気がする。
そんな返事に梨穂子は、
「そうだよ。そうとなれば話が早い。じゃあ九時に駅前のコンビニで待ち合わせね。」
なんて全く声色を変えず、またいつもとは違って、強引に予定を埋める。
「へっ？いや、りほ「それじゃあね～！待ってるから～！…ガチャ、ツーツー…」…何なんだ？。」
少しずつ冴えていく頭をフルに使っても、今までにない梨穂子の行動力に驚く俺。
時刻は八時五分…ここから駅前まで歩いて十五分…四十分に出るとして、あと三十五分で飯食って、歯を磨いて…余裕だな。
とりあえず俺はあるものを使って、朝飯を作る。
ジュワジュワと、腹を刺激する音を奏でながら、俺はふと思った。
「駅前のコンビニって…どこだ？」
たらりと汗が流れた気がした。

そういえば駅前にコンビニなんて、知ってるだけで五軒ある。

一軒一軒回ってたら、プラス十分くらいかかりそうだ。

「しゃーない。今日はこれだけでいいや。」

そういって俺はオレ流モヤシ炒め改を食パン一枚に挟んで、勢い良く頬張った。

うん…やっぱりモヤシ炒め改は最高だな…。

その後歯磨き、着替え等々を難なく終え、家を出る。

天気は快晴で、家を出た瞬間、洗濯物を干せば良かったと後悔するほどだ。

まぁ時間的に今日は諦めるしかない。

日差しが眩しく、真夏でもおかしくなさそうな日の強い天気だったが、やっぱり風が冷たかったり、ほんの少しだが、昨日降った雪が残っていたりしていた。

俺は今日も水色のマフラーを巻いて、駅前へと向かっている。

「とりあえず一番近いコーソンから行ってみるか。」

「よっ、梨穂子。」

「あっ、リョー。流石時間ぴったりだね。」

「まぁ梨穂子のおかげかな。」

結局梨穂子を見つけたのは、四軒目に訪れたサンクヌだった。

「えっ？どういうこと？」

「まぁ気にすんな。それよりなんでこんな朝っぱらから呼び出したんだ？」

律儀に理由を聞いてくる梨穂子だが、俺は気にせず、別の話題を出す。

「あれ？言ってなかったっけ？今日は～これで～す！」

ジャジャーンという効果音紛いのものを口にしながら、梨穂子は雑誌を開いて俺に見せる。

「…洋服？」

そこには女性ものの服の特集が組まれていた…なんでもクリスマス特集だとか。

「そうなんですよ～。今日は新しく可愛い服を買おうかな～って。」

雑誌を両手で広げながら、梨穂子は笑みを浮かべた…少なくとも昨日みたいな張りぼての笑顔ではないことに、少し安堵する。

「それは目的だろ…クリスマスだから、自分にプレゼントってか？」
「あ～、そういう考え方あったね～。じゃあそれで！」
「理由無いんかい…。」
そう言いながら、梨穂子が持っていた雑誌を手に取る。
まぁどうせ昨日の事を忘れるためのやけ食い、ならぬやけ買いだろうということは、歯を磨いてる時にはすでにある程度答えを推測していた。
「それでどんなのが欲しいんだ？可愛いのはわかったけど、他にって意味だぞ。」
雑誌をパラパラと捲りながら、梨穂子に聞いてみた。
まぁこのパターンからして…
「う～ん…『考えるな…感じろ。』ですよ！」
「訳すと、決まってないから、とりあえず見て回りましょう、で正解か？」
「ピンポーン！流石リョー！」
胸の前で、両手で丸を作りながら、梨穂子は嬉しそうに答えた。
「それで、開店までに雑誌見て情報収集する、ってな感じだろ。」

「ピンポンピンポーン！解答者リョー、大正解です！」
少し声を大にしてはしゃぐ梨穂子…一応人前だから静かにした方がいいぞ。
「そりゃどうも。それじゃあテキトーに見て、時間潰すか。」
おー！という掛け声と共に、俺達は片っ端から雑誌を広げ、お互いが気になった服をチェックし、そうしてからデパートへと向かった。

「ふぅ…いつもの事ながら、梨穂子の奴、なんで買い物の時だけあんなに体力あるんだ…。」
それから俺達は十時の開店と同時に、デパートに流れ込み、たっぷり三時間休まず服を見て回った。
それでも梨穂子は欲しい服が決まらないのか、今は疲れ果てた俺を休ませ、一人で服を見ている。
「…相変わらず、服選ぶの遅いし…姉さんといい、どうして女ってのは、こうも時間を掛けれるのかね。…んっ？」
一人愚痴りながら、ポケットに入れっぱなしだった携帯を見ると、着信履歴が三十二件と、見たことがない状態になっていた。

「誰だ？こんな掛けてきてる奴…あれ？純一の家からだ。あっ、また掛かってきた。はい、巽です。」

「もしもし、怜！」

電話に出るやいなや、うるさい声が聞こえてくる。

「そんな大声で話さなくても聞こえるわ！…それでどうしたんだ？」

無意識に少し冷たい反応をしてしまった。

やっぱり昨日の件で、少し苛ついているのかもしれない。

「あっ、あぁ、ごめん。それで聞きたいのは梨穂子の事なんだけど。」

「…いや、それは梨穂子の家に電話した方が早くないか？」

なんて意地悪い事を言う俺に、嫌気が刺す。

「今朝電話したんだけど、叔母さんが、怜とデートに行った、って言ったから…。」

まぁそんなところだろうな。

たぶん梨穂子の大声が、リビングにいる叔母さんにも聞こえたんだろう。

「確かにそれなら俺に電話するよな。それで純一…お前は梨穂子と

何を話したいんだ？」

あまり長電話していたら、梨穂子が帰ってきちまうかもしれない、と考えた俺は、手っ取り早く話を聞きに行く。

「…梨穂子に会って、昨日のことをちゃんと謝りたい…。」

切実な声でそう語る純一。

「…じゃあ二つ目の質問な。昨日は何してたんだ。」

これは核心すれすれの質問。

「それは…「早くしてくれ。梨穂子が来ちまうだろ。」…うん。昨日は七咲と会ってた。」

しゃべりずらそうにしていたが、俺の一言で直ぐに答えた。

「やっぱ七咲か～…。それについては俺も謝るところがあるから、なんも言えないな～。まぁだからって純一を許す理由にはなんないけどな。」

ここで俺はハッキリと純一に対して、苛立っている事を宣言した。

「うん、でもそれに対して僕は何も言えないから、後で甘んじてお説教を受けるよ。」

「…そうか。じゃあラストな。…梨穂子の事まだ好きなのか？」

これこそが一番聞きたかった事…これによって、俺の選択肢も変わ

ってくるから。

少し無音が響く。

そうして純一は、再び絞り出すように

「僕は…梨穂子の事が好きだ…。」

今の思いを口にした。

「だから梨穂子にもう一度謝って…今度はちゃんと告白したいんだ！虫のいい話かもしれないけど、僕は梨穂子の事が…」

最後の方は言葉に詰まっていて、あまり聞き取れなかったが、純一の真剣な思いが、今の泣き声混じりの熱弁から伝わる。

そして俺の切る選択肢も決まった。

「けどな純一、梨穂子は昨日泣くほど傷ついたんだぞ、お前の手で。…それをお前は癒せんのかよ。」

「出来るかは分からない…でも絶対に癒してみせる！」

結局もう一つ質問したことに、何も感じてはいないんだろうな～、なんて呑気に純一の言葉を聞いていた。

「…分かった。じゃあ今から三時間後の四時、丘の上公園に集合な。純一、三時間やるから、最高のクリスマスプレゼント用意しとけ。あと服はダメだからな。ネックレスとか…装飾品とかなら案外良い感じかもよ。なんか可愛い系の服を買うらしいから、それに頑張っ

て合わせろ。あと「ちょっ、ちょっと怜！話が急すぎるよ！」うるさい。あと今駅前にいるから、他で探せよ。感動的に再会した方が盛り上がるだろ？」

バーッと矢継ぎ早に話す俺。

「怜…、怜はそれで良いのか？だって怜の好きな人って…。」

「俺にはそんな奴いないよ。俺のタイプである、面倒見がよくて、頼りがいのある年上の女性に会ったことないからな。それより早く準備しろ！これで大したもん用意できなかったら、公園頂上から突き落とすからな。」

じゃあな～、といって電話を切る。

時刻は一時過ぎ…四時頃にはきっと、二人の関係は変わってるだろう。

それを俺は直視できるのか今は分からない。

なんせどんなにその光景を思い描いても、笑顔で居続けられる俺の姿が見当たらないからだ…まぁ自分目線なんだから、見えないのは当たり前なんだけどな。

とりあえず梨穂子を探しに、再びレディースコーナーに入っていく。

すでに二択にまで絞っていたようで、俺の姿を見つけるとすぐにどちらが良いか聞いてきた。

服も無事に決まり、せっかくだからと梨穂子に着替えて貰った。

ムートンのジャケットのどこが可愛いのかいまいち分からないが、まぁ梨穂子に似合っていると思う。

インナーまで揃えるつもりらしいが、とりあえず飲まず食わずだったため、昼飯にする。

そしてその後も、約束の時間まで洋服選びで時間を使った。

とりあえずインナーを、俺からのプレゼントってことで渡しといた…まぁそんくらいいいよな？

そして四時前、俺は梨穂子を丘の上公園に誘い、純一と梨穂子を逢わせた。

俺は荷物を持って先に帰ったから、そこからどんな話をしたかは分からない。

ただやっぱり、少しギクシャクした感じは見られたかな。

「そういう訳なんですよ～。」

「あら～、純一君もカッコいいこと言うわね～。梨穂子も良い男捕まえちゃって。」

そして俺は梨穂子の荷物を届けたついでに、なんか色々聞いてきた

梨穂子の叔母さんに、今告白してる最中なんで、たぶん帰ってくるの遅くなりますよ、なんて言ったら大興奮して、話の隅々まで質問責めにあった。

昨日の事も話しちまったけど…この様子なら大丈夫だろ。

そうして俺は赤飯を作る！と勢い良くスーパーに出掛けようとする叔母さんに付いていき、ついでにその日の桜井家の晩御飯をいただいた。

食事風景は、もちろん梨穂子と純一の話が終始続いた…茶化された時の梨穂子の照れっぷりがめちゃくちゃ可愛かった。

こうして俺の一つの約束事が終わりを告げた。

それでも俺の気持ちは変わらない。

この気持ちを整理するのには、きっと時間が掛かるんだろう。

それでも俺は足を止めて、確実にこの気持ちに片を付けるつもりだ。

人から見たらただ足踏みをしているだけにしか見えないかもしれないが、俺にとってはこれが一歩踏み出すきっかけになると信じている。

そうして散々梨穂子をいじり倒した俺は、自宅へと続く夜道を帰っていった。

３２話（後書き）

はい！今回のアマガミは梨穂子さんの好きＢＡＤでした～！

…まぁアマガミ持ってないんで、流れを知ってるだけなんで細部は大きく違うと思います…

早くＰＳＰ買いたい！

この後後日談みたいなのを上げてアマガミはとりあえず完結になります。

良かったら感想お願いします！

33話（前書き）

元旦の話です

33話

別に毎日同じものを見ているというのに、どうして『初日の出』となると、急に有り難く感じるんだろう。

俺は毎年恒例となる、実家での初日の出を見ながら思っていた。

「絶対どっかの誰かが、突拍子もなく言い始めたんだろうな～。」

普段貰う一口チョコでも、特定の日に貰うとそれだけで、男子一人を悶々とさせるようなものなのだろうか。

「あけおめ～。ことよろ～。」

俺は今年も一年にお世話になる太陽さんに、完全に気の抜けた新年の挨拶をした。

そんな俺の挨拶を知ってか知らずか、太陽さんは何事もなくいつも通り光やら熱やらをばらまいている。

「太陽さんや、もう少し熱くれ。久しぶりの山形だから寒いんだよ。」

…まぁそんなこと、太陽さんが聞いてくれる訳もなかった。

「はぁ～。まぁ輝日東ですら白いんだから、そりゃ白いか。」

そんな寒い思いをしてまで、俺は初日の出を、それも毎年のように一人で満喫している。

正直山形には年に一回帰るか、といった具合なので知り合いなんて親戚しかいない。

親戚も同年代の奴ら含め、昨晩のドンチャン騒ぎのツケが来ているのか、毎年俺以外は起きてこない。

よって近年は誰かが起きてくることに期待したりせず、悠さんから借りたＭＤウォークマンを聞きながら、一人ぼんやりと眺めるようになった。

やはり今日も水色のマフラーは欠かせない。

ゆったりとした音楽をＢＧＭに、周りが殆ど雪で化粧されている風景に、溶け込んでいると、

ピリリリリ…ピリリリリ…

音楽に混じって、イヤホンの奥から着信音が聞こえた。

「なんだ？…はい。巽です。」

番号指定の着メロが鳴らず普通の着信音だったので、相手に心当たりがあるはずもなく、いつも以上に丁寧な口調で電話に出た。

「…もしもし先輩。あけましておめでとうございます、七咲です。」

電話越しに聞こえる声は久しぶりに聞く、ハッキリとした後輩の声だった。

「えっ？七咲？」

「はい、先輩。…もしかして起こしてしまいましたか？」

「いや…そんなことはないんだけど…」

きっと七咲に避けられているだろうな～、と思っていた俺は、姿さえ見せなくなっていた後輩の急の電話に、正直戸惑いを隠せずにはいられない。

「それは良かったです。たしか先輩、以前初日の出は毎年欠かさず見てる、と仰ってたのできっと起きてると思ったんですよ。電話して正解でしたね。」

不安げな雰囲気の声から、上機嫌を隠し切れてない声に変わる…なんか前より感情が豊かになったか？

「あぁ…、あけましておめでとう、七咲。今年もよろしくな。…それで今日はなんか用か？」

やっぱり気まずさを感じてしまい、なんかたどたどしく会話をする。

「いえ、ただ先輩に新年の挨拶をしたかったので電話したんです。これが先輩への人生兼今年初電話ですよ。」

それに対して、七咲はやはり感情豊かに…しかもとても嬉しそうに話す。

「そういや番号は教えてたけど、一度も掛けてきてなかったな。知らない番号だったから、新年早々間違い電話かと思ったよ。」

「それはすいません。…でもあまり用も無いのに電話するのもどうかと思いまして。」

別段悪いと思っていないような軽い謝罪をした後、少し考えてから言葉を続けた。

「まぁ確かに用も無いのに電話って…あれ、この電話は？」

さっき用はない、って言ってなかったっけ？

「ですから先輩に新年の挨拶をする目的があったんです。まぁ確かにそれは済みましたけど…。」

何かを含むような話し方をする…きっとなんか別に本題があるんだろうな…。

「…まぁいいか。七咲もこんな時間に起きてる、ってことは初日の出見てたのか？」

「はい。私は輝日東の丘の上公園まで行きまして、橘先輩、美也ちゃん、それに桜井先輩と初詣帰りに一緒に見てました。」

「…あ～、じゃあずっと起きてたんだな。眠くないか？」

「はい、大丈夫です。先輩は今から初詣に？」

「そうだな。実家の近くにある小さな所で、賽銭だけするつもりだ。」

この日のためにとっておいた五円玉×二十枚をバラまく計画を立てている。

「絵馬とかおみくじはしないんですか？」

「まぁそんな散財してもな～。叶わないものは叶わないし、運が良い日、悪い日なんて一日ごとに違うからな。」

占いとかは結構好きだが、おみくじみたいな長期的な運勢とかには興味ない。

「私はおみくじ引いてきましたよ。大吉でした。今年一年はきっと良い年になると思います。」

「おっ、それはラッキーだな。そういう良い結果は存分に期待して待ってればいいんじゃないか。」

「…先輩。先輩はいつ頃までそちらにいらっしゃるんですか？」

上手い具合に会話が成り立ってた気がするが、なんか七咲の反応が悪くなり、急に話題を変えてきた…またなんか悪いことといったか、俺？

「えーっと…始業式ギリギリまでこっちにいて、親の仕事の手伝いをするつもりだから…今日入れてあと六日かな。」

「たしか先輩のご両親のお仕事って…ホームヘルパーですよね。」

「そうそう。流石に正月は仕事無いんだけど、三日過ぎればちょこちょこ仕事が増えるんだってさ。ついでにバイト代出るからちょう

ど良いかなって。」

「先輩、頑張るのは良いですけど、無理はしないで下さいよ。次倒れたらおしおきですからね。」

こういったバイトの話になると、七咲はすぐに同じ様な事を繰り返し言う。

そんなに信用無いのか、俺は…と嘆きたくなるくらいの忠告だ。

「大丈夫だって。七咲も練習ばっかに力入れてないで、勉強しろよ。」

「先輩には言われたくありません。それに先輩に教えてもらった数学なら、クラスでも上位になりました。」

「流石俺！いや～将来は先生かな～。」

「『二次関数』を『二時間数』って書く人に、子供を預けたい親はいないと思いますよ。」

「数学に漢字は必要ない！」

「証明とか使う場面はいくらでもありそうですけどね。」

「…じゃあこれから絵馬に『かんじがこのよからなくなりますように』って書いてきてやる。」

「そういえば私、絵馬も書いてきたんですよ。」

俺の恨めしい声を軽く流して、また別の話題に変えられた。

「…へぇ〜。」

そんなだから、俺のテンションも上がらず、底値付近をうろうろしている。

「これも皆さんで書いたんですよ。美也ちゃんは『まんま肉まん食べたい！』って大きな字で書いてました。」

「目に浮かぶな…。」

「橘先輩、桜井先輩は二人して、『ずっと一緒に』って書いてました。」

「…そっか。新年からラブラブムード全開だな。これから目のやり場に困りそうだ。」

まぁその方が、俺も気持ちの整理が付きやすいのかもしんない。

「…先輩。」

先程まで聞き取りやすいテンポで、初詣の話をしていた七咲が、急に真剣な声色をする。

「ん？どうかしたか？」

気付かなかった訳ではないが、別に気にもとめず話を促した。

「やっぱり先輩はまだ桜井先輩の事が好きなんですね。」

ビシッと何かに罅が入るような音が聞こえた。

「…そんな訳「桜井先輩の話題を出す度に、先輩の反応が少し遅れていました。声も少し薄いような印象になりますし…しかもその後無理に元気を出そうとしていました。」…」

本当に七咲は凄い奴だ…電話越しで、相手の表情も見れやしないこの状況で、精確に俺の内情を探り当ててきた。

「…まぁな。まだ一週間位しか経ってないからな。まぁ今年中になんとか出来るだろうとは思ってるんだけどな。」

「先輩…私も絵馬を書いたんですよ。…なんて書いたと思いますか？」

「えっ？」

本日三回目の話題転換…きっとこれから話すことが、今日電話してきた一番の目的なんじゃないか、と無意識に反応している。

「私は『願いが叶いました。ありがとうございました。』って書きました。」

「はっ？」

なんか正直予想外の解答が出て、たまらず間抜け声が出てしまった。

「先輩、知ってますか？絵馬にはお願いを書くのと、お願いが叶ったときのお礼を書くのと二通りあるんですよ。」

「へぇ〜。…それで七咲は去年何を書いたんだ？」

「はい…去年は『もう一度先輩に会いたい』って書きました。…お願いはちゃんと叶ったんです…。」

「…そっか。」

「先輩、それと先程先輩に言われたことなんですけど、私はそうしないです。」

「えっ、何の話の時だよ？」

「おみくじの時です。先輩は『待ってればいいんじゃないか』と言いましたけど、私は待たない事にしました。」

あぁ、そういやそんな事も言ったな〜なんてぼんやりと自分の発言を思い出した。

「はぁ…まぁ頑張って「私、先輩の事が大好きです。たとえ先輩が桜井先輩の事を忘れられなくても、どんなに告白を断られようとも、先輩の事を諦められないんです。だから私…桜井先輩から先輩を奪っちゃいます。先輩の内に秘められている感情を、全部私だけの物に変えちゃいます。ですから…覚悟していて下さい。」…へっ？」

「それでは失礼します、先輩。今年もよろしくお願いします。ガチャ、ツーツーツー…」

それは突然の衝撃だった。

去年何年ぶりかに再開して、告白されて断って、姿を消して、そして新年早々また告白された…いくら状況整理したって、気持ちは落ち着いてくれない。

なんだか今になって太陽さんが頑張りだしたかのように、身体が熱くなった。

携帯をポケットに仕舞う。

景色は何一つ変わらない自然の風景が、少し違った情景に感じる。

太陽さんが熱だけではなく、光まで多めに出してくれたからだろうか…。

別に毎日同じものを見ているというのに、どうして『初日の出』となると、急に有り難く感じるんだろう。

それはきっと『初めて』というやつに、俺含めその辺の人達が酔っているからだろう。

初めての電話に、今年初めての告白…そんな初めてだらけなこの状況だから、今日の俺は酔っているだけなんだろう。

なんてったって頭が回らない、記憶が曖昧、たぶん顔が赤くなっている…完璧酔っ払いだ。

電話の途中から、梨穂子の事が気になってしょうがなかったが、今は…七咲についてしか考えられない。

この場合はどう対処したらいいのか、最善策が見つからない。

こうして俺は残りの六日間を、悶々とした気分で生活した。

…夜も寝れなくなるほど考えたのは、絶対に誰にも言わないようにしとこう。

33話（後書き）

はい、七咲さんが頑張る話でした。

たぶん七咲さんなら簡単に諦めることなく、ずるずると同じ人を好きでいそうな気がするんですよね～。

あくまで自分の考えなんで、『そんなわけあるか！』って人は罵倒を遠慮なくお願いします！

それじゃあ次の話で！

感想お待ちしておりますm（＿＿）m

３４話（前書き）

最終話です

34話

「それでね～！にぃにずっとデレデレしちゃっててさ！それをずっと近くで見てなきゃなんなかったんだよ！？みゃーも逢ちゃんもスッゴく居づらかったんだから！」

冬休み明け初めての登校日…ようは始業式の日、俺は美也ちゃんと二人で登校していた。

いつものごとく橘家で朝飯を頂こうと、いつも通り純一を起こして（最近は部屋に入るとすぐに起きるようになった）朝飯を食べていたのだが、「梨穂子と待ち合わせがある！」と朝っぱらから惚気全開な発言をしてから、急いで先に行ってしまった。

だから今日は…てかたぶんこれからは美也ちゃんと二人での登校になる。

…こうして少しずつ離れていく。

「そりゃ災難だったな～。まんま肉まん奢って貰うしかないだろ。」

今話しているのは、先日七咲から聞いた初詣の話…って言っても、殆どが純一と梨穂子の惚気話だったが…。

俺はそんな美也ちゃんを不憫に感じたので、話の腰を折らないように聞き役に徹し、あとは美也ちゃんの願いが叶うよう提案したりするだけだった。

「そうだよね、タッツー！にぃにから五つくらいは買ってもらわな

いと～…冬休み中ず～っとベタベタベタベタしてたんだから！」

まぁ話が進む度に、美也ちゃんのボルテージが上がってる気がするが、それを対処するのは純一であって俺じゃないので気にしない。

というより俺は俺でなかなかの問題を抱えているので、正直純一の事なんざ気にしてられなかった。

元旦早々の電話…あれによって俺の生活リズムは大幅にずれた気がする…。

告白に対する返事、または態度…、そんなものを考えていたら眠れず、結局何も決まらないまま今日を迎えてしまったからだ。

（七咲は水泳部の集まりが有ったりするだろうし、今日は始業式だけだから顔合わす確率は低いはず！）

「よしよし…、しゃーないから俺も何か奢ってあげるから、機嫌直しなって。なっ？」

「ホント！？やったやった～！それじゃあね～ニシシシ！」

俺からのプレゼントがそんなに嬉しいのか、美也ちゃんは子供のように大はしゃぎし、そのまま俺の右腕に抱きつきながら猫のように笑っている。

腕にギュッとしがみつく美也ちゃんに正直恥ずかしさを感じなくもないが、ここで振り払うのも可哀想かな、っと思いなすがままにされていた。

何となくなんだが妹がいたらこんな感じだったのかな～、と思ったりしている。

「みゃーね、新しい服が欲しい！」

「そりゃ無理だ…」

そういうのは本物の兄貴に頼んでくれ…。

「あっ、逢ちゃ～ん！」

ところがやはり現実なんて…、と愚痴りたくなるほどタイミングは悪いもので、前方には見覚えのある後ろ姿があった。

校門を抜けた所で美也ちゃんが前方に向かって大きく手を振り出した。

そしてそのまま駆け足で前へと向かう…もちろん俺も手を捕まれて一緒に走らされる。

「美也ちゃん、おはよう。先輩もおはようございます。」

「おっ、おぅ。七咲、お…おはよう。」

「タッツー？どうかしたの？」

「クスッ…、本当にどうしたんだろうね？」

意地悪い笑みを浮かべつつ、七咲は美也ちゃんの隣ではなく俺の隣に立ち、鞄を奪い取ってから空いた手のひらを握ってきた。

手袋越しの美也ちゃんと違って、直に七咲と手を握っているので柔らかさや微かな温もりを感じて…正直少しドキドキしている。

「っ！？二人とも…恥ずかしいんで離してくんない？てか離せ。」

両の腕をぶんぶんと振り回すが、二人とも手のひらをギュッと掴んで離さない…むしろ喜んで腕を振っているくらいの感覚みたいだ。

それでも俺は今すぐにでもこの赤面必死の状況から逃げ出したいと、腕を振りつづける。

「離して欲しいですか？そうですね…美也ちゃんが離したら私も離しますよ。」

「じゃあ美也は逢ちゃんが離したら離すよ！」

「お前ら口裏合わせてるだろ～！」

両方から、一つは控え目な、もう一つは元気な笑い声が聞こえる。

結局二人は校舎に入るまでけして離してはくれず、その間周りから痛いくらいの視線を浴びていた…。

どうやら七咲も本当に元気を取り戻しているみたいだ。

教室に入るとすぐに、同じクラスの男友達数人にふるぼっこにされた。

それはもう完膚無きまでに手加減なく…今度は今朝の事らしい。

でも兄貴が近くにいるのに、「俺達の美也ちゃんにまで手を出しやがって！」なんていきり立って、何をアピールしたいんだ…。

「いってー…本当に今日は運悪いな…。」

「あら、怜。男前の顔してるじゃない。」

ズキズキと痛む顔に濡らしたハンカチを当てて、机に肘を突いて座っていると、にまにました顔で悪友が近付いてきた。

「薫には負けるよ。」

「じゃあ勝てるようにもう少し整形してあげようか？」

いつも通りの条件反射がやはり今日も出てしまい、そして今日もただ薫のボルテージを上げるだけの結果を得ている。

「…まぁ冗談はこの辺にしといて、「あらっ、私は本気だったんだけど。」置いといて！あけおめ、ことよろ、薫。」

一歩道を間違えればすぐさま暴力が迎えるダンジョンをかなり強引に抜け出し、薫に新年の挨拶をする。

俺は山形に帰っていたので、クラス全員に新年の挨拶をしていないので、今日はちょっと面倒くさいな～、などと考えながらも会う人会う人に挨拶をしている。

「あけおめ～。これで満足かしら？それじゃ覚悟は出来た？」

「ちょっと待て！覚悟ってなんだ！？てかなんで『今年もよろしく』がない！」

「『今日まで楽しかったわ…』ごめんね、言うの忘れて「お～い！梅原～！久しぶり！明けましておめでと～！今年もよろしくぅ～！」チッ…逃げられたか…。」

ガッチリと握り拳を作りながら仮初めの謝罪をする薫の隙を突いて、たった今登校してきた梅原に全力で挨拶しに近付いていった。

「おう、怜。久しぶりだな。ん？なんか痩せたか？またもやし生活送ってるのか？」

「いや～、ちょっと悩んでてな。梅原もなんか少し元気ない感じがするけどなんかあったんか？」

表面上には特に問題は無い挨拶なのだが、言葉の端々に元気のなさが感じ取れた。

伊達に梅原とも幼なじみやってない。

「うっ！？…なぁ…大将の奴いつの間に桜井さんと付き合いだしたんだ…？登校中からイチャイチャオーラ全開で、声もかけれなかっ

た…」

梅原はどんよりとしたオーラ全開で、ぼそぼそとこの世に絶望したかのように話してくる。

「朝っぱらからあれを見たのか…それは気分もブルーにもなるよな…。クリスマスからあいつらずっとそんな調子なんだよ…本人たち曰わく、これくらい前からだよ、らしいがな…。」

十二月二十六日…まぁクリスマスの次の日、いきなり三人で遊ぼうと誘われ、何度御馳走様と言わされたか…。

「ちくしょー！俺だって絶対先輩とイチャイチャしてやる！次に悔しがるのは純一だ～！」

そうして梅原は鞄を持ったまま、廊下の先へと走り去っていった…いや、純一は彼女いんだからそんなに悔しがらないだろ。

…オレハゼンゼンキニナラナイデスヨ。

「怜、昼飯一緒に食べないか？」

昼休みになり弁当を持って廊下に出たところで、純一に呼び止めら

れこんなことを言われた。
すぐさま頭の中によぎる決まりきった未来の映像…仲良く食べる二人を前に一人寂しく食べる俺。
「やめとく。昼くらいリラックスして食いたいからな。」
「僕とだとリラックス出来ない、ってことかよ…。」
「だってどうせ梨穂子と一緒だろ？」
「それはそうだけど…。」
「…お前等はそんなに惚気を見せたいのか。そうかそうか、つまりは二、三発なら殴られる覚悟があるとそういうことか。」
ボキボキと指を鳴らす。
「り、怜？なんだか笑顔が凄く怖い…よ。そんなに僕と食べたくないのか？」
俺の威嚇にビビったのか、少し後ずさりする純一はまだあきらめず、俺を誘ってくる。
「そういう訳じゃないが…」
とっさにＮＯと言えない自分が出てしまい、形勢が悪くなる。
このままだときっと、純一に粘られる→梨穂子登場→二人で粘る→折れる→イチャイチャパラダイスになるのは目に見えている。

誰でも良いから…この状況を好転させる…神様でも悪魔でも何でも良い…誰か……グィ。

「駄目です、橘先輩。先輩は私とお昼食べるので、諦めて下さい。」

…小悪魔きた〜！！

「じゃあ行きましょうか、先輩。」

いきなり腕をグイッと引っ張られ、そのまま連れ去られる。

呆気顔をした純一の姿がどんどん離れていく。

腕を引っ張る七咲も耳が真っ赤になっているのが見える。

周りの視線もやはり痛い。

俺は無心になって、ただただ引っ張られていく…周りの目なんて気にしない気にしない…。

「で、結局屋上なんだな。」

「先輩との思い出の場所ですからね。」

…そんな臆面もなく言えるようになったんだから、立ち直ったと言えるのかな？

「今日は自信作ですよ。お母さん直伝のだし巻き卵です。」

「うわっ、キラキラ輝いてる！まるで金色の宝石や～！」

「…私あまりその人好きじゃありません。」

「…なぁ七咲？」

「はい？」

「俺…全然付き合う気ないぞ？」

「そうなんですか…。じゃあまた明日頑張ります。」

「…俺、心変わりしないかもしれないぞ？」

「人間の心は絶対ではないので、強引にでも変えて見せます。」

「はぁ…もういいや。」

「はい。じゃあどうぞ。」

七咲は手に持っていた可愛らしい小さな弁当を俺に渡す。

「あっ、サンキュー。」

「あとお箸です。どうぞ。」

七咲から黄緑色の箸を受け取ると、すぐさま美味しそうな香りを醸し出した弁当にがっついた。

「うん。やっぱり美味いな。特にこれが美味…」

「？」

「あぁ、…えっと…七咲、…好きだぞ……このだし巻き。」

梨穂子のどこが好きなんだろう。

可愛らしい所？

優しい所？

雰囲気？

料理得意な所？

よくよく考えてみれば、はっきりとしたことは分かんないな。

じゃあ嫌いな所は？

純一を選んだ所かな…。

あとそれなのに俺と会うことになんも躊躇いないこととか。

じゃあ好きになった理由は？

…それも分かんない。

ただいつも傍にいて、優しく微笑んでくれて、それを見てるだけで心が満たされていくのを感じた時に、初めて意識した気がする。

じゃあ七咲の好きな所はどこだ？

真面目な所？

優しい所？

しっかりした所？

料理得意な…これはもういいか。

じゃあ七咲の嫌いな所は……見当たんないな。

それでも七咲と付き合う事が出来ないのは分かる。

絶対に付き合えないのだけは分かるのだ。

付き合ったら、絶対梨穂子と比較してしまう。

恋愛なんてそんなもんかもしれないけど…それでも俺は嫌なんだ。

これからも七咲を比較して、どこが良いのか悪いのか見てしまう。

それでも…そうだと知ってもあえて近付くことを選んだ。

俺はその手を掴むか、他の手を掴むかは分からない。

どのような選択をするにしても…俺は梨穂子に今後を左右されていくのだ。

…もしかしたら誰の手も借りず、受け取らず生きていくのかもしれない。

この晴れ渡った空の下、隣には後輩の女の子。、２人っきりで飯を食っている。

会話も弾み、上々の昼飯になっている。

一年後の昼飯はどうなってるのか？

五年後は？十年後は？

そんな誰も分からない遠い未来の光景を…

黒髪の子と笑いながら過ごしている。

そんなことを幻視した真冬のとある日常だった。

３４話（後書き）

…最後なのになんて駄文なんだ……ｏｒｚ

えっと…最後まで読んでくれた方、もしくは偶々最後だけ見てくれた方、いやいや後書きだけ見た方、この駄文にアクセスしてくれてありがとうございました！

これにて『アマガミ　αの作る結末』は終了です。

おかげさまで、この小説のＰＶが１３万（１０月９日現在）を越えるほどのものになりました。

…皆さんよっぽど時間をどぶに捨てたかったんですね！

最初は第二部みたいにして続きを書こうとしていたんですが、心変わりしまして、たぶん書かないです！

でもアマガミのＳＳ書きたいな～…くらいには思っていますので、その時はまたお願いします！

それではまた機会がありましたら！

ご精読ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0445n/

アマガミ αの作る結末

2011年1月20日00時38分発行